

●三塔 叡山をいふ。

●擬寶珠 橋の欄干の柱の頭にあら飾なり。青銅にて形は葱の花の如し。

引除け、太刀拔放つて詰つ、開いつ、潜つて斬れば反
向て外し、裾を拂へば足を溜す、宙を拂へば首を地に
つけ、三塔に隠れなき長刀の達者と、僧正坊に授りし
打物の名譽と、甲乙分目の戦ひは巢立の鷺の 地若鳥
と、深山を出し荒熊が、野邊に争ふ 三重 如くにて、
フンさしもの辨慶 地あくんで見えしが物々しく小冠者
めと、疊みかけて打つ處を擬寶珠に飛上り、片足かけ
て長刀を、からりと踏で踏落す、さしたりと駈寄つて
取らんとすれば打物取のへ辨慶が、押付をしつかと押
へ、 詞何と御坊應へたか、我千人斬を思立ち根性見届
け下人にせんと、九百九十九人斬る、汝程の健氣者に
出合す、 地主従になるべきか我こそ左馬頭義朝が八男

牛若と名乗給へばヤア、願ふてもない主君、 詞我等は
熊野の別當辨眞が一子、武藏坊辨慶と申者、清盛に頼
まれ君討奉る筈なれども、約束變替世の習ひ、 地今日
より生々々々お主と頼み奉ると、降参すれば御悦び、
主従三世の縁のはし、五條の橋の橋柱きぶといお主根
強い下人と、薄衣被け長刀擔げ、立歸らんとせし處へ、
詞難波の次郎が弟難波の十郎經時、夜廻りの足輕二三
十、洛中惱す天狗冠者、討手に向ひし悪魔坊主が一味
せしは、地あれ討留めとどつと寄る、新参の喜三太、
見え隠れの供せしが其處御退と突と出、是體に御太刀
を合されんは勿體なし、下拙こなし申さんと面も振す
斬りかくる、 詞難波の十郎きつと見て、彼奴は御既の

喜三太め、をのれも暴者の同類か、チ、我は馬の口も取り、時々人の首も取る、嘘なら取て見せうかと、
地駈寄せく、雑兵の、兩足小腕引、橋の下へ取て
 投げ取て投げ、七八人投ぐるを見て、フシ皆散ぐに失せてけり、地されども十郎踏留め只一打と打つ太刀を、引外いて裏へ抜け後抱きにむんずと締め、指上て橋板にどうと打付け太刀もぎ取り、首搔落す早業は、實にも下郎の手鑑と、フシ末世に残るも道理なり、地牛若ましく勇みをなし、出来たく一人不足の千人切の、數に入れてくれんとあれば喜三太頭を掉て、調いやいや君の數には恐れなり、我等御奉公の手見せ蠅同前の難波の十郎、其の十の字に蠅が留れば千人斬と、地主

●香鵲天 香邊扁鵲といふ天竺支那の名醫あれば、折衷して宋醫に附したるものなるべし。此の所、「源平盛衰記」より取れり、但し盛衰記には、清盛入道自から來らず盛次を使としていはしめたり。

從どつと笑ひの聲、雞は八聲の凱歌や曉近き、三重松の風、フシ無常の嵐吹きすさふ、小松殿の御病體日にしたがつて頼みなく、限り近しと聞えしかば、一門いふに及ばず、公家武家町人農人まで、六波羅に群參し、眉を擧むる折から清盛入道御入なりとありければ、惟盛資盛迎ひ參らせ、枕元に請ぜらる、チやうくも、やゝ涙ぐみおはせしが、調御邊の所勞大事の由、當家他家の歎きなり、然るに此度宋朝より者鵲天といふ名醫日本に渡り、病人の顔色を見て肺肝を知り、聲を聞て六脉を察し、一粒一七の薬を與へて、死したる者を蘇生らせ、長生不死の壽命を授くる事、恰も神の

神の如し、則ち其醫者召連れたり、脈を見せ薬を受け、
 本腹の色を見せて給へ、入道無病息災の身なれども、
 唐土の醫者の名方、不老不死の薬を、はや一廻り飲
 だれば千年の命は慥なり、又二廻り服したらば二千年
 は生延ぶべし、假へ萬々年にも入道ばかり存らへ、
 孫子の跡のとひ弔ひやかましむづかし、御邊も共
 に生て給へ、耆鵠天是へ召せと宣へば、今を限りの重
 盛公、起直つて暫く、其唐土の醫師が不老不死
 の薬を、父禪門ははや聞こし召され候か、中々常に身
 を放さず、夜に三度日に三度用ゐるなりと宣へば、重
 盛公涙をはらくと流し、地ア、浅ましや平家の運命
 盡果て、世は魔道に落けるかや、
 詞それ乾坤の間に生

●三界の教主大覺世尊 「源平盛衰
 記」彼の書婆が醫術及ばずして、
 釋尊涅槃に入り給ひき、是即ち定
 業の病いへざるを示さんかため
 なり、治するは佛體なり、療する
 は耆婆なり、定業なほ醫術にかゝ
 はんべくは豈釋尊入滅あらんや、
 定業治するに足らざる旨明けし、
 然れば重盛が身體にあらず名醫ま
 た耆婆に及ぶべからず云々、大覺
 世尊は釋迦のこと。跋提河は天竺
 拘支那國の城南百里にあり佛入滅
 地。

●秦始皇は不老不死の薬 秦の始
 皇二十八年東海に遊びし時、方士
 徐市といふもの上書して、童男童
 女を率ひて蓬萊方丈瀛州の三神山
 の仙人及び不老不死の薬を求めん
 こと乞ふ。始皇之をゆるして其
 の言の如く徐市を遣はして仙薬を
 求めしめたれど、徐市は遂に叛ら
 ず、始皇はやがて命盡きて崩御あ
 りしなむ。

●碧落 天のこと。
 ●黄泉 地下のこと。
 ●外道 佛法の教義に乖き、自個

を享け、形あるものは天命あり始あれば終りあり、
 地三界の教主大覺世尊、耆婆が良薬適はずして跋提河
 の涅槃に入り給ふ、病者は佛體醫師は耆婆、定業の天
 命、薬によらば釋尊入滅あるべきか、秦の始皇は不老
 不死の薬を得んと、上は碧落下黄泉を探せども求めず、
 但天竺の外道の法は億萬劫を有ち、中華の仙術形を離
 れて、氣を食ひ風を飲み千歳を延ぶれども、地生死の
 悟を得ざるゆる六道の苦輪を廻つて地獄に陥ると承る、
 我朝には天狗の法、我慢高慢の人の心を栖家として、
 善根を憎み悪行を悦び、夜に三度日に三度鐵の熱湯を
 飲む苦しみに天狗道成就し、生もなく死もなし、此魔
 法の外三國に不老不死の薬候はず、疑もなく愛宕鞍馬

散理の徒の外教に封着するもの
いふ。又心外に法を求むるもの
の妄情に隨ひて内覺に返らざるを
いふと。たとへば道學の如き佛法
より見れば外道なり。此外道の教
を奉ずるものは億萬劫を有つとい
ひ、或は支那にて仙術とするもの
は、常に千年以上の壽を有つとい
へども、遂に無常をのがれず、佛
の道を願はざる時は冥途暗くして
六道に歸るべしといへり。

●天狗の法 佛説には天は光明の
義、自在の義にして佛果を表し、
狗は痴闇の義、不自在の義にして
生界を示し、生佛不二の名なり。

されど俗説にいふ天狗とは、一種
の神にして、人の慢心に宿り、他
を陥れ、自ら高からんとして憐憫
たる苦みは、さながら熱湯を呑む
の苦しみに似たり。彼の鹿を逐ふ
獵師山を見ざるが如し、彼等には
生もなく死もなしとなり。

●五戒 殺生、偷盜、邪淫、妄語
飲酒、これ五戒なり。五常は仁義禮
智信。

●出離生死 佛説に人は生死に繋
まれて苦むものなれば、此の生死
を離れて心を高風清月におき、ひ

の大天狗、平家の驕りを加擔人に、世を覆さん天魔の
魅り、其藥重盛に見せ給へ、生を貪る愚蒙の目には良
藥と見ゆるとも、五戒を保ち五常を修め、正法を守る
重盛が清淨の目にかゝらば、藥の邪正は顯れん、假し
は誠の藥にもせよ、位太政大臣に經上り、日本六十六
箇國三十餘國は平家の知行、齡六十に超え給へば出離
生死の御營み、無上菩提の願ひの外、何不足の候て、
煩惱業苦の浮世に長命の御願ひ、淺ましきよと計りに
て又咽かへり給ひける、調入道嘲笑ひ、又癖の生悟り
其心より煩らはるゝ、御邊は兎も角も此入道は文盲な
れば、藥を服て長生せん、地それそれとありければ、
輿の内に入れられし唐桑の櫛匣より、堆朱の香箱御前

たす、菩提の道に入る事をこそ御
願ひ給ふべきに、却て煩惱業苦の
婆娑に長命を希ひ玉ふとは以ての
外なりと。

●熊野權現に祈誓 治承三年三月
の頃重盛夢に父入道の首の鹿木に
かゝるを見て平家の滅亡を覺り、
同年五月公達を引具して熊野本宮
に參詣し、權現へ壽命短縮の祈願
なかけたりといふ事「盛衰記」に見
えたり。

に差出せば、入道慎み頂戴あり、蓋を取らんとし給ふ
時、香箱の内燃え出て火焰烟を捲上げ、微塵に碎け飛
ぶ音は、瓦礫を割るが如くにて、流石の入道色變じ上
下、身の毛を立たりけり、地重盛涙を押へかね、御覽
候へ天狗の所爲、毒氣五體に染渡り大熱病を受け給ひ、
火の病となつて御命を取らん事三年とは過へからず、
それより平家の運命傾き、源氏に世を切取られ、今の
榮華は引かへて、一門屍を晒すべき、重盛が未來記は
其時思ひ知らるへし、淺ましきの運命やはかなき平家の
行末を見んよりも、重盛が命を取てたへと熊野權現に
祈誓をかけし病なれば、藥も療治もかなふべきか、臨
終も早や今宵の中と存ずれば、これ今生の親子の別れ、

●正念 想を捨て實に入るをいふ。

●瀬尾太郎 瀬尾太郎兼康、重盛
の士。

心の亂れぬ其中に、正念の床に坐し、淨土の道を踏分
て、御菩提の下種し奉らん、さらばくくと涙に暮れ、
御子達の方に添ひ泣くく佛間に入り給ふ、平家の柱
折れたりと、惜まぬ者こそなかりけれ、地入道
相國大きに怒りすつくと立ち、詞ヤア、愚なり内府の
詞、此清盛が勢に、木の葉天狗の魅るなど、は思ひも
寄らず、地源氏の奴等が業ならん、唐人醫者め引立來
れ、詮鑿せんと宣ふ處に、辻風さつと吹來り、梢を鳴
し木の葉を捲き檐を破り瓦を飛し、遣子障子を吹折て
震動するぞ、三重、恐ろしき、地御供の瀬尾の太郎顛ひ
罷出で、彼の唐土の醫者一丈餘りの鳶となり、
車輪の如き翼を廣げ風を起し雲に乗り、地鞍馬の方へ

●主馬判官盛國 主馬盛久の父。
●唐土育王山云々 重盛奥州知行
の時氣仙郡より金子三百兩を献じ
たれば僧妙典に百兩を與へ、千二
百兩は之れを唐土育王山へ納め我
菩提を申ふことを托したりといふ
盛衰記。

飛失て候と、申す間に空晴て、フン風おさまるぞ不思議
なる、地入道大きに仰天あり、さては小松が詞に違は
ず、天狗に毒氣を吹込れた、三年の内火の病で死ぬる
とや、三年の経つは今の間、入道死ぬるかア、さて是
は何とせん、エ、死ともない、詞妙樂はあるまい
か、天狗のあたつた療治はないか、地誰ぞが高い鼻を
刺で煎じて服で見やうかと顛倒愁傷うろくと、フン狼
狼給ふぞ見苦しき、詞ア、思ひ付たり、黄金は毒を消
す、先年奥州の黄金三千兩、内府が庫に籠させたりそ
れ取出せと宣へば、小松の執權主馬の判官盛國罷り出
平家の御運末危く、日本にて御一門の跡弔ふ人もある
まじとて、唐土育王山佛生禪寺の御寺へ、地祠堂に御

●唐へ投金 此の頃の俗諺にて役立ぬ金遣ひの譬なり。金銭を海中に捨るの類。

●蛭小島の悴 伊豆國三島の南二里にあり。賴朝十四歳にして此地へ流さる。故に蛭小島の悴といふ。
●鞍馬山の童 牛若のこと。

渡し候と、言もあへぬに飛蒐てしや首取てひつしやぎ、
詞主が主なればをのれまで馬鹿律義、目前日本の寶を
見えもせぬ後世の爲、異國へ渡すうつけもの、それこそ
唐へ投金といふもの、入道が命三年切り、存命の間
に源氏の末葉根を絶やす、地軍初の血祭と肩を踏へ盛
國が、警を擱んで曳うんと、首引抜てかつばと投げ、
サア常盤御前も討て捨て法皇を流罪に沈め、蛭が小島
の悴め鞍馬山の童を始め、片端に攻伏せん馬に鞍置け
物の具せよ、入道年は寄たれども、保元の弓勢平治の
太刀風、草木も靡かす赤旗を眞先に押立て、三軍心を
一致にして、親が進まば子も續け、兄が引かば弟は駈
けよ、主が討れば下人は飛超え、先陣討れば後陣が乗

●天冤 四冤の一。
●心冤 我慢の心。十冤の一。
●邪冤 邪道又は外道の如きをさしていふ。
●四冤 蘊冤、天冤、死冤、煩惱冤之を四冤といふ。又十冤といふものあれど、其のうち悪冤、邪冤の稱なし。

●源は濁れて云々 昔は源平並び立ちて王家の守護に任じたるもの今や源氏は滅びて平家ひとり繁昌せるを形容したるなり。

越へ跳越へ、隙をあらすな息つがすな、無二無三に攻
め入らば、秋津島は扱置ぬ、鬼界高麗百濟國南蠻北狄
残りなく、平家の下に附けん事、案の内に覺えたり、
小松が別れ悲んで、心落すな憶するな、勇めや勇め一
門と、中門の歩の板どうく、どうくどうと踏鳴し、
物に狂ひの勢は、悪魔天魔邪魔心魔四魔の首領の僧正
坊、大天狗の所爲なるはと鼻にあらはれ見えにけり

第二

地源は濁れて埋れて濁江の、水に離れし魚とかや、源
氏侍方々の、底の藻屑に身をそばめ、何時世の中に這
ひ出て、甲を乾すべき知邊なき龜井の六郎重清、晝は

●鹽梅よし 元祿寶永頃の草子中に見ゆる詞なり。豆腐の田樂を製し、鹽梅よしと叫んで、市中を賣歩くより、世人これを鹽梅よしと稱したり。

●四十八串彌陀の誓願 四十八願の既の説けり。爰は四十八串といふを阿彌陀の四十八願になぞらへたるのみ。

●阿彌陀の光 *

人目も烏羽玉の、小行燈さへ身の油、荷ひ賣する身代は吹ば散てふさゞれ砂、蒟蒻豆腐の鹽梅よし、フン鹽梅よしとぞ賣歩く、詞ア、今夜も月は八ツ前、扱も賣れぬ事かな、蒟蒻は今夜喰いでも明日迄も置くゝが豆腐が廢る、一丁を二十四に切り、二丁で四十八串彌陀の誓願ア、何處ぞに阿彌陀の光りはせぬかい、賣て退けたいな、ム、南無阿彌豆腐なまいた、あゝなむあいた、地 仇口念佛高堀より、若き女の顔出し、詞はおじやつたか、地 宵からたんと待焦れたと、忍びやかに呼はる聲あいく、すんど焼立味噌べつたりのぬくく、願が落まする十串ばかり上ましょかと、いへば女はア、うるさ、フン違ふたげなとて入にけり、詞ヤア聞えた、

●對の家 禁中又は貴族等にて女房の住む長局を對の家といふ。

●御すもじ 御すもじの畧。

●てんがう *

此處は清盛が手かけ共を置く對の屋の裏と聞く、清盛の古入道が、鹽鮪頭に喰飽て生いを好むいたづら女の念佛合圖の男引入れ何でも好い慰みと、打仰向てなまみだア、南無阿彌陀、フン南無阿彌陀ふと張上れば、地 以前の女これく來てか、何として遅かりしぞ、待ぼうけに氣が盡た此處へくと小手招ぎ、さし心得てア、待身より待たるゝ身の、千々の思ひを御すもじ宵から賤が魂は、扱て其様のお袖にと思はせ振の言葉つき、詞 エイいやらしい何ぞいの、てんがうも折による、コレ是に大事の地お形見ありと、袋一個投出し見咎められてはむづかし、早ふくといひ捨て、フン女は隠れ入にけり、地 龜井案に相違して、詞 必定是は盗み

●螺鈿 らでんは俗に青貝として、種々の貝殻の裏をいろ／＼の形に切り之を器物又は漆器の表面に嵌入したるもの、下文に青貝蒔繪の宝箱とある是なり。

●やうでう 横笛のこと。「義経記」に曰く「白き大口に白き直垂に紫染紐つけて、折烏帽子のかたしなきつと引きたて、松風と名づけたるかん竹のやうでうを持云々。又十二段草子にもぬなはは物うき所かや、管弦にやうでう一管なきことよ、笛がなくなつて吹かざるや、笛はあれども吹く人なく吹かざるや云々」。

●小結の烏帽子 少年の被る烏帽子の一種。

●雲の空箱 「大筑波集」に、寶をば身にあまるほどもちにけりといふ句に、こがれ作りのたちのそらさやとあり。

●二ぶつの中間 二佛の中間にて釋迦は去り彌勒は未だ出世なき間のことといへど、俗に此の謬を使ふ時は二佛を二物にしていへり。但しこは「狂歌咄」に、細川玄旨

物後の難儀になるまいか、何うか斯うかと分別袋、口を解けば螺鈿の宝箱に、やうでう一管小結の烏帽子、五色の糸にて様々の縫物したる垂直大口共に畳みこめられたり、いか様よしある公達の御装束、不思議に我手に入る事、武運聞けてよき大將、主に取るべき瑞相と歸り支度する處に、赤銅鍔も物錆て雲の空鞘剝廻り、月山の端に二合半、もつそう頭の奴が聲、なまみだはよなまみだ、南無阿彌陀ぶ南無阿彌陀、堀を見上げて高念佛、立留りては又念佛、フシこれぞ二佛の中間なり、詞これ鹽梅よし、今身が様に此處を、念佛申して通つた人はなかりしか、あの高堀から女中などは見えなんだか、さればく私先程ふと念佛申したれば、堀の上

の召使ひける中間あり、長大に肥えて心は正直なりければ、異名大佛と呼びたまひ……法師になりて侍らばやと望みける故に許されて髪を剃りたるがきはめてにげなく見えしを御前に召してかくぞ聞えける、大佛かしらなそりて又佛これぞ二佛の中間の果」と此の狂歌を取りしなり。

より美しい女中が、なふおじやつたかとぬつと出、ハア違ふたとてぬつと引込み、それより念佛申す人一人も通られず、此方の念佛待てそふなと、翔るも知らず打首肯き、なまみだぶく、なまいだく、くくくア、喉が痛い湯はないか、いやく湯も茶も仕舞ふた、唐辛味噌はあるけれど、是では咽て堪るまいと賣物擔げ逃んとす、詞これ待てくと引留め、大事の手筈の念佛一人の聲は届かぬさうな、同音に申してくれ恩を請ふ頼むといへば、お安い事じやが宗旨が違ふた御免あれ、そふはいはせぬ只た今念佛申したではないか、いや只今は魚食ふて口が生臭い、地明日來て申て進ぜうと、駈出る拐引合て袋どうと落たりけり、

さてこそく先へをのれが仕てやつた、いきがたりめ
 と言すてよ、抱へて走るを引たくり、をのれこそ横取
 のとつこの革、拐の胸打頂くかと、振上ればチ、サ如
 何なりとせい、嗣身が旦那は浪人母御よりの御形見、
 命がけて大事の物戻て旦那出世の後、屹とお禮に與る
 か無理取して首を切らるゝか、勝手にせいと怯まぬ體
 龜井も流石心憎く、ム、慥とそれが定ならば、袋の中
 に何があるいふて見よ、違はずは其方にくれふといへ
 ば、中間些とも臆せずそれを知らいで好いものか、青
 貝蒔繪の手筥に小結の烏帽子笛一管、五色の絲の繁縫
 の直垂大口ある筈、何んと違ひはあるまいが、ム、然
 らば笛は如何様の笛なるぞ、チ、吹けばびい〜鳴る

●吳郡の綾の元渡り、綾は往昔吳國より我國に渡來し、其の後も絶えず吳國より輸入するのを上品とし、而も其の古渡りを貴べるよりしがいへるなり。但しこは貴重なる絹といはんまでの形容のみ。

●山鳩色 濃き黄色。

●十二の菊綴 これも「十二段」の趣を少し變じたるなり。同書「下の袴まはりには、おぼろげなこふるさくからす、きく綴には、日本

笛よ、ヤイ鳴らぬ笛があるものか、竹の格好言ふて見よ、されば竹は寒竹、節込て蟬の形に小枝を切て残されし、是に違ひはあるまいぞ、然らば直垂大口の縫模様は何々、地は何色と問ひければ、チ、言ふて聞せん、よつく聞け

模様盡し

其直垂は紗綾綸子綴子襦袢の類ならぬ、吳郡の綾の元渡り、山鳩色は薄紅まぜてさつと一刷毛、フシはかせかけたる八重飛白、八色五色の組絲にて、地十二の菊綴四ツの紐付、蜻蛉結び蝶結び、雌蝶雄蝶の翼を學び、番ひ結びに結はれたり、右の肩の折目より、左の袖の

名譽の花結びが結びたるとおぼし
 くて、さうのきくとおぼしは梅と櫻
 を結ばれたり云々。菊は直垂
 などの縫留に組結を綴り付け其の
 餘りを縮れ、押しひらめて菊花の
 如くしたるもの

●鞍馬は大悲多聞天 以下は右の
 肩の折目より、左の袖の外れまで
 都の風景を縫せたりとなり

●脊筋に源氏の氏神正八幡 「十二
 段」弓手の肩より下には、正八幡
 の御社壇とおぼしくて鳥居をさも
 あざやかに縫はせたり云々。

外れまで、鞍馬は大悲多聞天加茂の御社糺の森、貴船
 松の尾梅の宮、高き尾山に愛宕山、フシ麓には三國一の
 釋迦如来、藁を並べし景色を、手を盡し氣を盡し上手
 を盡して縫れたり、背筋に源氏の産神、岩清水正八幡
 の宮所、朱の鳥居は赤き糸、瑠璃の玉垣瑠璃の糸にて
 縫るゝ、百八間の廻廊に、二十四孝八景の彫物を移し
 て、一と間くんに錦糸を入れ、鷺に澤瀉葡萄に栗鼠、
 車に螻蛄きりくく、桐壺、帚木若紫、是も源氏の壽
 の、フシ御代を祝ひて縫ものせり、腰に緑の千本松、白
 鳩千羽雛鶴千羽、竹の小枝と子の日の松、ひつくはへ
 く、梢々に巢をくふ體、源氏の白旗百旒平家の赤
 旗百旒、威勢を争ふ山嵐、神風山風沖津風、平家の

●唐のましも千匹 ましはましら
 即ち猿のこと。「十二段」うしろ
 のぬひ物には、唐土の猿と日本の
 猿とを縫はせたり、たうどの猿
 は大國なれば、せいも大きにおも
 ても黒く見えたり、日本の猿は小
 國なれば、せいも小さくおもても
 赤く見えたりけり、唐土の猿は日
 本へ越さんとす、日本の猿は唐土
 へ越さんとす、唐土日本の潮さひ
 ひなる、ちくらの沖にて行違ひて、
 越さう越さじの境をば、物の上手
 が秘曲をつくし縫ひてあり、此の
 外「十二段」の文を取り入れて、新
 に筆を加へたる所多し。

赤旗さつくく吹拂ひ吹纏ひ、八重の汐路に退く汐
 の、フシ浪間を照す白旗は、朝日と輝く雲の色、金銀の
 糸にて縫はれたり、大口袴の裾の縫ひ、唐のましも千
 疋、日本のましも千疋、唐土の猿は大黒にて、尾を長
 く色薄く、形大きに縫れたり日本は小國の、顔をませ
 くませの小猿の、ずんと小猿の猿、さるくくこ
 け猿小猿が、唐と日本の汐境、ちくらが沖の 地沖の
 小島の、波にしよぼ濡て日本の方へ、越すを越させじ
 越さん越させじ我慢の相、天下分目の軍を學び、針目
 正しく糸筋清く、縫仕立たる直垂を、我朝にて着る人
 は我等が主人ならずして、又と二人あるべきか、フシサ
 ア渡せとぞ申ける、 地龜井一々聞につけ、これ八幡の

引合せと小聲になつて、調さて覺えたり申したり、お主と申すは源氏方の由縁よの、我は紀州熊野の住人、龜井の六郎重清といふ代々源氏の下人筋、主君と頼むお方あらば、引合せたべといへば喜三太悦び、ム、聞及ぶ龜井殿か、地我等がお主と申すは義朝の八男牛若君、御母常盤御前を清盛入道害せんとの催しゆる、此所を忍び落ち給ひ、此お形見を若君へ届け申せとの相圖にて、さてこそ斯様の次第なり、君は近日奥州へ御下向なり、追付後より下り給へ、調某は喜三太と申すお馬取、豫て御披露仕らん先づそれまでは穩便に、其儘其商ひして豆腐に申をさすとも、腰に刀は指まいぞと 地袋擔げて別るれば、龜井悦び打領き兎角御前は

●さやか 明白なること。これを豆の鞘にかけたるなり。
●戀塚 鳥羽の戀塚。遠藤武者盛遠の爲めに殺されたる源波が妻姿御前の塚なり。上鳥羽淨禪寺の門前にあり。

好い様に、追付下つてお目見えし、多勢の軍兵勢揃へ、打て上る程ならば主と下人の鹽梅よし、源氏の運は鹽梅よしの、豆腐の豆のさやかなる、月に別れて 三重 歸りける、フシ戀塚を、隣に住ば藁草の、焼餅茶屋の、妹背まで色を酌茶の女夫合、地夫は京へ小商ひ、草鞋も妻が手作の、情の鼻緒足軽く朝夕飛で鳥羽の里、名所は人の氣も優し、チクリまだほのくの朝霧に、フシ浪人めきし 地旅人、何とお方茶はまだあるまい、さ湯一ツ所望と床几に腰を懸ければ、成程お茶も沸ました、酌で上つて下されませ、私が亭主は朝茶好き、地毎夜京へ商ひに戻りく飲では、いかに宇治の極上も、鼻が茶には及ばぬと、女夫の中のこつちりの、出花を

●小じほらし 笑顔の好きを褒めていふ。

●後白河法皇 諱は雅仁、鳥羽帝の第四子。崇徳帝の御弟なり。在位三年にして太子守仁に譲り、院にありて政を聴く。法號行眞、清盛の爲に鳥羽殿に遷され給ふ。

●頭陀 僧の旅行して行く、食を乞ひ露宿などして修業するをいふ。

●十善天子 後白河法皇は、曾て天子の御位に在りしが故なり。

上つて下さんせと、小じほらしげに愛らしう、
扱は御亭は留守か、聞けば清盛入道後白河の法皇様
を、此鳥羽の北殿とやらんに押籠置しと聞及ぶ、お内
儀の才覺で法皇の御有様、少拜む事なるまいかと言け
れば、いかなく番に番厳しく四邊へ參る事適はず去
ながら、此度小松の重盛隠れ給ひし菩提の爲、此鳥羽
の里日に一遍、頭陀の修行なされたきとの御願ひ、放
逸無殘の清盛も我子の別れに心柔き、七日が間は一遍
づゝ鳥羽一在所の内ばかり、苦しからずと許し參らせ、
地勿體なや痛はしや御法體とは申せども、十善天子の
御身にて、我等風情の門に立ち、鉢々と宣旨あり殊勝
とも痛はしとも、涙に暮れて染みくと、拜みし事も

●十二の頭陀 一に住阿蘭若處、

●鳩の杖 杖の把手に鳩の頭をつけたるものにして昔し支那にて歳七十に及べば鳩の杖を授くとあり但しこゝは、法皇の御つきになり杖なれば、鳩の杖といひしなるべし。

さふらはず、地追付御幸の時節ゆる、此草鞋を捧げん
爲、急ぎ作り候なりあれ、あれへ見えさせ給ふぞ
や必ずそれと知らぬ顔、常體の鉢開き同前の挨拶と、
知らする風の秋の山、チクリたどろくと御幸なる、フシ
頭陀の袋、麻衣、鐵鉢を御手に据へ、八ツ目の草鞋召
さるれば、二人の内侍鳩の杖網代の笠を携へて、昔に
かはる御供人、賤が門々鉢々と宣ふにぞ、主の女進せ
ましよと、貧女が一錢手の内の、片搗麥を御鉢に享け
三寶供養六道の、有縁無縁と御回向あり、フシ戴き給ふ
ぞ痛しき、旅人も態と知らぬ顔近頃殊勝の修行者、
調僅の報謝致し度し受給はんかといひければ、法皇聞
召しさん候、四分律に十二の頭陀を説かれたる、
地中

二に常乞食、三に次第乞食、四に一食、五に節量食、六に過中不飲漿、七に著弊納衣、八に但三衣、九に塚間座、十に樹下座、十一に露地座、十二に但座不臥、これ十二の行なり。其の中の次第乞食といふは、乞食の時は身に着せず、衆生を輕めず、貧富を擇ばず、常に平等一心にして次第に食を乞ふべしとなり。

にも次第乞食とは長者をも親まず、貧者をも厭はず、次第く、門並を請ふて通る法なれば、如何にも申請べしと、仰も果ぬに旅人は肩に懸たる革籠を開き、重たさうなる一包み、御鉢の中へ入れんとすれば、ア、是は重たげなる御施物金銀でこそあるらめ、調不作余食と申て一時の食の外とは、受ぬ頭陀の法ぞかし、地只一錢一粒の施しあれと宣へば、調修行の法は兎も角も此金子三千兩、御僧の外餘の人に施す金にて候はずと言捨て駈出る、留れくくと内侍達、呼ぶ聲耳に聞入れず、田の畦傳ひ逃て行く、折しも龜井は商ひより戻る處を女房、調これ此方の人あれ捕まへさつしやれと、地呼ばれば龜井まつかせと、島も哇も踏荒し彼方

●三百目、こは當時問男の料料の高なるべし。七兩二分といふは更に後の事。

●なめ

此方へ追ひ廻し、難なく追詰めどつこい遣ぬと引据ゆる、調ヤア、尾籠千萬、何あやまりに斯く聊爾はするぞといへば、女房遙にあやまりないとはいはれまい、今朝おきくにひよつと来て、茶一服飲だばかりに、合點の往かぬ金突付、人か何んの請取らふと、喚くを男は半分聞、そりや見たか、男の留守に女房の寢込へ仕掛、鼻が出花をよふ呑んだなア、なめ過た金で濟そふや、二百十日に風は吹かず、鼻が出花の相場が何時三百目に極つた、サア失せいと、引摺て立歸れば法皇御覽じ、ヤレさなせぞく、調其者聊か科はなし、法に過し施物を歸さん爲よ、如何に旅人、愚老が一鉢は其日の餓を養ふまで、地明日の蓄へ何にせんと立去ら

●唐土へ祠堂云々 前に唐土青王
山へ寄進の事あり、重盛唐土へ菩
提の爲めに金三千兩を贈りし如く
見せかけ、其の實は鈴木三郎をし
て法皇の御窮迫を救ひ奉らせんと
したるなり。

●三所権現

本宮、新宮、那智。

んとしたまへば、龜井はあつとけてん顔、旅人は手をつき頭を下げ、涙を流し居たりしが、一天の君に向ひ奉り申も憚り多けれども、詞某は紀州熊野の八性氏、鈴木三郎重家と申す平家の被官にて御座候、さても小松の重盛平家の運命末危し、憂耻を見ぬ其中に命を取て給はれと、三所権現に命乞し、卯月始めて熊野の參籠ありし時、地某を密に招き、父の入道天命に背き、法皇を鳥羽殿に押籠憂目を見せ奉る、冥罰子孫に及ばん淺ましくも恐ろし、詞我死して後此黄金三千兩、法皇へ献上し貧苦を慰め參らせよ、世間へは此黄金菩提の爲唐土へ祠堂に渡すと披露して、頼むは汝一人、深く包めと申されし、地此鈴木めを人と見られし小松

●松柏の萎むるに遅る 「論語」に
「歳寒うして松柏の後に凋むるに後
るんを知る」といふ本文に據る。
世亂れて忠臣の操を知るに喩ふ。

●宿紙 すくしといふ。濼返し
の紙、色の薄黒きより薄墨紙とも
いふ。昔し禁中の雜用に召された
る紙なれば、繪旨の下書などを遊
ばされ、其儘下さるゝ事あるを以
て、これを薄墨の繪旨といひ、殊
に尊重せしなり。
宸筆 天子の御直筆なり。

の遺言、草葉の蔭にも腑甲斐なく且は小松が寸志の忠義、遂ぬも便なく候へば、御側の上藤達御取次下されかしと、身を投伏て奏しければ、龜井さては幼少より別れ育ちし兄なるよと、女房に目配せし小首をかたげ聞居たる、法皇御手をはたと打ち、松柏の凋むに遅るゝとや、諸木の霜に枯るゝ時、松の常盤は見ゆるぞや、小松が忠義顯はれたり、それには似ぬ清盛一家が不忠不義、天下の煩ひ國土の憂へ、詞疾に亡すべかりしを小松に免じて助けしなり、地いでく平家誅罰の院宣をなすべしと、内侍達の懷中の御視宿紙にて、宸筆の院宣薄墨に遊ばし、義朝が末子牛若京近邊にありと聞く、此黄金は軍の用意、共に鈴木渡すべしとて給ひけ

れば、調鈴木飛しさり、宣旨背き難く候へども、某父方は鈴木にて平家の被官、母方は龜井を名乗て源氏の下人筋、さるに依て親にて候鈴木の庄司、一人の弟を幼少より引分け母方へ附置き、今にも源平軍となれば、兄弟鎬を削る中、亡びかゝる平家を捨て末榮ふへき源氏に、従ふなどゝ笑はれては他人よりも耻し、七歳になる悴を連れ、平家の味方に參る某、院宣の御使は餘人に仰付らるべしと、申捨て駈出る龜井走りかゝつて引留、調ハテ又してはく、びちく跳る鈴木殿、尾緒をつけて生臭い言分見さるれど、くだらぬくもと法皇様は平家滅さんとなされしゆるゑ、斯く押籠れおはします、然れば平家の大敵は法皇様、それに金をあてが

●ぼてふりのこと。

●棒手振りにて振賣り

ひ敵の城へ兵糧籠ながら、源氏に附ては弟の、さげしみが耻しいとは理の詰らぬ言分、地頭は鈴木尾は江鮎跡先が揃ぬと、フシかんらくとぞ笑ひける、調鈴木氣色を損じはつたと睨み、ヤアぼて振の賣人め、弓取の法は知るまじい、弟龜井は侍なれば汝等が推量とは雲泥萬里、其處立去れと睨付る、調イヤこれ賣人も人による、彼の行燈の書付を御覽せ、地ずんと心底の鹽梅よし、さらば其弟の龜井に、此鹽梅よしが成かはつて問答せば、一言も明せじと布頭巾取て捨て、拐腰に脇挟み膝立直して、調これ兄じや人鈴木殿、僅二人の兄弟を、源平兩家に別け置れし父の心を御存じか、子を思ふ親の慈悲我子で思ひ知り給へ、傾く平家に従ひて

兄弟が譽れもなく、やみく／＼と屍を曝し孫の命もあるまじと子孫の絶ゆるを悲み、末繁昌と見え渡る源氏へ龜井をつけれしは、兄の鈴木を見立よと言ぬばかりの親心、痛はしとも有難しとも、推量なきは不孝人、親を學ぶは子の作法、七歳の男子を平家方と名付置、御身源氏に忠功あらば、其子も命助つて道も立ち子孫も立ち孝も立ち家も立ち、地勅命は背き平家に加擔人し給はゞ、其身は申すに及ばず、七歳五歳もいはせはこそ、胎内まで子孫を斷れ、親の墓も引毀たれ、道も立たず名も立たず、家の名氏を絶やさんこと、不孝の罪の第一なり、弟は源氏に身を立て、兄の身命はたさせ、龜井が嬉しかるべきか、曲もなき鈴木殿慳貪なる

兄上と、引寄せく、繼付き、まづ此如く本の龜井が悲まば何と返答したまふと詞は他人向なれど、涙は誠の涙なる、間鈴木横手を丁と打ち、ハア誤つたりく、地院宣の御使して、兄弟諸共源氏方、牛若丸に従ふべし、汝の諫を聞くにつけ、左こそ龜井が恨むべき、懐しさよゆかしさよと不覺に、涙を浮ぶれば、地なふ左程に慕ひ給ふかや、何をか包まん我こそ龜井の六郎よ、さては弟の重清か、母の名字を繼だれば、御分は母の形見ぞや父の名字を繼給ふ兄こそ父の形見ぞよ、兄弟ひしと抱付、聲も惜まらず泣ければ、女房も涙にくれ供奉の内侍法皇も、御衣の袂を絞らせ給ふ、フ叡慮の程ぞ有難き、地斯て龜井は牛若の御所在、喜三太が口移

●藤白 紀州の地名。

し備に語り、片時も早くと勸むれば、鈴木も御暇申せしが立留つて、思へばく小松殿、平家に向つて弓引けとて、此重家は頼まれまじ、苔の下にて亡魂の妄執も痛し、院宣の御使して源氏の味方に参るとも源平兩家の戦の軍の御供は仕らじ、後れたり臆病と後指をさゝばさせ、其代りには牛若君の御行末、若し一大事のあらん時、千里も厭はず馳参じ、腹十文字に搔切て冥途のお供仕らん、それまでは重家が生國藤白に引籠り、軍に出ねば身は農人、太刀刀無用なりと、するりくゝと拔放し、石に打當段々に、打折てからりと捨是ぞ冥途の小松殿へ、二心なき未來の忠義、此の使は牛若君に現世の忠義の始めぞと守袋の紐を解き、院宣

●魚と水 古諺に、水魚の親といひて、交りの極めて密なるに喩へたり。

●三條吉次信高 金賣吉次「義經記」に出づ。砂金などを賣買して渡世となす。奥州へ赴く序に、牛若を連れて秀衡に托す。義經世に出で、吉次其の臣となる。

●菊月 九月の異稱。

納め首にかけ、叡慮を伺ひ立出る、兄は正直順路の武士、形一つを源平兩家、現世と未來の忠義を立、弟は孝行武邊の勇者、心一ツを父と母、兄と君とにたゞせりと、叡慮深く還幸ある、名も水に住む龜すゞき、魚と水との如くなり

第三

扱も三條の吉次信高とて、黄金を商ふ商人あつて、毎年數多の寶を集めてたかに造つて奥通ひ、次第に家も富の小路三條表の檜木見世、平家の御用菊月の今日を嘉例と馬方に、半金渡す錢拂ひ、數多の手代が覺帳八十八駄の馬追に祝儀取らせて旅立は、東の空や逢坂

●小ぢよく 小わつばなどいふに同じ。

●無功 経験なきこと。
●垂井 中仙道、關ヶ原より一里半。青墓は垂井より東の方青野が原を過ぎたる所。赤坂は垂井より

の、赤飯蒸して酒肴隣町までも賑へり、地多くの中に十六七の馬追の、人に勝れて目の中もくりくり栗毛の馬追ふて、小惻發氣に立廻る、片意地の長八不思議さうに見廻し、やい若い者共、此處な小ぢよくめを知たか、終に中間で見馴ぬ奴、まゝごとしそなた態をして二百里に餘つた奥州、半分道も往ず所に所勞ぬかして人に厄介かけるは定、中間の邪魔じやさしかへい、地場の町か日野岡か、先駄賃借たら戻して、はや出て失いと言ければ、我等は北山二の瀬村小冠者といふ馬子、日外吉次様鞍馬詣に片道此馬に召し、其時よりの約束で奥へお供は致せども、目利の通り馬追ふことは無功なれど、其代りに東路の垂井青墓赤坂邊、夜盜強盜

一里半。
●熊坂長範 稀有の盜賊なり。承安四年の春、金賣吉次奥州に下らんとして美濃國青墓に宿す。熊坂長範之を脅さんと欲し、手下數十人を率ひて其の宿所を襲ふ。たま吉次の同伴に牛若丸あり、長範等の一類を盡にす。

●ほてかくれる 詞が過ぎるの意。

●がんだう 強盜の類をがんだうといひ、やじりきりは土藏家などの壁を切る賊なり、其の尻を切るといふ事にかしき意味を含ませたるなり。

多しといふ例へ今音に聞く、熊坂の長範でも、何百人でも此童、只一人に押向て、何れもは怪我せぬ様に、足早にお逃く、其時は各々の命の親の此童、留ねならば留らうが後悔召さるが笑止など、店前に高腰懸けフシ揚足してぞおはしける、詞ヤアほてかくれるわい、小意氣過た前髪め、摘み出してくれふと肱を張ば馬方共、よいはく願は憎けれど、若衆が好い堪忍せい、盗人こなすと自慢こく待て晩の泊に、寢處へがんだううつて、やじりきつてくれふぞと、フシ一度に哄とぞ笑ひける、地がゝる所に瀬尾の太郎兼安、六波羅殿の御用あり、吉次は未だ發足なきか、面談せんといひければ、手代ども飛ど下り、其段申聞すべしと、フシ見世

●梅津源左衛門 常盤の父、伏見常盤にいふ、そもく常盤御前の先祖をくはしく尋るに父は梅津の源左衛門母はつらのさいしやうとて院にみまき奉る云々。

●阿部家の博士 陰陽道の博士阿部晴明の流れなり。

の上にご請じける、地吉次奥より揉手をして、調ハア
 お出でござります御所は昨日お暇申し、あとの御用は
 手代ども、承る筈なるにお氣遣しと申ける、いやく
 氣遣な事てなし、上に目出度い事あつて御用押付らる
 へ、御手前も存じの通り、源氏義朝が後家常盤御前、
 入道殿御妾にそなへられ御寵愛ありしに、此常盤欠落
 し方々詮議遂げたれば、常盤が父梅津の源左衛門方へ
 さまよひ来る由、則ち父が訴人にて在所詳しく知れ申
 した、なふ吉次お聞やれさ、入道殿お年は六十四歳で、
 御氣精強い事ではないか、常盤御前は懐妊あり當月が
 産月、阿部家の博士考へて若君と占ひ、御老後の男子
 平家繁昌の瑞相、殊に去年小松殿御逝去に、當年常盤

●札 祈禱などの札。

の男子懐妊疑ひもなく小松殿の、生れ變りなるべしと
 大方ならぬ御悦び、御誕生の御祝儀は御惣領同前と抑
 出さるへ、地然れば御一門諸大名献上の太刀刀、百振
 ばかり吉凶を選んで、名作を用意召されふず、馬代の
 金銀巻物類、さあといふ時御用に手支へなき様に、御
 誕生過るまで奥州下りも延引あれ、假初ならぬ大事の
 御用ハテ産落して明き腹の、常盤は死んでも構はぬ事
 腹にお子のある中は、母の身とても疎ならず、守りよ
 札よ取揚婆のと、我々の忙しさ、フシ推量あれとそ語り
 ける、調吉次横手を打て是はくお目出度い、いや當
 年は老人の子を産する年やら、此隣町に道庵と申す、
 六十九になる吝ん坊の隠居が、地玉といふ飯焚に、只

●六波羅殿 六波羅密寺の附近に昔し清盛の邸宅あり、故に時の人平家をさして六波羅と稱す。徒目付は武家の代、諸方を巡廻して非違を正す役。

た一夜忍んで淺黄小紋の布子を、やすくと玉が産ましたと、當座の興を催ふ所へ、六波羅殿の徒士目付あはたゞしげにヤア瀨の尾殿未だ是に御入か、常盤御前誕生の事散々の次第にて、御祝儀も献上も無用になされ、吉次にも其通り申し渡されよとの抑なりとぞ申しける、地手の裏かへす平家の掟例の事とは思へども、吉次も不審晴やらず、瀨の尾太郎驚きて、詞シテそれは小産はし召されての事かといへば、いやく左様の事ならず、常盤が源氏に心を殘し、悪縁にて平家の子を懷妊せしは是非もなし、安々と産落し平家の子孫蔓らせ、源氏に對し道立ず、毒を服か腹に双を突立て、我身も共に死んと申す、威し賺しつ致す内に既に

帯を解んとす、清盛公御立腹甚しく、先づ高手小手に搦めさせ、今日中に洛中町小路を引渡し、親源左衛門が家の前に、門礫にかくへしとの仰にて、其支度急なり、御歸り候へし、地やよい處に馬方共常盤を乗せて引渡す、巖丈なる馬一疋引て參れと言渡す、地牛若はつと肝にしみ何條母を引渡させ罪科に逢せ置へきか、六波羅に斬入て、何十萬騎も斬散し、母は人手によもかけじと思へども待てしはし、母の憂目を見給ふも、我を助けて父の仇を討せん爲運盡て仕損せば、父母の敵を討ぬのみか源氏の瑕瑾、奥州の秀衡が短慮なりと蔑ん、如何はせんと吉次をきつと見給へば、吉次も氣色見て取て頭を掉て目ませの體、急き來る心押沈め、

胸に涙を包まる、フン千々の思ひぞ哀れなる、地馬方共聲々に、詞科人渡す役馬は我人いやがり申すゆゑ、何時とても馬さし方にて天道次第の籤取に致す事、地馬さしに仰付られしかと願へば瀬尾、急なる御用に何の馬さし是にて籤をさせられよ、承はると徒目付人数に合せて細繩切り、サア長きに當るが役馬を寄て引けと出しける、詞いや我等は仲間はずれ二の瀬村の在郷馬、是馬子衆、地此冠者は籤を除てたも頼むくと詫給へど、ヤア温な頼むとは何の口で、詞ちと利口振出さぬかい、地ならぬく籤取れと、皆立かゝつて南無籤大明神、短を取らせたび給へ大黒頼んでどれ取るぞ、詞ハア、短いは忝い、こちも短い有難しと、地戴

きく立退く人も多き中、母の罪科や罪障の、山鳥の尾のしだりを、フン長きを取るぞ是非もなき、地そりやこそ冠者めがあたつたはよい氣味な、詞人の馬追ふて夜さり首が咽笛へ、わんといふて噛付ふと、實にも野人の心なき、フンどよみをつくつて笑ひけり、瀬尾の太郎聲を荒らげサア籤は極つたり、参れくと責ければ力及ばずあつといふ、聲の中にも正八幡諸佛諸菩薩別しては鞍馬の大悲多門天、日頃讀置く御經も、現世後生も父母に、二筋引し法の綱、今は母上片口に、引て出たる駒の綱、纏るゝ心ぞ 三重 いたはしや

露の轡蟲

●命三つ有る 常盤の胎内の子までを入れてなり。
●羊の歩み *

フシ命三つ有る、親と子の、中に一ツはとゞまれど、二ツは今を最後場の、羊の歩み引かへて、駒の歩みや鞍底に、身を柵の立田川、繩目くは紅に、縛付られし後手に、フシ爪繰る珠数は今死ぬる、我後生より菩提より、馬の口取る、フシ子の行衛、地末安隠と見下せば、子は又母の成佛と見上る涙眼に漏て、警固の武士はあらけなく、急げくと追立られ、フシ泣くく引つ引れ行く、親子の中の歎きには、上こそ哀れぞなかりける、引るく町は何處くぞ、上は一條今出川の、此處は何處ぞと馬子衆に問へば、死したる親も祈りの奇持、二たび娑婆に、フシ戻橋、我は連行く三途川、出水通りを引過る、フシナクリ跡のしるしとなりはせて、

●一條今出川 以下京の町を擧げたるものは引廻しの道筋なり。

●善の綱 開帳或は常念佛萬日供養などの時に、佛の手より綱を引きて塔婆に括り、結縁の戒名をつくるを善の綱といふ。

●紺ちき下部 紺ちきは紺染をする者なれど、こゝは紺のだいなしを着たる下部といふ事なるべし。

此身の果は風に散る、柳の馬場と聞くからに、浮世の名残押小路、フシとわたる鳥の聲聞けば、名も懐しや哀れ我、常盤の國の友ならば、後世をたのもの鷹金に、戒名か文字言傳ん、フシ佛の御手の善の綱、二條三條これとかや、昨日は袖にかざしぬる、錦の小路亡き跡の旗に縫へとや綾の小路、四條五條の橋の上、老若男女聲々に、地科人ありと立集ふ紺かき下部高聲に、法を破りし罪科人懲めなりと呼はる聲、耳にこたへて淺ましく、憐れみ給へ人々なふ、歌みづからが科とても、盗みとしては致さず、人を殺せし科もなく、況て中言偽りせず、夫は源氏の左馬頭名は義朝と申す人、形見の胤の子を持て、今歳は既に十六歳其子を慕ふが曲事と

て、斯る罪科に行はるゝ、子のある方は推量あれ、子
 達は親を思ひ遣り、（歌）念佛すゝめたび給へ南無阿彌陀
 ぶと稱ふれば、知るも知らぬも念佛の、聲高倉を引渡
 しととも、屍を曝す身は、爪嘴にかゝるとも、惜まじ
 野邊の烏丸、惜みても厭ひても、（フシ）誰かは一人留まら
 ん、果は烟の室町や洞院小川はや過て、子に引るゝと
 思へども、地獄を急ぐ道なれば乗たる馬は火の車、油
 の小路堀河の（チクリ）水は淀まず中々に淀むは駒の足並
 や、はいしいくと鞭あてゝ、口には追ふて心には涙
 の手綱引留め、引留むればさすが實に、馬も情あるし
 るしとて、歩みなづみつ行惱み、黄なる涙を流すれば、
 草木も哀れ知りぬべし、こゝぞ猪熊大宮の、辻を廻れ

●梅津の里

洛西梅津村。

●がう木

絞り付ける木、梓木也。

は有難や、西にぞ壬生の地藏堂、（フシ）六つの衢を導きて、
 慈悲を知邊の錫杖も、杖も及ばぬ警固の杖追立く引
 渡す、駒の追風秋の風、末は朱雀の野邊の露脆き命ぞ
 三重末ちかき、身の成る果や（地）梅津の里源左衛門が
 家の前、樗の立木を其儘に枝を打て科人の、がう木の
 柱と定らる、巡りに拔身の鎧長刀數百本整々と、夕陽
 に輝けば此世からなる劔の山、檢使には難波の次郎經
 遠下使の下部稼の人歩したり顔に玉襟、犯人遅しとい
 ふならく牛頭馬頭の阿防羅刹、惡劫無盡の罪人を待も
 斯やと恐ろしく、見物貴賤身の毛を立て皆々涙を流
 しける、（フシ）すはや是へと先拂ひ、地立つまいく先退
 けと、鐵鞭鳴し振廻す罪なき罪に沈むこそ、前世の報

ひ重き身を乗せたる駒も口取も、共に涙の足重く、し
 どもどろに行惱み、故郷戀しも引かへて、悲しや親
 の家の前、フシ最後場にこそ成にけれ、地下部の雑人あ
 らけなく鞍づめの繩解て、常盤御前を抱下し木の根に
 どうと腰引捨へ、詞こゝな馬子めはめそく吠て、し
 かと馬を追もせず道に隙取り日も傾く、もう用はない
 歸れくと睨付る、御尤くと去ながら我等は、金賣吉
 次の馬追冠者、東下りの門出に行懸り不思議に籤に取
 當り、常盤御前の御最後の御馬の口を取る事は、地嘸
 や三世の宿縁と思へば涙留まらず、高きも卑きも世の
 習ひ、親の死したる葬禮の、輿に其子が手をかくる、
 是もそれにかはらねば前の世の親と子が、馬子と生れ



て葬禮の輿に手をかくるぞと、思へば今も母上様如何
 に宿縁なればとて、母を高手に縛めて罪に行ふ馬の口
 子が引渡す因果の程、昔が今に至るまで、そもや例し
 のあるべきか、今宵より精進し、讀奉る御經が三途の
 河の船となり、死出の山には馬となり、多聞持國に口
 取られ佛土に参りおはしませ、餘りに名殘惜ければ、
 今はの際も見届けたし、今暫し此冠者を、是に置いて下
 されと檢使の前に平伏して搔口説き泣給へば、地難波
 の次郎も感じてや、フシ少時とてこそ許しけれ、地常盤
 目をも泣膨し顔も擡げずおはせしが、よくも優しい詞
 をかけ、最後の心を慰むる、フシ自は牛若とておことが
 年配格好の、愛し子を持たれば、冥途の旅の馬の口、

●白拍子 昔の遊女の舞、初めは水干に立烏帽子、白絹巻をきして舞ひしより男舞ともいへり。後には水干のみ用ひたれば白拍子と名



(載所合歌畫人職)子拍白

付けたり。今様歌を誦ひ舞ひしといふ。鳥羽院の頃に鳥の千歳和歌の前の二人遊女舞始めたりと云ふ

牛若が取ると観念し、縛めの繩も痛からず、詞最期も清くするといひ、死での先には元の妻、義朝公のおはすれば浮世に心は残らねど、地迷ひとなるは牛若よ、それがいとしい故にこそ、敵清盛に身を任せ、年月の物思ひ傾城白拍子の憂勤めも、是程にはよもあるまじ、義朝の御念忌御命日にあたつても、精進破らせ酒宴の友、未來の人まで迷はずはそもや如何なる報ひぞや、地それさへあるに清盛が子を孕む、まふし子しても産まずある、女の心の誠にて孕むといふも僻言よ、清盛に思はれて、顔を見るさへ懐くて、夜の襖は劔を抱き、鬼と添寝の心地して、肌を反向け身をそばだて、心とけぬに女の因果、お中に子種宿りしは、憂目の上の憂

●阿闍世太子 阿闍世は天竺伽藍羅國の王子なり。母の胎内にある日相者ありて、此の子は生じて父を害すといひしは、父王夫人と謀り、誕生あるや高樓より地に墮したれども死せず、成長して果して父を弑し、母を幽閉して佛を害せんとせり。後文殊菩薩の教化にて柔順となれり。
●婆羅門王 婆羅門は天竺の種族にして外道なり。

目にて、夜は目で泣き晝は胸、涙の絶ゆる隙もなく、十年といふ春秋を、暮しかねたる歎きの程、誰にか語り盡すべき假へ平家の種にても、身にある中是我子にて牛若が弟なり、産落せば敵となり成人しては親兄を討ん切んの血の筋よ、斯る敵を身に特し母が因果は何ごとぞ、異國には阿闍世太子婆羅門王を子に持し、昔語を聞もする常盤ならで日本に、又と例のあるべきか淺まし身の果や、拙き前世の戒行や、いとしと思ふ牛若は、日影の草と埋らせ辛しと思ふ胎内の、水子ゆるに憂目に逢ひ、罪科に逢ふは何事と、牛若つくくくと見上げてはわつと泣き、見下しては咽返り、フン悶え焦れ給ひしは、目もあてられず哀れなり、母の歎きに堪

●大行は細瑾を顧みず、大事を行はんとするには、少しの謹みなどは顧みざるの義。古語。

えかねエ、今は是まで源の牛若と名乗て出、太刀一振奪ひ取る程ならば、八方へ切散し肩に引懸退んものと、思ひ込めたる面色を、常盤それぞと聲を上げ、此有様を牛若が聞付ば、駈出んは必定、おろかさよ、大行は細瑾を顧ずとかや、母一人を助けんとて天下の大事を仕損じて、源氏の耻辱を雪がずば、義朝の子とはいはれまじ、詞今の間此母は此木末にかけられ、手足を枝に引張て釘鏝にて打付られ、鏝先に貫かれ果は目鼻も鳶鴉の、地餌食ならん其苦みこたゆるも何故ぞ、牛若を世にあらせん爲、天にも地にも萬寶にも替じと思ふいとほしさ、斯程に思ふ子もあれば、胎内にて殺す子もあり、同じ親にて父親に此苦患はなきも

のを、何悪業が固りて、女の身とは生れしぞ、憂き物思ひさせんよりはやく罪に行ひて、殺してたへや人々とせき上げく泣給へば、見物貴賤心なき、警固の武夫下部まで、袖を絞らぬ者はなし、地歎きの中に常盤御前色替り腹痛み、御産の氣付給ふを見て、いざ行はんと犇くを難波の次郎暫く、詞是は此序に牛若をおびき出し、討ん爲の謀事、腹を裂ても若君を取上よとの御誼、地氣のつくこそ幸ひなれ近邊に功者なる、取上婆はあるまいか産後迄は大事ぞと、暖簾幕にて周圍を圍ひ、繩を許して木の根の床、兎角しつらふ其間に産の氣しきつて誕生の初聲高く聞えけり、フン斯る處に丈高く色眞黒なる老女、大綿帽子の額より、皿の様

なる目を見出し、詞私は花の都で隠れもなき、黒鐵婆
 と申す大名人の取上婆、産一通りの事ならば、二子三
 ツ子は申すに及ばず、地逆子袋子徳利子、あとさき膨
 れて中で詰った瓢箪子でも、引攫へて搔出す故熊手婆
 とも申すする、お尋ねに付て参つた、やあるいと居り
 しは、フン搗臼直す如くなり、地武夫共興覺し日外の辨
 慶が、面の色に生寫し平産有ての上なれば、歸されか
 しとのよめく聲、詞ア、つがもない、色の黒いが辨慶
 ならば、地鍋やちやん茶釜は皆辨慶か、平産あつても
 婆が祝ふが式作法と、幕の内へ手を差入れ赤子引出し
 抱上て、詞ナフ憎々しい好いお子や、惣じて祝ひは逆
 祝ひ、下々は目出度ふ祝ひ、上つ方の和子様は、悲し

●けがけがは怪我なれど、爰は
 鹿相といふまでの意。

い事のありたけを揃へて祝へばかみがかたい、地いで
 産祝ひ申すべし、先御果報は御父清盛、底意地悪るい
 ど根性、諸人の憎み猜むまで引まつてあやかり給へ、
詞力は地獄の餓鬼あみ、地御壽命は朝顔の、日影待間
 の露の身、あら目出度やとけがの顔して絞殺さん、隙
 間を窺ひ捻殺さんと、眼は四方へ付ながら、ちやうち
 くあはよ、フンねんくころくと賺しけり、地父源左
 衛門亂れ白髪に鉢巻しめ、太刀横たへて突と出これ御
 檢使難波の二郎殿、詞此翁は今度の訴人常盤が親物其
 數にはあらねども、左馬頭義朝が舅梅津の源左衛門正
 國妻の桂の宰相、常盤が平家に從ふさへ恨みに存じ、
 十年以來親子中違ふた程度せ我を張る年寄、慾に愛で

利に耽り娘の訴人すへきか、我方にて平産せさせ、敵の子を養育するは虎の子を育つる道理、又いはゞ我孫なり、蟲同前の水子を殺さんも無外の至り、清盛の老後の子抱たい見たいは道理と、子の可愛さを身に覚え、正しく智の敵の子、妊婦常盤が訴人せしは、賢を守る源左衛門道の上に道を立て、情の上の情ならずや、仕様にこそあるべけれ洛中を引晒し、親の門に磔とは、おめく、見て居るべき源左衛門と思ふかや、地水子といへども平の朝臣、郎黨には難波の次郎折こそよけれ、鎗長刀の鞘はつし大勢引連れしは、天晴れ平家の大将よ、此大将を源左衛門が討とめて、首取る様をこれ見よと引寄せて刺通し、首打落して突立ば、難波を

始め警固の武士、數萬の見物一同に、フンはつと驚くばかりなり、地難波腹にすへかね若君の御敵、一寸も遁さじと進み出れば武夫共、一度にばらりと取廻す鬼より怖き黒鐵婆、綿帽子半ば押除け産所の側でもやくと、血が上つては大事じややかましふいふはどなた様じや、調婆が此手で片端から、頭をぐんぐと押へて、ちつと沈めて進ぜうと、馬追冠者と引副ふてそろりくとねち寄たり、調難波の次郎齒がみをして、エ、憎くしと思へば婆めが面付凄じく、地馬子めが眼其意を得ず、膝節顛ひ出けれども左あらぬ體にて、調よしと若君は是非もなし、地常盤を罪に行へ承ると寄らんとすれば、黒鐵婆大手を擴げ立隔て、調ア、輕忽な、

七夜の内は横寝さへさせぬもの、彼の木の上に引張て、
 鐘で突ふといふやうな不養生が有物か、堪るものか増
 らぬものか、試みに難波様此方さん上つて見さんせ、
 地どりや婆が上てくりよと、裾捻巻り引裏げ、くはつ
 と踏出す兩脚は、フシ松の枯木に異らず、地難波わなよ
 き身も縮み、聲も顛へど澁面作り、調ム尤もく、
 聞届けぬも侍の物の哀を知らぬに似たり、地七夜立つ
 まて相延すと言捨て引かへす、なふ是々七夜過て又や
 かましう言ふより、今日埒明て下されと、追かくれば、
 いやく、調七夜八夜十夜でも、地最早一代構はぬぞ、
 皆来いくと引連れて、跡を見ずして逃たりしを、
フシ笑はぬ者こそなかりけり、地群集の見物悦びて、

●虎の尾を踏む

危険を冒すの譬。

皆立歸れば金賣吉次一散に駈來り、虎の尾を踏む御振
 舞、危し目出度しさりながら、此上にも牛若君辨慶と
 人はよもや白旗を揚げ給ふまで御愼み、常盤御前は人
 目を忍び跡より奥へ御下り、辨慶は都に隠れ秀衡の左
 右を待給へと、直に門出の馬負冠者、腰に馬柄抄竹の
 鞭、窶れ行く野の秋の草、連れて音を鳴く轡蟲、何時
 か揚ぐべき蟋蟀蟲、末松蟲の時を得て、馬追蟲に届み
 鞍、あふんばり鑑踏張名乗るべき、大將軍とぞ見えにける

第四

車を碎く岩よりも人の心はさかしくて、船を浮ぶる淵
 よりも深きは人の心とて、鈴木すずきの三郎重家は院宣を首

●八ッ橋 三河國碧海郡地經船の宿より北へ半道ばかり入りたる所昔し業平東下りの時、此の所の柱若を見て、唐衣きつ、馴にしつましければ、はるくきゆる旅をしぞ思ふしと詠じたる所。

●矢矧の里 同郡、矢矧川の西に矢作村あり。日本武尊東征の時、里人矢を作きて奉りしより此名起ると。

●峰の薬師 三河國鳳來寺山の薬師をいふ。

に懸け、御曹子の御跡を慕ひて奥へ下りしが、義を守
て暫が程農民となりたれば、太刀をも佩ず主従の見参
始め如何とて、弟龜井打連て忍ぶ菅笠箆尾張、三河に
架し八ッ橋や、水の源頼む身は、平家を何時か討つべ
きと、常の心に敵を見て、フシ矢矧の宿にぞ着にける、
地折しも今日は虎の日の峰の薬師の御縁日、矢矧の長
者参詣の、下向道に行逢ふたり、鈴木は一年ほのかに
顔を見覚えて、謂是申し卒爾ながら、矢矧の宿長者殿
にて候な、都三條金賣吉次信高の定宿と承る、此度の
下向にも嘸泊りにて候はん、十六七の少人を同道にて
は御坐なきか、若し左様にも候はゞ逢せて給へとあり
ければ、長者聞給ひさればとよ、信高殿は妾が方に還

留あり、地東の名所見物とて、氣高き若衆も御同道
さ宣ふ人々はどなたぞやとぞ答へらる、鈴木兄弟嬉し
くて、それこそ源氏左馬頭の殿の若君牛若御曹子、我
々は紀州熊野鈴木の三郎重家、舍弟龜井の六郎重清と
申す者、後白河の法皇より、平家追討の院宣を蒙り、
さてこそ尋ね参らする牛若君に逢せて給へと、心も勇
み氣もせきて、フシ早ふくといひければ、地ア、音高
しく、數年駈染の吉次殿、自らにさへ明されず粗忽に
は如何なり、また逗留の筈なれば、御兩人も我方に、
二三日も留りてをりを伺ひ吉次殿に申込み、其上には
兎も角も、我も人もそれまでは、知られず知らぬ旅人
の、宿かり合せし風情にて間所も多ければ、ゆるく

●淨瑠璃御前 「十二段」に父は伏見の中納言かれたとて三河國の國司、母は矢矧の長者とて海道一の遊君にて峰の樂師の十二神へ願をかけもつけし子なりとあり。淨瑠璃とは樂師淨瑠璃光如來のもうし子なれば斯く名付しなり。

●大内育ち 今いふ貴族的なり。若紫 光源氏の御息所の幼少の時にも似たりと。

●萩 川の堤など水邊に生ず、薄に似て長大なり、秋白き花咲く。

休息遊ばせやさらば案内申さんと、長者は先に手束弓矢矧の宿へぞ 三重 歸らるゝ、フシ都に優る東路や、矢矧の長者の一人娘、淨瑠璃御前と聞えしは、峰の樂師のまふし子とて、瑠璃をのべたる フシ顔形、地一人も一人からなれや、大内育ちに侍きて、若紫の稚立、和歌の道文字の道、繪も美ふ花結び、天性琴の妙を得て、百の媚百の種くわんぎるんの花の下、錦華帳の月影に、明て三五の春秋を、人に戀られ忍ばれて、地戀しと思ふ人はまだ持初て見ぬ閨の中、御夜の物の重ね着に枕一つの丸寢こそ、何に不足はなけれども、フシ物足らずなる寢覺なれ、秋も半の萩の聲、籠飼の蟲の色々に音をそめ出す萩桔梗、むらく薄の露ごとに、映

●伊達を所在 何も外にする事なく、唯容姿を繕ひ衣裳などを着飾るを以て今日の勤めとする女房なり。

●冷泉 十二人の侍女の内。淨瑠璃姫には樂師の十二神に似たどりたる十二人の侍女あり。

る月かと見るまでに、立並べたる鏡臺は、フシ伊達を所在の女房達、地淨瑠璃御前の夕化粧、其役々をぞ定めらる、先づ御乳母の冷泉はお櫛の役、十五夜は額の役、玉藻前は細眉の上手なり、空牙ゆ月牙ゆ千壽の前白粉油臙脂の役、有明はお爪の役、更科は留伽羅、フシ籬小衣そつの助、楊子手拭ゆるつき、定め役々勤めつゝ、淨瑠璃御前は姿見の十寸見の鏡に對ひ給へば、十五夜冷泉衣紋繕ひ參らする、最う好いはいの何う嗜んでも作つても、見せるは女子ばかりなる、身は闇の夜の花ぞとて、譬へられても中々にフシ花も及ばぬ姿なり、地斯る折節御曹司今宵は父の逮夜ぞと、烏帽子装束あらためて、姫の閨房とも白露の、からてうづ手向

●蟬折 「源平盛衰記」に蟬折といふ笛は鳥羽院の御時、唐土より渡りし寒竹にて作りしものなり、竹の節の生ひたる狀蟬につゆたがはず、高松中納言實平此の笛を給はり吹きける時取はづして捨し蟬を打折りけるより蟬折とは名付け、後鳥羽院より高倉帝に御譲りありし由を記す、「十二段」にはやうでうとあるのみ、近松蟬折の名管を此の作に用ひしなり。

●千五上句、中六下句 八ツ歌口といふものは是なり。歌口とは、横笛尺八などの口をあてて吹く所。

●想夫戀 雅樂の曲名。「十二段」
「樂はさまざま多けれど、女は男を戀ふる樂、男は女を忍ぶ樂、想夫戀といふ樂こそ人目も憚らず、矢矧の土にもならばなれ云々」。但し「徒然草」には想夫戀は相府蓮の誤りなりとあり。

草此直垂大口は、母の手づから縫ひものし、蟬折の管と、共に形見にたび給ふ、何とが成らせ給ふぞと、いとど覺束懐しく思ひの數も千草の露、千五上句中六下口、八ツの歌口、フシ打濕し、父母の手向のがくなれば、夫を思ふ想夫戀身も日も寒しと謠ひけん、昔覺ゆる用、吹合せてぞ、三重聞えける、フシ座敷には女房達、笛の音色に聞惚て、眼を細め身をねちて、フシ腰もふなく成にけり、地姫君感に堪兼て、面白い笛の音や、殊に天満天神の、フシ惜み給ひし樂なれば、此秘曲を吹く者は只人にてはよもあらじ、みづから是にて琴を調へて合せんに、如何にと咎むる人あらば、箒木の巻と答ふべしと、引寄せて搔合せ、爪音ゆたかに遊はせ

●まどふ 償ふこと。

●女子の島 女子のみ接めりといふ想像の島。

ば、十五夜冷泉太鼓躰築あひしらひ、籬隔つる絲竹は心も動く、三重ばかりなり、フシ牛若笛を吹さして、斯る吾妻に誰なれば、此爪音の優しさと覗きたまへば座敷にも、聞失ひて茫然と、まんこが玉の玉琴の、フシ調子まばらに狂ひけり、地耳を澄して姫君は、あれく、笛がやんだは、まどふてかやしや笛返やしやと、御機嫌損ぜし折からに御曹子の面影、鏡に映れば十五夜、なふ笛を誰ぞと思ひしに、美しい若衆が、鏡の内にもれくと走寄て姿見に、ひつたりと抱付ば、冷泉も女房達も騒ぎ立ち、此鏡には袖がある、こちらには髪のかざり、こちらの鏡に肝腎の袴の前腰ア、味そふなと、喰付やら抱付やら、顔は上氣の濃紅葉、女子の島の夢

●いぐるふ 隠るの延。

咄し、フシ男見たるも斯やらん、地姫君不覺の御目元これ
 はしたない十五夜、詞みづからが鏡なれば、裡の若
 衆も妾が若衆、見苦しいこち退や、ほんにこれは不調
 法と立退く跡に入替り、御覽ある間に牛若は、小萩が
 下の一むらに、立寄る姿かくろひて、フシ鏡に影はとゞ
 まらず、詞ホ、ウよい事しやつた、若衆を皆にしやつ
 た、地元の様に入れて返しやと、御機嫌彌々損ずれば、
 今迄有りしに不思議な事、誰も隠しはしやらぬかと、
 騒ぐ人音夕嵐、庭の萩原女子原、フシ漏るや戀の風なら
 ん、地牛若有繫輿ゆかしく、つまど襖戸あらはに押開き、立
 聞給へる御姿、フシ又こそ鏡に映りけり、地十五夜嬉し
 くそれく御神體が、鏡の内に顯れ給ふ拜ませ給へと

●はしこいの 是しこしの轉。敏接の意なれども、こゝは齒がゆしと同意。

御手を取り、詞なふ能く見れば、か金賣吉次同道ありし
 都の君、地御目の張の氣高さこの口元のしほらしさ、
 御肌着の白小袖押るゝ程の色白、上重ねは唐綾上品の
 直垂、此品々の縫物の手際は心も及ばれず、御烏帽子
 は左折金作の御佩刀、彼の指振の尋常さ、百萬騎の大
 將と申しても怯はせじ、詞ウ、くいとらしいお顔
 や、ほつかりと喰付たい、御姫様も我々も鏡で見たは
 仕合、地直に見たらば今頃は氣付が入るであらふと、
 ぞくぞくすれば冷泉、御年は十六七迄は往まい、姫君
 様には似合頃十五夜我々には、些とはしかよらふと言
 ければ、詞ア、驕つた事ばかり、はしこふてもこそば
 ふても、た假へるぐふて跡で口が腫ても、地身は構はぬ

●玉蟲拾ひ云々 玉蟲は吉丁蟲といふ女人取て粉匣に收む、久しうして敗れずと。玉蟲拾ふとは、うぢくもぢく初心の體なるべし。

とぎよめく聲、ほの聞ゆれば牛若はきやうとくも逃入らず、玉蟲拾ひ玉笹の露をかふてぞおはします、淨瑠璃御前も戀草のほに顯はるゝ詞の色、さもあれ此君は源氏方の御由縁と覺へたり、いたはしや御代ならば斯く輕々敷あるべきか、地苦しからずば少時が程、御宮仕へ申たしと、思染みたる御顔、冷泉見て取りなふ十五夜、何とぞ彼の笛を些の間借て見せましたし、地氣轉はないかといひければ、お蔭にて我々も鳥渡戴く爲なれば、随分借て參らせんと、ナク庭のまき砂すなくと、歩み寄り、今遊ばせし物の音の、笛とやらん申て、火吹竹の様な物、我等がお主の姫君、地終に見た事候はず、借て參れと申さるゝ、お心あ

れとありければ、餘り卑下なる御口上辭退申す筈なれども、御琴を聞くしるべ吹けがして候と、服紗に歌口淨めんとし給ふを、いや其儘が忝しと押取て、足早に縁の上へくはらくと、一足飛に駈上り、地サア借ましたく、お口のついた歌口の干ぬ先に姫君様、それから段々にちよつちよと甜つて廻しやと、御唇に差付け塗付け又用無心もいふ爲、約束違へず早返さん、いへば冷泉いやく今返さぬ、姫君のお寢間へ都人のお忍びで、お手からお手へ請取渡し、地それまでは姫君様大事の殿御の御笛、握つて握詰て御坐んせ、それ女房達お寢間取りや、火を灯しやと打連て皆々奥へぞ、三重入り給ふ、更け行く鐘の、

●几帳 畫人の座の側にありて内
外を遮る具、臺上に柱を立てて之に
帷を懸く。

初夜も過ぎ、夜露に濡て御曹子、地笛の返事は如何ぞ
と襖戸の内に入り給へば、十五夜見參らせこれ和孩子様
御笛を遅なはり面目もなき事ながら、わらはが姫君
御姿を垣間見の戀風が、ぞつとしてよりお枕上らず、
地あはれお寢間へお忍びあり、お手枕の上にて直に請
取給ひなば、藥師優りの若衆様、さあお手引んといひ
ければ、詞是は思ひも寄らぬ事、妹背の道はまだ知ら
ず旅の空にてそれがまア、地さもしい事とて逃給へば
是それを知らねばお侍のかなはぬ事、すは夜軍夜討と
いふ時の、一番鎗の稽古になる、地萬事のこなし此十
五夜に任せ給へと押遣れば、力なく顛ひく、牛若は
局々を打過て、淨瑠璃御前の閨の戸や、フン几帳の影に

●もどかしい 思ふやうにはかゆ
かす、心をいらつさま。關東にて
じれつたいといふに同じ。

●伽羅 賞美の詞。

ぞ忍はるゝ、地十五夜囁き優しい聲にて何なりとも、
言かけ給へとほのめければ、優しい聲とは笛の音が、
地母の形見の一管戻してたへと仰ける、エ、もどかし
い、わらははに任せて置給へと、若衆聲にて十五夜は、
枕屏風をほとくくと、數ならぬ、峯の松風琴の音
に、通ひ迷へる笛竹のひとよの情をかけ給へ、吾妻の
伽羅とぞ申ける、地お側に伏したる冷泉それ彼の様か
く、少聞まして見さんせと申せば、姫君如何になり
とも好い様にしてたもと、お聲も顛ひひつたりと、フン
玉ぬく汗もいとしらし、地冷泉は姫君の聲を移して細
々と、歌誰そや誰ぞ、枕屏風に音するは、聲ばかりせ
ぬ、鶯の埒に迷ひ給ふかや、餘所にも人の聞く物を、

歸らせ給へと、フッありければ、地十五夜それくお返
 事くと、いへども若君身を縮め如何なる責に逢ふ事
 ぞ、戻して下され拜むくとばかりなり、此處が大事
 のはづみぞと又十五夜が聲細め、つれなき事な宣ひそ
 九重の塔が高しとて、鳶や鳥が羽根打立て飛ぶ時は、
 九重の塔も下に見る、蒼海深しと申せども、フシ櫓の
 立たぬ海もなし、地山といふ山に霞のかゝらぬ山もな
 く、谷間といふ谷間に、フッちりく草の生ぬはなし、
 駒に踏れし道芝も、露に一夜の宿は借す、チクリ風に揉
 る、笹竹も、小鳥に一夜の宿はかす、蘆の假寝の
 伽船も、比丘尼に一夜の宿はかす、今宵一夜は靡かせ
 給へ、フッつれなの君やと仰せける、地姫君は急ぎ給ひ

●木幡山云々「十二段」に「淨
 り此よし聞召し、こはいかに此殿
 は、諸事に賢しき人にてまします
 ぞや、今より後はものはじと思
 召し、木幡山にはあらねども、た
 い口無しとて音もせず」とあるを
 取れり。此の事は古歌に「木幡山
 あるはさかなし口なしの、宿する
 とても答へやはせん」とあるより、
 木幡山といへば、答へなき事の謎
 に用ひたるなり。

最う好い加減仕損ふて給んなど宣へども、調いやく
 戀ははづみが大事ぞと、地雪に架橋霞に千鳥、木幡山
 にはあらねども、フッこちや口なしとて音もせず、十五
 夜態とあらゝかに、調ム、及ばぬ戀との譬かや、とて
 も焦れ死なんより、地腹搔切て煩惱の犬となり、猫と
 なつて寢所へぐすくと這入り、爪を立て何處も彼處
 も搔てく搔たぐり、ひりくさせて我思ひ、一度は
 晴し申さんと足拍子とんくく、とんとんと踏け
 れば、誠と思ひ姫君は覺えず寢卷ほらくくと、駈出て
 直垂の御袂、控へらるゝも控ふるも、笑顔ばかりの梅
 櫻、ながしひかへの睨合、しんには中の思ひかや、
 地斯て十五夜、冷泉は是では埒も曉近し、辛氣くと

●常陸帶 常陸國鹿島社にて、正月十四日の祭に、男女布の帯に想ふ男女の名を記して供へ、神官の結びて願つを受け婚を卜す、これを帯占といふ、即ち常陸帯といへば縁を結ぶことなり。

●源氏の君 光源氏になぞらへたるなり。

夕告の、あれ鶏が鳴く鐘が鳴る、先づ出立が堅くろしい、烏帽子着たは繪にもありと、寄てかゝつて直垂や常陸帶解く紐を解く、淨瑠璃御前の瑠璃の肌、源氏の君の光り肌、お肌比べと押遣れば、いやじやくと頭掉り、後は首肯く花薄、亂れ伏猪の床の内、しつぽりひつたり、しつぽりひつたり、しんそこくそこの、心ぞ解にける

第五

●水浅き淀の若菰 假初の契りといはんはかりの冒頭なり。菰を刈るといふことより引かけたるなり

水浅き淀の若菰假初の、こそく契りばつとなり、母の長者に漏れ聞え、女房達を引連寢屋の戸口に立覆ひ、吉次殿信高殿と呼び給へば、内には十五夜冷泉も

●木になる 堅くなることなるべし。

木になつて、牛若君も姫君も、フシ二度の汗をぞ流さるゝ、吉次も夜明の目をするくいつにないはしい聲、何事かはと出ければ長者色を變へ、曲もない吉次殿、馴染ともない信高殿、同道なされた若衆が、調姫が寢屋へ忍んで、地ぬつくりやらしやつきりやら疑はしくば戸を明ふか、彼の淨瑠璃には心あての聲がある、大事の娘に大疵付て、何で癒るぞなほるぞ、別なされ吉次殿と、フシ疊たゝいてねだらる、調御尤く、若い人の同道は斯様の事に草臥れる、如何様とも詫事申さんがして、心懸の聲御とは誰人ばしにて候ぞ、ヲ、誰あらふ、源氏左馬頭義朝の八男牛若御曹子よ、吉次恂としや牛若を戀聲とは平家の聞え、長者の

お爲よからぬ事といはせも果ず、是曲もないとはそこを申さんばかりぞや、地あの若君こそ御曹子にて渡らせ給へ、疾に知らせ給ふとてわらはが外へ漏すべきか、近頃聞えぬ御心去ながら、此お恨みも嬉しい餘り、矢矧の長者が分として、源氏の大将を聲に取ると申す事二世や三世の冥加ならず、地是も冷泉十五夜が中立とや、出来したくこへ出よと呼給へば、蘇生りたる心地にて二人はおづく畏り、斯様に御機嫌直らんとは存せず、只今の恐ろしさ姫君様も我々も、心は消え入る如くにていきくなされた牛若様も、ぐんにやりならんしたと、溜息つくこそ道理なれ、嗣吉次嬉しくさて牛若君とは誰が知らせ申せし、但し長者

●北國路 加賀越前等北陸道を経て、奥州へ下る道。中仙道は美濃より信州木曾を経て關東に下る道。
●火の病 清盛は熱病に罹り、湯水も喉を下らず、身心燃焦れ、なから火中にあるが如し、二三間の傍へは人の近付くこと能はざりきといふ。

の御推量かとありければ、知らせ人是に候とするくと立出、我等は鈴木三郎龜井の六郎と申す兄弟の熊野武者、平家追討の院宜の御使に参つたり、又武藏坊辨慶御馬屋の喜三太は、北國路を御先へ、秀衡館にて待奉らんとて罷り立ち、地御母常盤御前は都を忍ひて中仙道を御下りと承る、又清盛入道は、火の病と申す難病に冒され、今を限りの有様彼是源家利運の御吉相はやく御披露頼み申すと述べれば、吉次大きに悦びの足も手も地に付ず、先づ院宣の御頂戴鈴木殿兄弟御目見え、それく女房達はへお出と申て給へ、其儘寢衣召しながら帯なされいでも大事なし、引摺起して下されと、フッそゝろに悦び勇みける、地長者餘りの嬉さ

●第 屋形といふに同じ。

●うし起 夜を更して家に飯る所に、「最早丑起して飯ります」などの秀句あり。丑は夜の八ツ時なれば、夜としては遅きも翌朝へとれば最も早し。かゝる場合にいふ。但し、こは七轉び八起きといふ諺を、八つは丑の時なれば、前途を祝していひしなるべし。
●淨瑠璃玻璃 七寶の内なれば、寶の玉といへり。
●さんざめかす 景氣のよいと。

や、目出度やなく、とてもものに御坐敷をも改め、お装束にて御頂戴、幸ひ我等が西の第に、色紙の間と申て藤原の定家朝臣、十六歳の時七首の名歌の心を繪に彩り筆に染め、わらはが夫に下されしを、一間にしたらひ置きさふらふ、此坐敷にて宣院の御拜見、方々の御目見え淨瑠璃と若君の御祝言のお盃、目出度い事のある條を、揃へて祝ひ申へしさあ此方へとありければ、さてこそ我名も吉次なり、牛若君のうしおきに、淨瑠璃玻璃は寶の玉、福女房の御祝言、チャクリ末繁昌の始めなる、フン御壽の最中に、地藤原の秀衡が三男泉の三郎忠衡御迎の爲として、三千餘騎相具してさんざめかいて伺候する、君御對面ましくて、御悦喜甚だ

●若市王子 熊野權現の末社に、一の王子といふものなり。熊野の本地といふ六段本に權現は天竺まじだ國の大王にて、其の王子と共に日本に出現ありし事を作れり。九十九所は其の末社にて國王の御子を祭りしものなり。一の王子は太子の社なり。
●救世正覺の如來 * *
●大悲千體の菩薩 *
●下化衆生の願 下界へ化して衆生を濟度するをいふ。
●清和のうてなを出で 清和天皇の御六子貞純親王の子六孫孫經基はじめて源姓を賜りしより、清和のうてなといへり。
●桃園の御葉末 桃園といふと解しがたし。竹園なるべし。即ち「徒然草」の「竹の園生の末葉までいとやんごとなきに據りしなるべし。」
●獻上新聞 新聞は祈文なるべし。

淺からず、鈴木は是より暇給はるべしと、熊野山若市王子に奉納の御願狀、文筆は達したり即座に書て差上げ、高かにこそ遊ばしけれ、抑當社は是三熊野の、十九所の王子く、若市王子とたせ給ふ、事も愚や御本地は救世正覺の如來、大悲千體の菩薩なり、かるが故に下化衆生の願ひを充てんが其爲に、光を高天原にやはらげ跡を三熊野の靈地に現はし、御恵み降雨の國土を潤すが如くなり、此處に苟くも、清和のうてなを出、桃園の御葉末、源の牛若丸、獻上新聞の意趣は、平民追討の一望なり、時今平家四海を呑むの勢ひあつて、上をおかし奉り、民を惱し痛しむ、地且は國の怨敵又は某父祖の敵、彼といひ是といひ、神力を得奉ら

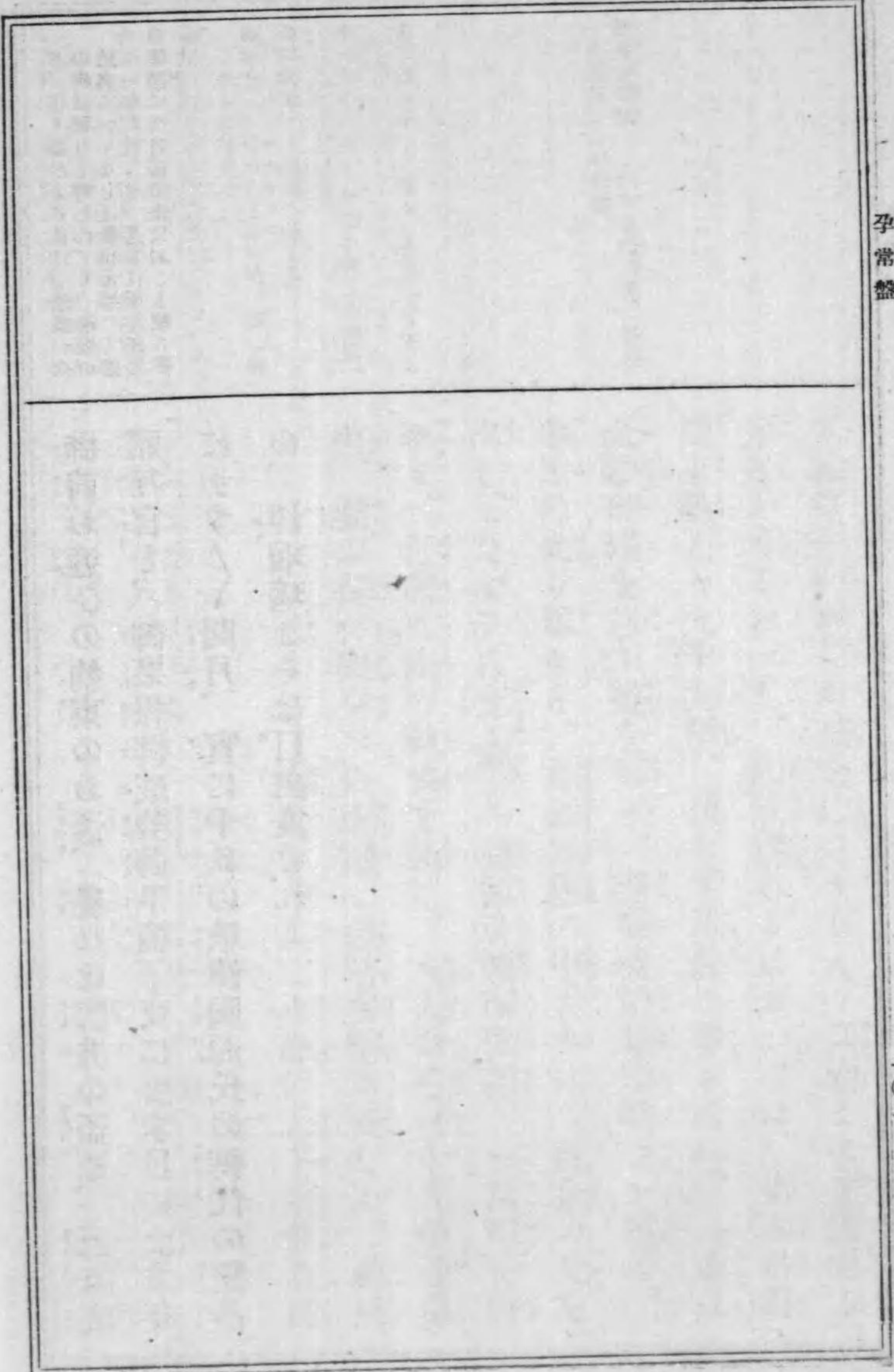
●金銀瑠璃 以下宮殿造營に普美を盡すことの形容。

- 百饌百味 種々の供物をすること。
- 八人の乙女 神樂を奏する巫女。
- 神樂男 神樂の囃し方。
- 祝詞 祈りのことばの略。神に祈り奉る詞なり。
- 退轉なく 永久絶たざるをいふ。
- すいしめ 清涼すること。
- 治承三年 頼朝關東に兵を擧ぐると聞き、之と合せんが爲めに義經の奥州より攻上りしは治承四年なれば、此の願文は前年のことなり。

ずんば、いかでか彼を亡さざらん、仰願くば感應誤る事なからしむべし、願成就あるにおいては、御本社拜殿末社く九十九所、残らず造營し奉らんに、地或は金銀瑠璃を以て藝を磨き、珊瑚琥珀瑠璃を敷て、平地の光り爛々と、水晶の色の中よりは、黄金の光を出し、たがひに光耀し、神領社領御供領、一萬町を寄奉り、百饌百味の神供を捧げ、八人の乙女十人の神樂男、朝の御神樂夕への祝詞、禮幣奉幣退轉なく、神感をすゝめし奉らん、逆徒を一戦に攻靡け天下太平の功を得せしめ給へ、夜の守り日の守りと守護せしめ給へ、治承三年八月吉日、地源の牛若敬つて白すと讀上給ふぞ有難き、地それより直に奥州の門出のお盃、淨瑠璃

り。但し是れより前に、清盛が火の病に罹りし噂あれども、清盛が熱病にかかりしは養和元年にて更に一年の後なり。是等は所謂狂言綺語にて辻褄の合はぬこと頗る多し。

御前お迎ひの約束のお盃、譽れは雲井の盃や、三々九郎判官と、御果報御威勢御手柄、夜にます日にます年にますく、閏月、實に千秋の秋津國源氏の御代の繁昌の、淨瑠璃こそは目出度けれ



●見渡せば松の葉白き石橋山、幾世凍りし雪ならん、
 曲「二人静」の「見渡せば松の葉白
 き吉野山、幾世積りし雪ならん」
 を取り、吉野山を石橋山に又いく
 よ積りしな幾世凍りしにかへて、
 序詞とはなしたるなり。

●安元二年 頼朝二十九歳の年。
 平治の亂 藤原信賴と源義朝と
 黨を立て少納言信西を除かんとし
 て兵を擧げたる時なり。此の亂に
 信西は殺したるも、平家の爲めに
 破られ、義朝東國に走り、翌永曆
 元年尾張において長田庄司の爲め
 に殺され、悪源太義平も生捕られ
 頼朝も亦擒となり、一命をも失ふ
 べかりしを池禪尼の憐愍によりて
 助命せられ、翌應保元年頼朝伊豆
 國へ流さる。時に年十四歳なり。

●伊東治郎祐親 曾我兄弟の祖父

源氏冷泉節

近松門左衛門作

一セイ見渡せば松の葉白き石橋山、幾世凍りし雪ならん、
 年は安元二年の、冬の日數も積る雪、下行水の音まで
 も、嵐に咽ぶ 源の、右兵衛佐頼朝は、平治の亂
 に流人と成り、伊豆の配所の憂住居、伊東の次郎祐親
 は、當國一の大名とて、深く頼みまませば、伊東が
 一族本間澁谷、大場糟谷曾我岡崎、今こそ平家の郎從
 なれ、昔の恩を忘れじと、花の朝に霞くみ紅葉を焚月
 の暮、時に隨ひ折に觸御心を慰むる、人の情に佐殿も、

なり、頼朝の伊豆に流さるゝや、平家の命を以つて之を監督す、頼朝其の女と通じて一子を擧ぐ、祐親罪を平氏に得んことを恐れて、祐親に其の子を殺し、頼朝を害さんとす、頼朝遂に走つて北條氏に身を寄す。

●ざんざ調ぶる ざんざは景氣といふが如し。峰から吹下す吹雪も酒宴の興を助け、零る景氣を添ゆるに似たり。

打解け月日を送り給へば、地近國の若侍吉川船越佐越十郎、天野の藤内狩野の藤五、竹の下孫八杯を始として、調いざや殿原流人右兵衛佐殿の、御冬籠の徒然を慰め申さん 地尤と、人別に一種一瓶して、さゆる野掛の暖め酒、竈にたゝむ石橋山、拂はぬ雪も盃の、酔に解つゝ吹下す、峯の吹雪も御酒宴の、ナリざんざ調ぶる計りなり、佐殿興に入り給ひ、實にも榮ある景色やな、紛はぬ花と詠ぜしは、フシ咲ぬ梢も フシ有つべし、榎も檜原もおしなへて、咲きも残さぬ花の雪、折らでも袖にこきいれて、歸る家路も入る山も、白妙匂ふ空の色、朝日夕日の影までも、共に凍りて松の雪、ナリ暖氣なると書たるも フシ是ならん峯の梢の滴りは、

氷柱と成て谷蔭に、音無き瀧の白絲に、群居る鳥も埋れて、皆白鷺と 舞山の井の、氷の鏡と己れさへ、影に驚くはたゞきや、はつと掃へば色々に、鷺も鳥も現はれて、フシ雪に繪を描風情かや、雲ある方は何國ぞと、とひの杉山奥深く、妻木の道も杣人の、通ひも絶て是や此、東方朔が杳の跡、誰炭竈の薄烟、横切る風にもむらくと、消て亂るゝ幾筋の、末は結びて塵合ひ、折臥す岡のいざり松、己と枝を起返り、さらく、颯とこぼるゝ其景色、フシ名に立つ末野と言ひ置し、末摘花の園の雪、花にたくへて吉野山、月に譬へて、更科を更に見るよと見下せば、伊豆の海面遙々と、地漕來る舟の數々の、苦も舳板も埋れて、雪に聲あるから櫓の

●山海の幸カヘ 「神代記」に、選々藝能命の御子に火照命火遠理命の兄弟あり、火照命は海佐智彦として海上を司り、火遠理命は山佐智彦として陸上を司り給ひしが、或時弟命兄命に請ひて其の幸を交換し、海に到りて釣を垂れし所忽ち其の釣を失ひぬ、兄命これをはたると念、弟命困じ果て釣を潰してあまた釣を作りて返し給ふといへども、兄命舊の釣を求めて聞かず、途方に暮れて海邊に佇みおはしける所へ、一人の翁出たり、弟命に教へて海神の所に往かしめ海神の女と契り、三年の後鯛の咽喉に其の釣のかけれるを取りて持飯り給ふ事あり。此の事をいへるなるべし。

●曉梁王の園 本文中にも見える如く「朗詠集」にあり。梁王は漢の武帝の皇子にして梁の孝王と稱す、莫園と云ふ苑を開き、終布山五雲山などいふ名山を園中に築き、侍の朝は難生枚吏などいふ才人を侍せしめ雪を弄びし故に群山といへり、又度公は度亮字は元規南樓に登り日を弄びし人なり、其の樓より見渡せば月千里を照して白しと

音の、からりころくくく歌やらんやら、お目出鯛釣る海の幸、雪は貢の山の幸、地彼山海の幸がへせし、地神代を今に見る事は、再び頼朝が、秋津島の海山を、手に握るべき兆ぞと、數獻に廻る御盃、地曉梁王の園に入らざれども雪群山に滿、夜瘦公が樓に登らねども月千里に明なりと、朗詠を遊ばせば、御馳走の若侍今様を唄ひ舞、辨當合子の足利椀、盞を變ての雪見酒、寒風却て春風と、左扇の歎樂に、フシ暫く御座をぞ召されける、伊東が三男九郎祐清孟受持ち、詞如何に方々數ならね共父祐親、我君を隱匿參らせ、御浪人の御徒然を慰奉る處に、おのく近國のよしみとて、今日の御馳走身に取ての大慶、君も甚だ御満足、地去りな

なり。謝觀が白き事を集めて賦したる詞なり。

●今様 今様歌のこと。七五調にて八句又は十二句の歌にて、中古越天樂の急に合せて歌ひしもの、後白拍子がこれを詠ひて舞ひしなり。

●辨當合子 掛子のある漆塗の食器なり。

●盃 盃。

●左扇 左團扇の樂隱居などいふも同義。逸樂に耽るを形容したる詞。

●鏑の遠鳴 鏑は鏑矢にて、鏑の一種にて木にて長く眼れ狀の燕に似たるより此の名あり。これに大雁又をつけ、射る時は中が空なれの鳴響くなり、故にこれを鳴鏑といふ。

●叢消 雪の班らに消たる形。

●非人 *

がら春の雪間の比ならば、猪熊などを狩出し物頭に馬合つけ、鏑の遠鳴させざるが残念なりと言ひければ、詞竹下の孫八聞も敢ず、否豫て催す鹿狩こそ、馬をも勢子をも頼むべけれ、一座一興の御遊覽、地いざや面々雪の下伏す兎狸、手摺に引摺み、熊猪を拔打にして熊膽の苦味を肴に、一杯づゝは如何と云へば、藤内藤五會澤の彌五郎、チ、いしくも申されし、鳥獸の血に染めて、紅葉の山になすべしと、一杯機嫌の坂東武者雪を踏立氷を蹴割り、谷に降り尾上に登り、えいくく聲して、三重一狩けるが、フシ雉子の一羽も、地立たずして、檜柴茂る叢消に、齒朶の葉被き折敷て、蠢き出るをスハ臥猪よ、我仕留んと駈寄ば、非人と覺しく二十

●つらいて 鬚の毛が亂れそれが水につくことなるべし。

許りの瘦男、鬢もおどろにつらゝゝゝて、唇寒き呼吸の下、只御憐み御助けと、フン凍臥てぞ泣居たる、地情も知らぬ田舎武士、是れ珍重のお慰、瘦ても人間猪熊よりは勝なり、首討は常の事胴切か立割か、斜切かとぞ立騒ぐ、頼朝御覽じ暫く候、調山中と云ひ雪中に、非人の在べき様はなし、抑も汝は如何なる者ぞと宣へば此男頭を擡げ、我等は相州の土民なるが、永々脚氣を煩ひ、僅の田地にも離れ、地妻には飽ぬ別れを致し、何を生たる甲斐の國、少しの縁者を尋て、是迄膝行参りしが、山道の大雪に持病の痛骨も碎け、一足も曳れず凍死する口惜さ、御推量遊ばせ、ア、痛々と顔聲、フン涙を流すぞ不便なる、若者共打笑ひ、然れば何國

●大袈裟 肩より脇の下へ恰も袈裟をつけたる如くに斬り下るをいふ。一の胴二の胴云々これも試し切についての名稱なり。

●小竹筒 竹の筒にて製したる食器。元來は酒を入れる器なれど、一般に食器の名に用ひたり。

の咎もなし、むだくと凍死んより、源氏右兵衛佐殿の、御手に掛つて成佛せい、地サアお慰みに大袈裟を遊ばせ、我々は一の胴二の胴、毛脇提灯八枚目、雪を土壇の試物、珍らしからんと轟くにも頼朝は仁心深く無益の事とは覺せども、今は彼等が情にて、世を諂らふ頼朝なり、氣に背きては悪かりなんと、にこつと笑ひ去事なれ共去りながら、熊猪の代りならば、彼奴に小竹筒の食事を興へ、カ一杯遊させ追詰て討取るこそ、狩の學びの遊興ならめ、それくと有ければ、實に御尤サア今が最後ぞ、腹は裂ふが破れふが一生の喰徳、先饑鬼道は氣遣ひなしと、酒飯口に押入くと走れくと、フンどよみをつくり手を叩く、地無殘やな遁れ

ても、遁れがたのの疲れの雉の、逃るとすれど足立ず、
 這ふつ膝行つ播分けて、雪をば口に息繼の、潤す咽も
 渴き果、叫ぶに聲も出ばこそ、地頼朝は只助けんと、
 態と雪に踏込く、追付難て見え給へば、取逃しては
 不覺なり、お先へ廻つて打留よと、フシ皆々谷へぞ降た
 りける、地頼朝は聲を掛、ヤレ狼狼者、此隙に何國へ
 も逃て助かれ助かれと、呼はり給へば手を合せ、ア、
 御恩徳有難しと、喜びても隠家なく、七抱餘りの古木
 の楠の、空虚の洞にやうくと、フシ這ふく助かり入
 にけり、地頼朝空虚を差覗き、扱深山の奇特とて、何
 千年にか成ぬらん斯る古木も有る物か、此空虚の深き
 事、假令ば十人二十人、五日七日隠れんに、誰れ知る

人は有まじ、詞某一度義兵を擧ば、軍の習ひ敗軍すま
 じき物でもなし、地是第一の隱家敵を捜す便も有り、
 秘密の空虚木正八幡の御示し、伊東を始め近國の武士
 迎も、心未だ一致せず、昨日の情今日の仇、今日の味
 方は翌日の敵、彼等にも猶包まんと、四邊の雪を掃寄
 て、空虚を埋む頼智の程、人君の器量備つて、六十餘
 州を掌の内に、握り給はん常々の、フシ心掛こそ音なら
 ぬ、地斯とは知らず谷々より立歸りく、詞御獲物は
 と問ければさればく、既に追詰捕て伏、一討にとせ
 し所に、忽ち年古狐と變じ、峯を越て飛失たり、地流
 人となれば口惜や、源の頼朝が狐などにも魅さるゝと、
 誠しやかに宣へば、伊東會澤竹の下藤内藤五齒嚙をな

●山木の合戦 山木判官との合戦
 山木は關兼隆と稱し、平家の目代として伊豆に在る。治承四年頼朝兵を伊豆に擧げ、先づ山木が館に押寄せ、急に攻めて之れを殺し、それより相摸の土肥に赴く。途中石橋山に陣し大庭景親と戦ふ。頼朝の伏木隠れと稱するは此の時の事なり。されば石橋山合戦

●頼子

●ぐんり

●軍利敏

し、詞工、古狐の骨張め最前に打殺し、皮引剝てくれんず物、無念千萬、ヤア此空虚木は心悪し、地いでいで入て入て捜せやと罵り騒げば頼朝重て、詞ア、狐の出入洞の口、雪の埋まん様もなし、神通の獸なれば、空虚木共に狐の所爲、人を誑すも知難し、地今日の殺生は朝頼が申し受るぞや、麓に降て今一献とくくくと宣へば、實にもあつたら酔醒たり、瓶子限りに飲續け、御供せんと献酬す、若侍の血氣酒、上戸の腹の石橋山、頼朝は空虚木に、ぐんりの工夫を得給ひて、扱こそ山木が合戦に、命を免れ給ひしも、此空虚木に隠れたる一時の慈悲も善心の、終には朽ぬ石橋山、雪も心も、三重色深く、フシ戀の道にはむすばれ易き、伊東祐親が

は山木の合戦に引續きたれど、實際は大庭との戦なり。

●藤の前 頼朝の伊豆に流さるるや、清盛は伊東祐親、北條時政をして之を監せしむ。頼朝はじめ伊東の女に通じ女子を産む、祐親怒り且つ平家への聞えを憚り、其の子を水に沈め、頼朝をも合せ殺さんとす。頼朝之を覺り、通れて北條時政に投ず。時政厚く之を遇す。頼朝其の女政子と通するも時政知らざる真似して、政子を山木判官に嫁せんとす。政子頼朝と手を携へて通る。此の作にて伊東の女を山木判官へ嫁する事は、政子の事を附會したるものなり。

乙娘、藤の前は仁義を知り、フシ忠節深き生れ付、佐殿は古の、お主筋ぞと傳きに、地影をも踏す跡にせず、膝も直さず慇懃に、堅い女の何時の間に、地和ぎ初し大和歌、言葉のてには縁と成り、御寢室近く頼朝の、胤を身に持つ青梅や、ぶらぐ病腹帯の、巡る日數も重りて、フシ七月にこそ成にけれ、地父祐親は斯とも知らず、嫡子河津の祐重、二男祐清を招き、妹藤の前が事、當國の目代山木の判官兼高より望まれ、早速婚禮有たき由度々使に預れども、姫が病氣抄々しからず延引に及びしが、此比は取分起居も重く見えたれば、急に快氣も有るべからず、地生田法眼春樂は姫が合醫者、殊に領内の住人内外共に心安し、療治をもみ立て、祝

言を急ぐべしと言ければ、調祐重承りさん候、我々も左様に存じ法眼を召し候へば、遠方へ療治に参りし由、飛脚を以て呼返させ候へ共、先も大事の病人とて、十日餘り相待共今日まで歸らず、外の醫者に掛られ然るべしと云ければ、祐親大きに氣色を損じ、我儘千萬なる醫者めかな、我領内に住からは、三日路五日路遠方に、如何なる病人有るとても打捨て歸る筈、十日に餘つて遅参するは言語同斷の慮外者、地元首に繩付て引摺寄よと云ふ所へ、門外に四枚肩春樂御見舞、扱よい處と祐清は玄關に立出、調ヤ法眼御出か遅しとて父祐親以の外の地不機嫌、早ふくと急ても急がぬ醫者の心の長羽織、炮烙頭巾の縮緬皺のしくくと座敷へ

●とつては
●佛頂面
*

通り、調此中は度々お使下されてござれ共、寒天の時分なれば彼處には痲氣が起つたは、此處には子が産れるは、此方の婆が二階から落らたれ事の、隣の嫁に子のとまる灸下してくれのと申して、一圓に寸暇を得ず其上に、五日路程遠方へ療治に参り、地只今罷歸つたと言へども伊東返答せず、姫君の御病氣とは如何様にかたと尋ぬれ共、猶顔ふつて應對はず、春樂元來一徹者、調伊東殿のお召と聞きとつかはとして参つたが、地人違そふなと佛頂顔にて立んとす、祐清見かねて仔細を聞ずは道理く、父祐親は貴殿の御出遅しと有り、當座の恨其斷申さるれば、濟事と云ひければ是祐清殿、調慰みに醫者は致さぬぞ、春樂が匙一本で、照ても降

●六尺 駕籠身のこと。



●十文盛 一繕飯のことなるべし。
●薬師如来 詳しくは薬師瑠璃光如来、又大醫王佛とも稱す。東方淨瑠璃國の教主なり。十二誓願を發して衆生の病患を救ひ無明の舊病を治する法藥を與へ給ふといへり。されば春樂は自ら薬王菩薩を以て任するなり。

(載所業圖蒙訓)尺六

ても十二人口過ねばならぬ、伊東殿に我家内養ふては貫はず、藥代取ると見付たら琉球へも渡らひでは、地領内に住むと思ひ、六尺共も我等も、道中の十文盛り搔込ばかりで、宿へ着ても薬師如来ぞ茶も喫ずに駈付た、此上のお恨みは、フセふことないとぞ呟きける、調伊東眼に角を立てヤア辯舌過た法眼、醫者の習ひ遠國他國へ行は尤、祐親が用とならば先を振捨立歸るべき道ならずや、使を受て十日餘り逗留せしは祐親を、疎略にするにあらずやと、席を叩て怒れども、春樂少しも誤ず、ム、扱は御存知なさそな、此度は三河の國矢矧の長者一人娘、淨瑠璃御前の氣色療治に參りしが、伊東殿より急なる

御用歸らねば叶はぬと、達て斷り申せ共母の長者合點致さず、伊東殿は大名でも押もおされもする身でなし、源氏左馬の頭義朝の八男牛若君、今奥州にて九郎義經と云ふ人を、聲に持たる長者なり、伊東の姫君藤の前は、頼朝と夫婦と聞く、互に源氏の相嫁、伊東の姫が大事なれば、長者の姫も大事なりと、理屈詰に止められ、夫故の逗留いかなく、此春樂、不調法は仕らぬ、ア、言ても下さるなど、フン張肘してぞ居たりける、祐親くわつと腹を立、ヤア子供あれを聞け、調何條矢矧の長者めが、伊東と相嫁などとは、緩怠過たる言分惣じて遠州濱名三河の矢矧此兩所は、平家より御加増あり十年以來、祐親が知行にて長者も我が百姓ならず

●年頭八朔藏納云々 矢矧の長者は伊東配下の百姓でありながら、一兩年無沙汰なるは、牛若を聲に取り懸慢となりれど。

や、地此一兩年長者めが年頭八朔藏納、百姓並の禮式も無禮なりと聞けるが、牛若とやら猿若とやらんを、聲に取たるるんげんな、彼の頼朝は昔の好み、我か慈悲心にて圍ひしに聲よ嫁よと綽名を立られ、平家の咎め山木が方への聞えと云ひ、皆長者めが言觸す、調田地を取上げ地行所を追拂へ、證人なれば法眼お手前も科は遁れぬ、早々矢矧へ使を立よと、氣色變つて見えければ、嫡子の祐重進み出で、仰には候へ共、若し姫と佐殿と夫婦のかたらひ誠にて候は、世間の沙汰も偽ならず、却て此方の疎忽なり、先暫く御隱便然るべしと制すれ共、地否々夫叶ふべからず、頼朝を聲にせば、長者連と縁者に成り一門の參會にも、彼奴等と膝

●局

侍女のこと。

を組ん事、伊東の家の瑕瑾なり、我娘から穿鑿せん、局はなきか姫を是へ連來れと、討ても捨べき顔色に歸られもせず折悪く、參り係つて法眼も、フシ配劑仕かねて見えにける、地局奥より走り出、姫君様の御行儀の悪いと申すも妾が科氣の細い上藤の、お氣合に障れば一大事、先重ねて御詮議と、事を解て詫けれ共、詞否々姫が身の難雪ぐ事臆するは心得ず、ム、扱は頼朝と忍び會しに極つたり、病氣と云ふも懷妊ならん、法眼に脈取らせよ早ふくと責付られ、局も今は詮方なく、奥に入れば姫君も、すは死ぬる瀬か生る瀬の、産より怖き親兄の、よし不興は受くるとも、胎内の子の親は右兵衛の佐頼朝なり、陳ずる丈は陳じて見て叶はぬ時

●浮中沈 脈の浮き沈みによりて病症を判断する漢法醫の秘密。
●心肝腎の命門 心臓肝臓腎臓等は、最も大切なものなれば命の門といへり。其の位置によりて病を知るこれ又醫家の秘密なり。

は佐殿の、お名に疵は付まじき卓愷は捌くまい物と、思ひ詰ても便なく、女房達に手を曳れ、フシ父の前にぞ出給ふ、地伊東は目色を見て取て、サア法眼たとへ御邊が勞つても、外に醫者も有るもの後に知れては其方が、首を取るぞ偽なしに早々脈と詰掛る、姫も爰は大事も、幼いから自らが、地脈は其方が覺へてぞ、疎忽を言ふては頼朝様に首取らるゝ、よふ分別して脈取りやと、苦々敷宣へば、流石の法眼手も戦ひ、浮中沈の三考も心肝腎も命門も、右に有るやら左やら、病人よりも醫者殿の、フシ脈打切るばかりなり、然れ共心を押鎮め、何と御頭痛の氣味有て、ぞんぞと寒氣などは參らぬか、否別に左様の事もなし、ム、ウお食に

●合口脱き 醫者が貴人の脈を診る時の作法なるべし。
●六脈浮大にして活々 漢法醫の通語にて、懷妊の特徴なるべし。

變る事もなく、酸い物などはお好はないか、否々そふした事もなし、ム、ウ胸先へ時々ぬつと突上、臍の邊を滑々とぬらつく儀などは御坐なきか、地ヲウ痞は持病の事なれば、苦にも成すと宣へば、然れば先御懷胎とは申されぬ、さらばお脈と合口脱き揉手をして、詞ハアウム、ウト 地目を塞ぎ、六脈靜に考ふれば、浮大にして活々と溢れたり、南無三寶懷妊と言んとせしが待暫し、言へば姫の恨あり、言ねば後の不調法と、頭を傾くれば伊東親子、片唾を吞て目を放さず、姫君は神佛醫者の心に入換り、憐み給へと氣も亂れ脈も狂へば法眼は、右を取換左へ換、只ハアウくと暇取て、フシ心を碎く危さよ、地父の伊東突と立ち法眼を突退

詞己は姫をかばふよな、此事平家へ聞えては伊東が家の滅亡、娘が大事か國が大事か、地いでく、實否を糺さんと、娘の袖に手を指入腹帯攪んで、詞扱こそく懐妊に極つたり、片時も是には叶はぬ産月までは法眼に預け置く、其方にて平産させ其後山木の判官兼高に縁邊組み世間の口を塞ぐへし、我娘さへ斯くする上は、領内の矢矧の長者、義經を聲に取る事平家の咎め某が言譯なし、使を立て淨瑠璃姫とやらんを、急と追放せさすへし、地法眼は一先藤の前を連れ歸れ、頼朝がせがれ胎内に有る中は、局は勿論腰元の一人、附事は叶はぬぞ、サア女郎め其處立ぬかと睨付られ、あいくと云ふ聲よりも、涙ぞ先に出そめて、親の名残も身の

●認める

食事するをいふ。

憂も何のまよと流せども、佐殿の御事のみ、心の底に滞はり、暇乞さへ叶はねば、餘所事に詫けて、母様へも何方へもよいやうに頼むぞや、唯さへ産は女の大、事、心に苦を持つ自らが、よも生んとは思はれず、今日が此世のさらばぞと、申して給やと計りにて、フン聲をも立ず泣給ふ、二人の兄も妹を、不便とは思へ共苦り切たる親の顔、侍元局聲々に、法眼様頼みますと泣叫べば、ヲ、人を助る道なれば、是も療治の中なりと、我乗物に抱き乗せ、六尺共と呼ばれども、皆認めに歸つて草履取の三平ばかり、よいく己れ先肩昇け、後肩は此法眼と、坊主天窓の六尺づゝみ、手先を揃へておつと肩を正氣散、腰を据てははいく、敗毒散の風

●國を療治 春樂は病のみならず源氏の爲めに頼朝を助くるなど我は國家を治するものなりと誇る。

薬、是ぞ汗かき乗物かき、裾を擲げて行足の、灸も道も三里半飛ぶが如くに歸りけり

下之卷

地國を療治の流行醫者、法眼が薬飲む人は、長生不老門前に薬代禮物持せきて、薬拵へ暇もなく、弟子の春甫が薬研の音、フシぐわらぐ、賑ひ忙はし、春甫粉薬搔廻し、女房共はのらくくと、何處にのらをかはいて居る、醫者の女房に成からは、篩ふたり刻んだり薬拵へせねばならぬ、粉薬が急ぐ來て篩へとぞ喚きける、ハテ何じやいの喧ましい、藤の前様の御用がある、是も御主の御奉公、こちらは醫者の女房此方は直に醫者で

●醫者は機轉 醫は意なりと云つて昔は頓智を以て醫家の妙用とせり。

●大成論云々 大成論、格致論、素問靈樞、十四經、入門、難經、脾胃論、脈論、運氣論等著名なる醫書を擧げたり。

●藪に功の者 藪に香の物。(尾張國海東郡阿波手の森)野夫に剛の者、藪醫にも功の者など種々の意義にて古く用ひられたる諺なり。但しこゝは藪醫にも功の者ありの意。

ないか、地何時がいつ迄薬研卸しつ確挽つ、それで埒が明ますか、お師匠なり御主なり、法眼様の手助り、代脈にも出る様に、學問をさつしやれたら、フシよかりそふなと言ひければ、調ヤイ學問ばかりで濟はせぬ、醫者は機轉が第一じや、學問の事なら云て來い、地大成論格致論、素問靈樞十四經、入門難經脾胃論脈論運氣論、萬卷の書に眼を曝した此坊主、醫者は見掛に依らぬぞ、對の六尺乗物が煎じて飲るゝ物でもない、一僕連ぬ我々でも藪に功の者、何な大病でも仰付られ、活すか殺すか何方へぞ、フシ驗は見せふと自慢する、調ハア措て貰いませよ彼の頼朝様とやらは、醫者心はなけれ共、藤の前様と假初の契りに、まんまと孕せ物の

●銅の吹屋 銅の工場附近にはかな氣を含んで作物が出来ぬといふ所から、お前の身體にもどこかに銅の吹屋があつてそれて子の出来ぬとの洒落。

見事な若君が産れた、此方とわしとは旦那様の媒妁で、やがて三年添けれど、なんとやうな療治やら、地はらまする事もならぬは定めし如在も有まいが、地體此方の匙先が、フンゆがんだそうなと云ひければ、調やれ子の出来ぬは己れが科よ、芋や牛蒡を見をらぬか、何程種が善うても畠に鉄氣の有る所は、何ぼう蒔ても育たぬ、地こちも牛蒡同前、蒔てもく育たぬは己れが何處ぞに銅の吹屋が棲んだそふなとて、夫婦どつとぞ笑ひける、地此聲に藤の前障子押開け出たまひ、聞は御身達子が欲しいとの願かや、自らが身と代りたや、法眼の御蔭にて、玉の様な男子を、安々と産落せしに、平家の聞え有ばとて、父の爲にも孫ならずや、最愛盛

●伏漬 水底へ石を附けて洗めるをいふ。

●地ぶく 門の闕のことを地幅といふ。これより轉じたる詞にや。醫者の通語なるべし。
●萬の病は心から 御茶と病はき(木又は氣)から出るともいふ。凡て病の根元は心勞にあることをいふ。
●一寸先は闇 *
●浮世は一分五厘 *

りを情なく、松川の水底に伏漬に洗めたまふ、是よりは方々の子の無いこそは増ならめ、此上に山木の判官兼高へ、縁組との事なれ共斯様に氣色重ければ、何時までか法眼や、方々の苦勞ぞと、フン打萎れてぞ仰せける、地春甫は氣輕の打笑ひ、調ア、お氣の弱い、子の五人や十人は地幅さへよければ年々にも出来る事、兎角島の荒ぬ様に氣をあつさりと成り次第、地萬の病は心から、一寸先は闇の夜、浮世は一分五厘づゝ、人參入て上たらば、フン御本腹とぞ申しける、地斯る處に法眼御歸りと呼はれば、春甫が女房迎ひに出、乗物蒲團薬箱床に直しつ衣桁に掛け、姫君のお供して、フン奥の一間に入にけり、地法眼四邊を見廻し春甫を招き、

●香附子 漢法にて産前産後の服薬に多く調合する藥種の名。

●石藥韓藥 毒藥調合の原料なるべし。
●毒蟲 青蛇蛭、斑猫いづれ有毒なる蟲。

調藤の前の御容體、如何有ぞと問ければ、されば御顔色物ごしまで、只當分の物思ひに、氣の滯ほりと存ずれば、香附子杯にて血を開き、順氣の御療治然るべしとぞ申しける、法眼首を振て舌く、輕き症にてなし、
地某家傳の名法有と箆筒の内より、二重箱の一卷を取出す是ぞ秘密の藥法、此通りに一ぶく調合せよと差出す、
調春甫孰々被見してヤア、此藥味は残らず石藥韓藥に、毒蟲などの處方は、毒藥にては候はぬかと、言せも果すア、音高し音高し、如何にも毒藥、則ち藤の前に與へて失ひ申す毒なれ共、某は師匠より、毒藥調合致すまじと堅き誓詞有るゆゑ、方は傳授受ながら匙とることは叶はず、
地其方には誓詞も書せねば匙を

取ても苦しからず、調合せよと言ひければ、春甫は猶も不審顔、して姫君には、何恨み何科有て毒害は遊ばすやらん、
調チ、不審尤も、某に對し恨も科も更になし、
姫君の母は繼母なるが、山木の判官兼高は大名と云ひ當國の目代、彼に繼子を縁に付世に在せんは嫉し、
毒害してくれふならば金銀財寶藏一箇所を打あけんと頼なり、
老衰の此法眼朝から晩まで乗物に揺れ夜とも言はず引起され、
雨にも風にも國中を駈廻り、苦勞をするも本望ならず、
地此姫君を失ひ、其禮物にて療治を止め、永からぬ一生を樂に暮す思案にて、
請合たる毒藥師匠の奉公此時ぞ、
早々調合頼むぞと、
フシ細々とぞ語りける、
春甫涙をはらくと流し、
情なやお

心に天魔が入て候ふな、尤も老後を安樂の御望みは尤
 ながら、醫道に限らず世の中の、人の爲になる者の、
 苦勞せぬは、フシ候はず、人の爲かと存ずれば、却て我
 身後世の爲、善惡共に報の廻り來ること、藥の廻るよ
 り猶早し、天罰と申し母御こそ繼母なれ、伊東殿は實
 父なり、洩聞えて伊東殿の、御咎遁れ有べきかとおつ
 と御思案候ふて、思ひ止まり給へかしと、咽び入て教
 訓す、謂法眼はつたと睨んで、己れ言分皆法眼が知つ
 たる事、天罰當らば匙を執たる己れにこそ當るべけれ
 伊藤の咎有るとても、己れを取て落さん爲、調合を申
 し付け、扱こそ師匠の奉公頼むとは言つるが、地但我
 身をかばふかと、面色變て言ひ募る、弟子は泣々聲を

●咽元過ぐれば熱さを忘るゝ
 に「咽過ぐればあつさを忘れ、病癒ゆ
 れば醫師わする。苦しき時に人を
 頼み、苦去れば其の恩を忘るゝの
 譬。」

荒らげ、いよく情ない師匠やな、師弟は親子と申さ
 ぬか、弟子の難儀に代る程の心こそはなくとも、我科
 を弟子に塗る無得心や候ふべき、か程慈悲心なき師匠
 に、孝を盡して面白からず、毒藥の調合はふつと叶
 ひ候はずと、フシ申し切てぞ泣居たる、法眼溜息ほつと
 吐き、謂ハア世俗の譬に言ふごとく、咽元過て熱さ忘
 るゝとは此事、己れが口から法眼を、慈悲心なしとは
 畜生め、五年以前を忘れたか、一年某下總へ、療治に
 立越歸るさに、石橋山を通りしは、極月中旬而も大雪
 切程寒き寒天に己れは襪褌を身に纏ひ、空虚木の中よ
 り、よろりくと這出、世にも人にも捨られ便りもな
 い業人、長々脚氣を煩ひ、其上此寒濕に腹を痛み、今

を限りの命なれ共雪より外に、口を潤す物もなく、今生よりの餓鬼道、お醫者様の御慈悲に、軒の下にて死する様に御憐愍頼み奉ると、泣叫しが不便さに、持せし着替の小袖を着せ、乗物には己れを乗せ老體の某は、雪の中を徒跣足、宿へ着ては看病人を附置き、衣類食物起臥まで、我子の如く勞り、千服計りの薬に朝鮮人參三斤半、二年目に本腹して、以前より達者に成り、鬼とも組んと悦びし、其間の心遣ひ、法眼は慈悲を知らぬよな、ヤア是でも慈悲を知らぬか、地親類も知音もなく行方もなしと云ふ故に、弟子となして醫道を教へ、數年使ひし侍婢と、夫婦になして其の如く腰の周り身のまはり、是此法眼にいつく違ふ處がある、年

●八裂 支那にては昔し車裂などいへる刑名あり。是等より出でし名にて、人體をブタノくに斬りさいなむをいふ。
●八萬地獄 地獄の罰責の重きを譬へなり。

來の御恩徳此世にては報じ難し、御一生の御大事御命に代らんと、幾度か吐せしぞ、己れに禮を受んとて懸たる恩には有ね共、慈悲心なしと云ふ故に、事新しき繰言、サア法眼が慈悲を知らぬか、己れが恩を知らぬか、根性に問へと云捨て、突と立て入んとする、師匠の羽織に縫付、ア、眞平謝罪奉る、御恩は更々忘れねども、悪事の御意見申さん爲、言葉過せし勿體なや、御赦しあれ御免あれ、身は八裂に切り裂れ、八萬地獄に落るとも、毒藥調合致すべし、免させ給へお師匠様と、羽織の裾を顔に當、フシしやくり上げてぞ歎きける、法眼も聞入れて、ア、尤々其筈と、又一箱の錠を開け、藥種數品取出す、春甫は書物に引合せ、毒の品々調合

●生姜 漢法醫の煎薬には必ず生
姜二三片を入る。これ諸薬種の毒
を消すなりといひ傳ふるより、毒
を盛る薬中には禁物なれば、之を
止めたるなり。又薬を煎じるとき
薬罐の口を北に向ければ病も長引
くといひ或は其病癒へずともいひ
て、必ず口を南にするを通例とす
然るを北向にせよとは、病氣を呪
ふなり。

し、思へば此は劔よりも怖しき、科なき人を殺すぞ
と涙も共に包紙、女房くと呼出し、是姫君の加減
のお薬、生姜入らずに薬罐を北向に、地頭煎じ計りを早
々上よと言ひければ、ア、お目出度や、追付御快氣な
るべしと、何心なく走行く法眼見送りサア仕済した、
毒薬五體に浸渡らば、苦痛有ん其時に、報せを待ぞぬ
かるなと、フシ調合の間に入り、春甫ははつと氣
抜して夢現とも辨へず、茫然として居たりしが、誠や
人の恩を受け、此世にて報ぜざれば未來生々五百生、
筋を脱れ皮を剥れ、取返さるゝと、フシ傳聞く、師匠法
眼の廣大の御恩は、只今命の用に立百が一つも報ずべ
し、先年石橋山にて討るべきを、頼朝公の情にて空虚

●一百三十六地獄 等活、黑繩、
衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦
熱、無間、これを八熱地獄といふ。
此の八地獄は閻浮提即ち娑婆の南
邊、日道の下にありて各十六の別
所あり、合せて百三十六地獄とな
る。其の百三十六地獄を尋ねれ
ども、我重大なる罪を容るゝに足
るものなしと。

に命を助かりし、此御恩を報ずるのみか最愛の姫君に、
毒薬を盛る此悪業仇を恩にて報ずるところは言へ、恩
を仇にて報ずるとは、何の道にか有べきぞ、一百三十
六地獄、地獄くを尋ても、此罪科に對用する地獄逆
はよもあらじ、淺猿しの罪業やと、思へば心遺瀨なく、
フシ身を揉歎き沈みしが、阿、由なき悔み言、身を
助からんと思ふにこそ、地姫君の御薬飲込給ふを合圖
に、此合口腹に突込冥途の旅の御供し、生て師匠の恩
を送り、死して頼朝の御報恩に供へんと、目を押拭ひ
合口拔持、障子の隙より差覗けば、痛はしや姫君は、
今殺すとは知り給はず、花見小袖の雛形を、手づから
書ておはします、フシ御有様ぞ哀れなる、女房薬を煎じ

●六道の御供
死出の御供といふ
に同じ。

上げ、詞是は法眼とわらはが夫、師弟談合の加減のお
薬、地いざあがりませと出すにぞ、嬉しげににこく
と、此お薬にて本腹し、春は花見に往ふぞや、其方と
我が小袖の模様、對に揃へる是見やと、薬頼みに末企
み、是れぞ冥途の呼使と、フシ知り給はぬぞ痛はしき、
地春甫は御最期只今ぞと口に御經目に涙、すはやく
と待つところに、姫君薬を戴きて、喉に通ると見えけ
るが、あら心悪や眩暈や、胸痛や喃苦しやと顛倒ある、
女房驚き懷抱へ法眼様春甫殿、ちやつとくとと
はれば、ヲ、春甫は是に有る、六道の御供と、合口腹
に突立んとせし處に、法眼駈出否御供は某と、合口捻
取突立んとする所を、又絶付毒薬の匙取は此春甫、我

ぞ死ん否我こそくと捻合く、終に師匠にもぎ取れ、
なふお師匠様まだ腹立が止ぬか、我ぞ死せて御厚恩送
らせて給たまへと、どうと伏して泣きければ、地師匠
は弟子の心を感じ、フシ暫し涙に暮けるが、地欲に耽つ
て法眼が毒薬をもつたと思ふかや、詞恥かしや繼母の
頼みと言ふも偽り、地忝くも源氏の大將頼朝公、枕を
並へ御子をなせし最愛の姫君を、平家の侍山木づれが、
奥よ妻よと言はせん事、詞末代の譏り氏の疵、御父義
朝の御臺常盤御前も、清盛が妻と成てこそ憂恥を見給
ひし、我等が先祖も源氏の御家人、骨髄に通つて無念
なれども、地親子の所爲は詮方なし、僅の女性一人に
源氏の名を流さんより、御自害を勧めんとは思ひしか

ども、御心を度りかね扱こそ毒薬もりしなり、然れども薬方相傳の時匙を取て調合せば、生々の父母を永劫奈落に沈んと、書たる誓詞に二親の、業苦の程の悲しさに、匙は汝に取せしが毒害せしは法眼、源氏の恥辱雪ぐからは今生の思出、主君の妻に毒を盛り、其科を弟子に塗る、法眼にてはなき物を冥途のお供迄も成し先走り致さんと、突込まんとする手に取付きて有難き御心、去ながら夫は師匠の道立て、我等が弟子の孝行立す、此上の御恩に春甫に死なせて下されと、師弟心を感じ合ひ、不覺の涙はせきあへず、今を限りの藤の前、苦しき息の下よりも、頼母しの人々や、たとへ自ら千年百年ながらへても、夫に恥辱を取せて何の生

●みつぐ 他を助けて錢物を贈ること。即ち頼朝によく奉公をせよとあり。

甲斐 フン有るべきぞ、山木へ縁に付くならば、一日も生きまいと、地豫て死身に極めたれば、此毒害に怨はなし、自害を思ひ止りて頼朝様をみついでたも、淨瑠璃御前と義経様と中裂れしも父の所爲、自ら故の事なれば、此二つを頼み置く、頼朝様へも云ひ度いこと數々ながらもふ堪らぬ、氣も遠なる眼も眩む、したいくに聲弱り、死んでたもんなたもんなと、夕霧闇き短夜の、宵の夢とぞ消給ふ、フン痛しかりける最期なり、地師弟は猶も義を重んじ、いざ此上は一人残つて遺言守り一人は是非死なん、實に我死んと死を争ふ、女房涙に暮ながら、御遺言重ければお二人を百人にも仕度い程なる大事の身、地死なで叶はぬ義理ならば有

つて益なき女の身、我こそと言ひも敢ず、餘りし毒藥
 突と呑む、是れはくと言ふ暇もあら苦しやと身を悶
 へ、五體變じて紫に目を見詰め齒を喰縛り、ぎやつと
 計りを最期にて、フシ同じ枕に臥しければ、地物に動せ
 ぬ弟子師匠、二人の死骸に抱付き、前後不覺に取亂し、
 フシ大聲揚て歎きしは、フシ道理とこそ聞えけれ、ア、
 我ながら狼狽たり、伊東が方へ聞えては君の御爲如
 何なり、地先亡骸を葬むり佐殿を密に落し參らせ、北
 條の四郎時政を頼み、御謀反勸め奉らんと忍びくの
 謀、地扱こそ頼朝御代の後、此師弟に恩賞深く、法
 眼は醫道を以て忠有迎醫法と召れ、弟子は義を以て誠
 有とて義法と召れ、頼朝の膝下去らず、醫法義法の法

●伊達小袖 晴小袖といふに同じ
 ●繻子髪 *
 ●六つ武藏 辨慶の七つ道具より
 六つ武藏と武藏坊に、遊後のなま
 れしをかけたるなり。むさしは
 八道行成といふ。盤に敷線を割し
 石六つを以てさすより六つむさし
 といふ。又十六むさしといふも同
 種なり。
 ●梓弓 往古弓は梓の木にて作れ
 るより名付く、後には引くといふ
 ことの枕詞に用ふ。
 ●紫のゆかり求めて杜若 これは
 「伊勢物語」にある八橋杜若の故事
 に因みていへるなり。

師武者、名を千歳にぞ 三重へ揚にける、フシ其白幡に、
 従ひて、坂東八箇國頼朝の御手に屬し、討手登り給ふ
 由奥州に聞えしかば、九郎御曹司義經、秀衡が催しに
 て、奥勢十萬餘騎を參らする、義經御悦喜淺からず頼
 朝の見參に入、御代官を蒙るまでは物の具憚り有へし
 と、御供の上下残りなく、鎧の上の伊達小袖、兜を脱
 て太髻結鬢付縹子びん天鷲絨脚半、駒も嘶ふる轡の音
 しゃんくくくと振出す、七つ道具に六つ武藏、辨
 慶は押の役、八つ鎧持鉢箱、持鎧持弓梓弓引もちぎら
 ぬ行列は、柳を手折門出や、花の都に 三重へ登らるゝ、
 フシ彼紫の 地由縁求めて杜若、三河の國に御陣を召さ
 れ、峰の薬師に御參詣立歸らんと仕給ふ處へ、淨瑠璃

蓬萊の島臺

*

色ある女房

みめよき女なり。

御前の女房達、有明更科帥のすけ、空さゆ月さゆ千壽
 の前、長柄の銚子御土器、蓬萊の島臺携へ母の長者御
 上洛を待受、御首途を祝ひ申せとて、迎ひ参らせ候、
 目出度聞召れよや、フン千秋樂とぞ祝ひける、地義經聞
 給ひ只今其方へと思ふ折柄義經が好物とて歴々色ある
 女房達、御使に給はる段返すく満足、追付参つて淨
 瑠璃にも對面せん、各先へと宣へば、有明更科承はり、
 扱は御存知候はぬか、關東の目代山木の判官地頭な
 れば、伊東の祐親より吟味厳しく、源氏方の縁組を堅
 く改め申す故淨瑠璃様は先暫く御遁世と披露して、あ
 の谷蔭の庵室に忍びて御入候らへば、此地の御下山
 は御慎みましうて、やがて目出度平家を亡し御凱陣

飛鳥川

大和の名所なればしか

の時分は、世間廣ふ御對面、夫を心のお力にて、戦に
 打勝給へや先御銚子と言ひければ、義經驚き否々夫
 は誠しからず、行末知れぬ源氏なれば、時めく平家の
 大名に、引着られし矢矧の姫、地一夜に變る淵瀬こそ
 大和に有ると聞けるが、何時東路の飛鳥川、底意の程
 の悪さよと、ナクリ恨みくづおれ給ひける

冷泉節

フン斯る處に、年の齡三十餘りの尼二人、花の帽子に
 五條袈裟、フン濃墨染に身を窶し、左には花籠右手には
 珠數を爪繰りて、御曹司のフンお前間近く参りつゝ、
 地涙に物を語せて、さしうつふひてぞ居たりける、

●蒲原宿の約束
 「吹上の段」をいふ。吹上の濱は蒲原宿の右の方にあり。牛若矢矧にて淨るり御前と一夜の契りを結び金賣吉次に從ひ、淨るりと別れ奥州へ下らんと此所迄來り、病に罹りて一人濱邊に打伏し、今を限り命といふ所へ、正八幡の告にて淨るり冷泉を連れて來り、看病のかひありて本腹して奥州へ下る此の時、はじめて實名をあかし、明年奥州秀衡が八十萬騎の勢を以て平家追討の爲め上洛すべしとの詞あり。此の事が伊東の耳へ入りしとなり。

地御曹司は御覽じて、あれなるは冷泉か、十五夜にては非ざるか、フシ扱も久しの冷泉や、扱淨瑠璃はと、フシ問せ給へば、二人の比丘尼承はり、目出度は東の殿、扱拙きは妾が君にて止めたり、御身東へ下向の時、まだ音も馴ぬ蟬折の、一よ重ねし妻琴や、地又は駿河の國蒲原宿の約束が、伊豆の伊東へ洩聞へ、地日は五十八夜は百人の番衆を附、何國へ成りとも、フシ紛れ行きや淨瑠璃と、フシ日に幾度か使立つ、今はせんかた風吹く、地峰の薬師の篠谷とて、人も通はぬ谷陰に、竹の柱や松葉垣、柴の編戸に引籠り、里の便も聞ざれば、池の眞菰を片敷の、フシ肌を隠す苔衣、チクリ一澤邊に、降ては根芹を摘み、山田の畔に落穂を拾ひ、繋ぐ命の

憂三年、地今や音便今や便宜と待宵の、地夢の通路絶果て、御曹司戀しやと其戀風が積り來て、無常の風の病ふの床遂に果敢なく成給ひ、あの篠谷の苔の下、若木の花は散果て、跡には名のみ有明の、十五夜冷泉が身の有様、是御覽せと計りにて、フシかつばと伏して泣ければ、地有明更科帥のすけ其外の女房達、何を隠さん我々も、君を祝ひ參らせて、斯は出立候へ共、變し姿を御覽せよと、襦袢脱けば墨の袈裟、柳の髪入髪は、解て亂れて斷切の、フシ哀れ悲しき有様に、地扱は誠か不便やな、せめて今はの形見ぞと、二人の尼に絶付聲も惜まず泣給ふ、痛はしかりける次第なり、稍有て義經、細せめて亡人のしるし成とも見せてくれよと宣へ

●卵塔 五輪塔又は卒塔婆をいふ。

●女人成佛提婆品 「法華經」第十
二、「提婆達多品」には、提婆及び
八歳の龍女を出し、惡人女人の成
佛を説ける故に、女人成佛提婆品
とはいへるなり。
●忽然之間變成男子 「提婆品」中
にある語。當時衆會皆見龍女忽然
之間變成男子具菩薩行即往南方無

ば、彼卵塔こそ御墓所、亡骸を灰となし御骨を納め、
地一年君と添寝の夜の、御肌着を幡に縫ひ、土中に埋
置候なり、いざ御案内申さんと、チクリ泣々谷を分過
て、卵塔開かせ水手向、暫く御回向有りけるが如何に
方々、思へば淨瑠璃は我出陣の守り神と覺るぞや、
人間の習ひ恩愛執着に命を惜み、思はぬ後れも取事あ
り、聞ば兄頼朝の妻伊東が娘も死したるとかや、兄弟
浮世に執着なく、一命を輕んじて、平家をやすく滅
ぼさん天の示し有難しと、女人成佛の提婆品高らかに
遊ばし忽然之間變成男子と讀上給へば、不思議や五輪
飛碎けて、光明赫々たる其中に、衣裳の幡翻して、
成佛の相を現せしは、三重有難かりける一經力なり、

●浮島ヶ原に御着陣 浮島ヶ原は
黄瀬川の南の方にあり。源頼朝平
氏を討んとて、治承四年三月兵を
擧げ、關東の將士を黄瀬川に會す
「源平盛衰記」に曰く、源氏はひや
うに大勢招き集りて足柄山を打ち
越て、伊豆國府に着きて三島大明
神を伏し拜み、木瀬川宿車返し富
士の麓、野原中宿多胡の宿富士川
のはた木の下草の中にみちくた
り。
●龜井片岡伊勢駿河 義經旗下の
勇士。
●兄弟見參 義經兄頼朝の兵を起
すを聞き、奥州を出發し、佐藤繼
信忠信の兄弟を始め二十四人の士
と共に、駿州浮島ヶ原に來り、は
じめ頼朝を見る。
●薬師は東方 薬師は東方淨瑠璃
國の教主なればしきいふ。
●源氏も東國 源頼義、義家等が
關東に武威を輝し、前九年後三年
の役以來、將士をなづけ民心を得
たる根底深く、東國には源氏に心

フシ斯る處に武藏坊辨慶龜井片岡伊勢駿河追々に馳來
り、詞右兵衛の佐殿は、浮島ヶ原に御着陣の由、早御
旗を立られ、御發向然るべしとぞ申しける、地扱こそ
只今申しつる吉左右は是成るぞ、兄弟見參始めてぞや、
いざ花やかに出立べしと、御馬引立御弓張り、御旗竿
を押立、御旗附んとせし所にあら有難や、墓に掛りし
佛の幡ひらりくと閃いて、旗竿に掛ると見えしが、
小袖の模様旗の手ははらりくと落散て、忽ち源氏の
白旗に、薬師の梵字ありくと有難しく、薬師は
東力源氏も東國、日本固より東の國土、西海四海の敵
を滅し、源氏一統御代萬歳五穀豐饒の日の光、君が威
勢の恵みに據て、光りを添る淨瑠璃の魂の徳こそ目出

を寄するもの多ければ源氏も東國といへるなり。
●西海四海 西海道四國にて八島壇の浦等の合戦ありて平家を滅したるをいふ。

度^たけれ

國性爺合戦

解題

「國性爺合戦」は、正徳五年十一月の興行にして、近松六十三歳の作なり。此の淨瑠璃未曾有の大當りにて、三年越十七ヶ月興行を續けし事は、世の冷く知る所なり。又國性爺即ち鄭成功の父は、芝龍とて明季の亂に遁れて我國肥前平戸に流寓し、田川氏を娶りて成功を産み、成功十四歳の頃、父に従つて明に歸り、明の回復を圖り、戦遂に勝たずといへども、臺灣に據りて前後二十餘年、清朝に抗し且我國へ援兵を請ひし等の事實は、頗る人口に膾炙したり。竹本座においては、此の前年筑後掾歿して、其の存亡も如何あらんと危ぶましめ、一方には豊竹越前掾の新銳の氣勢當るべからざるものあり、西座はさながら明末の如く、東座は韃靼王に似たる時、近松國性爺を選び、明の社稷を回復し、韃靼王を虞にするといふ趣向は、有意か無意か、當時兩座の形勢に髣髴し、遂に此の作にて竹本座の基礎を確定したるは、頗る奇といふべ

し。『國性爺』の大當りによりて劇界を聳動し、翌正徳六年には、京大阪江戸三ヶ所において、之を歌舞伎に演じたるなど、曾て聞かざる所なり。淨瑠璃にては、竹本座にて翌享保二年『國性爺後日合戦』を出したるも當らず、同七年『唐船嘶今國性爺』を出したれども、是又不入にて何れも失敗に終りしといふ。豊竹座にても海音作の『傾城國性爺』あり、興行は正徳三年と『外題年鑑』には見えたれど、こは年鑑の誤りにて近松の作を真似て作りたるものなる事いふまでもなし。なほ外に錦文流作の『國仙野手柄日記』といふあり、文彌節の正本にて、手つま太夫山本飛彈掾今文彌等の名あり、興行年月詳ならず。さて國性爺の性の字については、鄭成功が朱姓を賜はりしに因り、國性爺と號したるなれば、姓の字を用ふべき事當然なるに、性の字を用ふるは、思ふに丸本の字體が草書にて、女偏が立心偏の如く見えしより、段々誤り傳へて今日に至りしものなるべく、正本の中には姓の字を用ひたるもあり。又性を性とはねて讀む事に就ては、『難波土産』にも論じたる如く、作者が支那めかさん爲に、南京北京の例にならひたるなるべしといふも一理なり。されど上方訛り殊に女詞には、せいの音をせんと

はねて讀む僻は他にもあり、例へば傾城の假名をけいせいといはず、けいせんとはねて讀む類なり。此の訛りを利用し支那音めかしたる例の作者の頓才なるべし。本書の註釋については、古くは『難波土産』新しくは『近松の研究』中に關根正直氏のものありて大いに助りたり。二家の註を其の儘用ひし所には『難註』と記す。こゝに幽明兩大家に對し、一言感謝の意を表す。

國性爺合戦

近松門左衛門作

●華飛び蝶駭けども人愁へず、水殿雲廊別に春を置
 れは「三體詩」に出たる陸龜蒙の、
 「那宮」を詠したる詩「華飛蝶駭不
 愁人、水殿雲廊別置春、曉日親
 粧千騎女、白櫻桃下紫綸巾」を取り
 しなり。都は魏の曹操の建てし都
 なり、其の後趙の石季龍に居
 りて奢侈好色度なく、女騎千人を
 幽薈となし、之に紫綸巾熱錦袴を
 着けしめたりといふ。此の時ば石
 氏を諷したるものなれば、恰も大
 明思宗帝の暗愚にして國を治めず
 忠臣を斥け後人を近げ、酒色に沈
 溺して國亂發生の幕の、序詞とは
 なしたるなり。即ち其の意は、花
 は散り蝶は駭き春は盡んとすれど
 も、宮中の人は愁ふる色の見えぬ
 もことばり、禁中には水を盡きた
 る御殿や雲を盡きたる廊や、自然
 の春の外別に春を置くものあれば

序詞 華飛び蝶駭けども人愁へず、
 水殿雲廊別に春を置
 く、曉日粧ひなす千騎の女、紅唇翠黛色を交へ、土も
 蘭麝の梅が香や、桃も櫻も長へに、花を見せたる南京
 の、
 抑大明十七代思
 宗烈皇帝と申奉るは、光宗皇帝第二の皇子、代々の讓
 の、
 地、
 寶
 の、
 寶
 を積んで貢物、歌舞遊宴に長じ給ひ、玉樓金殿の中に
 は三夫人、九嬪二十七人の世婦、八十一人の女御あり、

●蘭麝 蕙香の一種にして、麝の
 臍のあたりにある香料なりと。蘭
 の芳香に似たるより蘭麝といふ。
 ●南京 もと金陵と稱す。明の太
 祖に都す。永樂十九年北平に
 都を遷し、之を北京と名付けしよ
 り、爾來金陵を南京と稱す。思宗
 の崇禎二年、北京は建都の爲に陷
 落せしより、今南京を以て首都と
 せしなり。
 ●思宗 光宗の第二子にして熹宗
 の弟なり。即位は清太宗の天聰二
 年に當る。
 ●三夫人 九嬪廿七人の世婦八十一人
 の女御 天子に仕ふる宮女の數
 「禮記」に出たる通りなり。夫人は
 正妻、嬪以下は女官なり。
 ●三千の容色 天子の後宮に集ま
 れる美人の數の多きを形容したる
 なり。
 ●群臣諸侯 群臣は天子の左右に
 待する百官百司、諸侯は大名なり。
 ●二月中旬にふりを献する榮花

凡三千の容顔を悦ばしめ、群臣諸侯媚を求め、珍物
 奇觀の捧げ物、二月中旬に、
 地、
 ありて、此月御産の當月、君の叡感臣下の悦び、聖壽
 四十に及び給へども、世繼の太子在さず、豫て天地の
 御祈禱此度に驗しあり、王子誕生疑ひなしと、産屋に
 名珠美玉を列ね、産衣に越羅蜀錦を裁ち、御産今やと
 用意ある、中にも大司馬將軍吳三桂が妻柳歌君、此頃
 初子を平産し殊に男子の乳なればとて、御乳附の役人
 其外乳母侍女阿監、役々の官女附添て、掌の上の、
 珊瑚の珠とぞ嘉祝ける、
 地、
 韃靼國の主順治大王より使を以て、
 詞虎の皮豹の皮、

唐の王逵が華清宮を誅したる詩「酒樓高樓一百家、宮前楊柳寺前花、内園分得温湯水、二月中旬既獻瓜」に取れり。これ「三體詩」に出たり。華清宮は唐の玄宗が驪山に温泉宮を設け、之れに命じたる名なり。これも思宗が香後を玄宗に比したるにて、温泉といひ、二月の瓜といひ今より見れば、敢て珍らしきにあらずも、當時にありては榮耀の上盛りなりしなり。瓜をふりと讀むことの古意にかなへる事は關根氏の註にも見えたり。

●観感 天子の御感。

●越羅蜀錦 越の國の羅、蜀の國の錦いづれも名産なり。

●大司馬 前漢には三公の一。

●吳三桂 實録には、鄭成公より稍後れたる人。康熙十二年清に反して兵を起し、同十四年滅亡。

●阿監 監宮とも稱し、宮女の頭なり。

●中呂 四月のこと。

●崇禎十七年 此の年思宗崩じ、清の世祖位に即き、治と改元す

●南海の火浣布 火鼠の毛を以て織りしものにて、火に入るとも焼

南海の火浣布刺支國の馬肝石、其外邊國島々の寶庭上に竝べさせ、使者貝勒王謹んて、韃靼國と大明國古へより威を勵み、國を争ひ軍兵を動し、鋒先を交へ、互に仇を結ぶ事、且は隣國の好に違ひ且は民の煩ひたり、我が韃靼は大國にて七珍萬寶くからずと申せども、女の形餘國に劣て候、此大明の帝には華清夫人とて隠れなき美人在する由、我大王戀焦れ深く所望に候へば、此方へ贈り給つて大王の后と仰ぎ、大明韃靼向後唇齒の因をなし、長く和睦致さんとかたの如くの御調物、數ならねども鎮護大將貝勒王、后御迎の爲め、參朝とこそ奏しけれ、地帝を始め卿相雲客、今に始めぬ韃靼の難題、すは諍亂の基ぞと、宸襟安からさ

けず、雲南地方の名産なる由「三才圖會」に見えたり。又一種石綿を以て製したるものは、耐火力弱しと。馬肝石これも寶石なるべし。

●遼國 片田舎のこと。

●七珍萬寶 多くの寶をいふ。

●唇齒の國 利害得失を同する國。「戰國策」に曰く「趙の齊楚における隣國なり、なほ齒の唇あるが如し、唇亡びて齒寒し、今日趙を失せば明日齊楚に及ばん」。

●御調物 みつぎは屬國より母國に致す貢物なり。されどこゝはたゞ進物といふまで。

●宸襟 * 實録にはなし。切利天の音を轉倒して敵役の名とす。

●辛の巳 崇禎十四年の干支。

●三皇五帝 三皇は伏羲、神農、黃帝、五帝は少昊、顓頊、帝嚳、

る處に、第一の臣下右軍將李踏天進み出で、今迄は國の耻辱を謹み隠し置き候、去る辛の巳の年北京五穀實らず、萬民饑渴に及びし刻み、某私に韃靼を頼み、米粟數百萬石の合力を請け國民を救ひ候ひき、其返報に何事にて、韃靼の望み一度は必ず叶へんと堅く契約仕る、君今四海を保ち民を治め給ふも、一度韃靼の情に依てなり、地恩を知ぬは鬼畜に同じ、御名残はさる事なれども、疾々后を送られ、フシ然るべしとぞ奏聞す、地大司馬將軍吳三桂待陋殿にて篤と聞き、御階欄千踏散し李踏天が膝元へどうと座し、調不便や御邊は何時の間に畜生の奴とは成たるぞ、忝くも大明國は三皇五帝禮樂を興し、孔孟教を垂れ給ひ五帝五倫の道今

此地度臣が身を捨て君を安んじ國の耻を清むる忠臣の
 仕業、是見給へと小劍逆手に拔持ち弓手の眼にグツと
 突立て、眼蓋を懸てクルリくと繰出し、朱に成たる
 睛引攔んで、なふ御使者兩眼は一身の日月左の眼は陽
 に屬して日輪なり、片目なければ不具者、一眼を抉て
 韃靼王に奉る、地國の恩を報ずる道を重んじ義を守る、
 大明の帝の忠臣の振舞是候と、笏にするて差出せば、
 貝勒王押戴き、調ア、適れ忠節や候、只今吳三桂の言
 分にては、否共兩國權を争ひ合戦に及ぶ處、天下の爲
 に身を捨て事を治め給ふ事神妙く、地忠臣とも賢臣
 とも申すにも餘りあり、后を迎へ取たるも同前、我大
 王の叡感使に立たる某も、面目是に過ぐべからず、

●伍子胥が餘風 伍子胥は吳王夫
 差の臣なり、吳王會稽山に越王を
 破り越王より和を乞ひし時、伍子
 胥吳王を諫て、一舉越を滅すべし
 とす。されど大宰嚭の讒言によ
 りて容れられず、却て屬鐵の劍を賜
 ふ。伍子胥王の不明にして、今我を
 殺すも久しからず、吳は越の爲に
 滅されん、我眼を東門にかけよ、
 越より攻來り吳の滅亡するを見ん
 と云ひ、遂に自ら首刎れて死す。
 後果して越の讎ふ所と爲り、吳子
 胥の眼はそれを見て笑ひしといふ
 今李蹈天が、左の眼をくりぬきし
 といふ事を、此の伍子胥の眼に比
 したるなり。

フシ 早御暇とぞ奏しける、地叡慮殊に麗しく、李蹈天
 が眼を抉りしは伍子胥が餘風、吳三桂が遠き慮りは范
 蠡が趣あり、兩臣政事を糺す我國は千代萬代も變るま
 じ、韃靼の使は早本國に返すべしと、宴樂殿に入り給
 ふ、實に佞臣と忠臣の面は似たる紛れ者、目利を知ら
 ぬ南京の君が、榮華ぞ 三重一例なき、フシ爰に帝の
 地御妹梅檀皇女と申せしは、まだ御年も十六夜の、月
 の都の宮人の胤や此世に降る露の、フシ玉をのべたる御
 形、管絃の道文の道文字も働く口吟み、日本で歌とい
 ふげなが男女を和ぐとや、爰にも戀の媒介は變らぬも
 のと詩を吟じ、年より古し御心、兄帝の奢の様、色に
 耽り酒宴に誇り、朝政し給はぬ御意見の種にもと、行

もはせ、男女のなやなをやはらげ
猛き武夫の心をなぐさむるは
歌なり」とあるによる。

●朝政 (關註) 長恨歌に、春宵苦
短日高起、從是君王不早朝。云々
あるを本にして、源氏物語相奩の
卷に「明くるも知らずと思はし出
づるにも猶朝まつりことは怠らせ
給ひぬべかんめり」とかける語を
とれりに見ゆ。

●伽羅 意氣又は粹などの意。

●長生殿 これも「長恨歌」に出た
る玄宗皇帝の楊貴妃と戯れし御殿
の名をこゝに用ひたり。

●后達 後宮の美人のこと。

●萬乗の位 (雜註) 「天子の位を
いふ。禮記の王制に、天子は萬乗
の國、諸侯は千乗の國といひて、
天子の御領地は軍車を萬乗出す程
あるものゆへにいふとなり」。

儀正しく御身持伽の女官召寄て、浮世咄も囁きの、フシ
耳は戀する眼は睨む、心が伽羅の焚さしの、思ひ埋み
てあかさるゝ、地長生殿の方より出御なりと呼はつて、
二十歳限りの后達二百人、梅と櫻の造枝、百人宛片わ
けて振かたげ、左右に召具し入給ひ、詞なふ妹君、我
萬乗の位に即き、臣下多き其中に、右軍將李滔天は遂
に朕が命に背かず、朝暮心を慰むる第一の忠臣、御身
に心を懸ると聞く、幸ひ朕が妹聲にせんと思へども、
御身更に承引なく、今日迄は打過たり、地然るに此度
鞞鞞國より無體の難儀を言かけ、既に合戦に及び國の
亂と成るべき處、吳三桂などが忠臣顔口先の道理は誰
も言ふ事、李滔天が左の眼を抉て宥めし故、使も服し

●北京の都 明太宗の永樂十九年
に、北平に都を遷し、これを北京と
稱し、金陵を南京と稱したること
前にいへり。

●風流陣 これも玄宗の故事なり
玄宗華清宮に貴妃と宴樂の時、宮
女百餘人を兩陣に分ちて旗幟をも
つて攻撃し敗者には爵益を科す、
之を風流陣といふ。前にいふ花軍
も之を習ひ、玄宗の驕奢を其の儘
思宗に寫したるなり。

て歸つたり、詞國の爲君の爲身を捨て不具と成る、末
代無双の忠臣賞せずんば有るべからず、地是非に朕が
妹聲北京の都を譲らんと約せしが、御身承引有るまじ
と此花軍を催せり、詞賢女立してすんくと言なき御
身が心を表し、梅花を味方に參らする、朕が味方は櫻
花、女官共に戦はせ、櫻が散て梅が勝たば御身の心に
任すべし、地櫻が勝て梅花が散らば御身の負に極て、
李滔天が妻となす、天道次第縁次第、勝も負るも風流
陣かゝれやかゝれと宣旨有る下知に従ふ梅櫻、地左右
に分つて備へける、地勅諭なれば姫宮もよし力なし去
ながら、心に染まぬ妻定め左右なう引べき様はなし、
詞花も我身もさきがけて、當今の妹梅檀皇女縁の分目

●頭に挿せば二月の雪、これは「頭詠集」に在原尊敏が「千日」の吟「倚松根、而摩腰、千年之翠滿手、折梅花、而挿頭、二月之雪落衣、」を取りしなり。即ち下の二句、梅が枝を折りて頭に挿さし挿めば、花の散かる状態ながら二月の雪が衣袖に降りかかる如しといふこの花軍の形容に用ひたり。

の晴れ軍、地大將軍は我なりと名乗もあへぬかざしの梅、誰が袖觸れし梢には群居る鶯の翼にかけ散らす、羽音も斯やと梅が香も、芬々と打亂れ、フッ受つ流しつ戦ふたり、姫君下知しての給はく、柳渦く木蔭には風ありと知るべし、弱き枝には蒼をもたせ、強きに花を開かせよ、うつろふ枝を楛にかへて互ひに力を合すべしと、花に馴れたる下知によつて、喚いて蒐れば花を踏で、同じく惜しむ色もあり、唯一文字に頭に挿せば二月の雪と散るもあり、落花狼藉入亂れ軍は花をぞ三重散しける、地豫て帝の仰せによつて心を合せし女官達梅方態と打負けて、枝も花も折亂され、フッむらくばつと引きければ、地勝色見せし櫻花サア姫宮と

●類伽の聲 女官達の麗しき聲を迦羅類伽に比したるなり。

●偃月の戟 偃月は額の骨の名なり、それに似たる戟なるより偃月の戟といへり。偃月刀といふに同じ。



●関の聲 戦の初めに、兩陣相發する合圖の喚聲なり。

●一家仁あれば一國仁を興し「大學」に「一家仁一國興、仁一家讓一國興、讓一人貪戾一國作亂、其機如此」とあるを取れり。一家は君の家、一人は天子をさす。

李蹈天、御縁組は極まつたりと數多の女官同音に、凱歌揚る類伽の聲、宮中響き渡りしは、千羽鶯百千鳥轉りかはす如くなり、地司馬將軍吳三桂、鎧兜さはやかに出立て、偃月の戟會釋もなく振廻し、梅も櫻も散々に薙散し御前に畏り、詞只今玉座の邊りに合戦有とて関の聲殿中に響き、宮中以ての外の騒ぎによつて、物の具固め馳參じ候へば、さて馬鹿らしや、御妹梅檀女と李蹈天が縁定めの花軍とは、天地開けて以來斯る呆氣たる例を聞ず、君知しめさずや、一家仁あれば一國仁を興し、一人貪戾なれば一國亂を起すといへり、地上の好む處に従ふは民のならひ、此事を聞及び山樵土民の嫁取聳取、此處にても花軍彼處にても花軍、喧

●逆臣

君に對し叛逆をなす臣。

嘩鬪諍の端となり花は散て打物業、眞實の軍起らん事
 鏡にかけて睹る如し、地只今にも逆臣起り宮中に攻入
 り、喚き叫ぶ鬨の聲は聞ゆるとも、すは例の花軍と馳
 參る勢もなく、玉體を暗々と逆臣の刃にかけん事、勿
 體なしとも淺猿しとも、悔むに甲斐のあるべきか、
地其逆臣佞臣とは李蹈天が事、詞君は忘れ給ひしか御
 若年の時、鄭芝龍と申す者佞臣を擯け給へと諫め申す
 を逆鱗あり、鄭芝龍は追放たれ、今老一官と名を變へ
地日本肥前の國、平戸とかやに住居致すと承る、地鄭芝
 龍が傳へ聞、日本まで大明國の御耻辱ならずや、詞先
年大明飢饉の時、李蹈天が邪智を以て、諸國の御藏の
 米を竊み、君に憐みなきゆるにおのれ韃靼の合力を受

●謀叛

君主に叛きて兵を起すこと。八逆の一。

●五刑の罪

五種の刑罰。墨、劓、
 剕、宮、大辟是なり。墨は罪人の
 額に入墨すること。劓は鼻切ること。
 剕は足切ること。宮は男なれば勢を抜き、女なれば鬪を閉すも、
 大辟は死罪なり。

●聖人出世の此國 三皇五帝孔孟
 等の如き聖人出でて、教を垂れたる國。

け、地民を救ふといひなし、國中に散し與へ、萬民を
 撫け謀反の臍を堅めしと、知し召されぬ愚さよ、地彼
 が左の眼を刮りしは是ぞ韃靼一味の合圖、御覽候へ
南殿の額、大明とは大きに明かなりといふ字訓にて、
月日をならへ書たる文字、地此大明は南、陽國にして
日の國なり、韃靼は北陰國にして月の國、陽に屬して
日に譬へし左の眼をくつたるは、地此大明の日の國を
 韃靼の手に入ん一味の印、使も敏く其理を悟り悦んで
 立歸る、積悪奸曲の佞臣早く五刑の罪に沈めずんば、
地聖人出世の此國忽蒙古の域に陥ち、尾を振り皮を被
 らぬ計り畜類の奴となり、天地の怒り宗廟の神崇りを
 なし、其罪帝の一身に歸せん事拳を以て、大地を打つ

●宗廟 天子祖宗の廟。宗は本。又尊なり、廟は貌なり、先祖の形貌を髣髴する所以なりと。

●逆鱗 *

●大の字の金刀點 大の字の右へ引く點なり。(難註) 筆法に點の名さまあり、大の字は三點にて大の一字を玉案と名づけ、左へ引く點を犀角と名づけ、右へ引く點を金刀と名づく、其形刀の身に似たるゆへなり。
●聳る しひるは脹れたる物が空くなつて縮むの意。目しひなどより轉用したる語にて、耳の潰れたること。

には外るゝとも、吳三桂が此詞は違ふまじ、恨めしの叡慮やと泣つ、怒りつ理を盡し、フシ詞を盡して奏しける、地帝大きに逆鱗あり物識顔なる文字の講釋、理を附て言ふならば白雪却て黒しともいふ義有り、詞みな李蹈天を嫉みの詞、事もなきに甲冑を帶し朕に近寄る汝こそ、地逆臣よと立蒐つて御足にかけ、吳三桂が眞向を踏付給へば、不思議やな、御殿頻に鳴動して勅筆の額搖ぎ出で、大の字の金刀點、明の字の日偏、地微塵に碎け散たるは、フシ天の告かと恐ろし、地吳三桂猶身を惜まずエ、情なや、詞御眼も暗みしか御耳も聳たるか、大の字の形は一人と書たる筆畫、一人とは天子帝の御事、其一人の一點取れば帝の御身は半身、明

●太祖高皇帝 明の太祖姓は朱、諱は元龍、宗は國瑞、元の至正十五年兵を起し、元を滅し大明と號し、應天府に都す。
●宸翰 天子の御直筆。

の字に偏なければ日の光なき國は常闇、忝も彼の額は御先祖太祖高皇帝、御子孫繁昌御代萬歳と宸翰を染め給ふ、地宗廟の神の御怒り畏しと思召し、道を正し非を改め御代を保ちましまさば、君に擲つ吳三桂が一命、踏殺され蹶殺されても厭はゞこそ、土ともなれ灰ともなれ忠臣の道は違へじと、御衣に縋り大聲揚げ、涙を流し諫めしは、代々の鑑と聞えける、地斯る處に四方八面人馬の音、貝鉦鳴し太鼓を打ち、関の聲地を動し、フシ天も傾ぶく許りなり、地思ひ設けし吳三桂高樓に駈上り、見渡せば山も里も韃韃勢旗を靡かし弓鐵砲、内裏を取巻攻寄せしは潮の滿來る如くなり、地寄手の大將貝勒王庭上に乗入り大音上げ、詞抑我國の主

●浙水

米を研き洗ふ時の白水。

●水子

嬰兒のこと。

順治大王、此國の後華清夫人に戀慕とは謀略、懷妊の
 后を召取り大明の帝の胤を絶さん爲、李蹈天が眼を刮
 て一味の印を見せたる故、時を移さず押寄たり、迎
 も叶はぬ吳三桂、帝も后も擲取て味方に降り韃靼王の
 臺處につくばい、浙水でも啜つて、命をつゞけとぞ
 呼はりける、詞ヤア事をかし、百八十年草木も揺がぬ
 明朝を、攻破らんなんどは大海に横はる、鯨を蟻の
 狼ふに異らず、地彼れ追拂へくと駈廻つて下知すれ
 ども、我手勢百騎許の徒士武者ならで、公家にも武家
 にも誰有て、おり合ふ味方のあらざれば拳を握て立た
 る處に、地女房柳歌君水子を肌に抱きながら、后の御
 手を引立てなふ口惜や御運の末、公卿大臣を始め雜人

●大手

城の表門。

下郎に至るまで、李蹈天に一味して御味方は我々計り、
 無念至極と切齒をなす、地ア、悔むなく言ふて益な
 し、但し後の胎内に帝の胤を宿し給へば大事の御身、
 一方を切抜て君諸共に、某御供申へし其子も爰に捨置
 き、おことは一先御妹を介抱し、海道の港を差して落
 よくと言ひければ、心得たりと甲斐なくしく梅檀皇
 女の御手を引き、金川門の細道を、フシ二人忍びて落ち
 給ふ、地いで是からは大手の敵を一當あてて追散らし、
 安々落し奉らん御坐を去らせ給ふなど、言捨て駈出で
 明朝第一の臣下、大司馬將軍吳三桂と名乗かけ、百騎
 に足らぬ手勢にて、數百萬騎の蒙古の軍兵、割立てお
 ん廻し無二無三に切入れば、韃靼勢も餘さじと、鐵砲

●石火矢 中世用ひたる大砲の名。はじめは彈丸に石を填めたるより此の名あり。

●龍顔 天子の御顔をいふ。
●双の鏑は双より出て、双を腐らす槍山の火は槍より出で、槍を焼く〔難註〕此の二句成語にあらず、作者の造語なるべし。其の意は己れに出るものは己れにやへるといふに同じ。

●口に甘き食物は腹中に入れて害をなす 眞薬口に苦しの反語。これも作者の造語なるべし。

石火矢隙間なく、矢玉を飛ばせて 三重戦ひける、フシ
其隙に、李滔天弟李海方、玉體近く亂れ入り帝の御手
を兩方より確と取り、后夢とも辨へず、天罰知らずの
大悪人御恩も冥加も忘れしかと、縫り給へばヲ、おの
れとても助けぬと、取て突除け氷の利劍を御胸に差當
る、君は怒れる龍顔に御涙をかけながら、地實に双の
鏑は双より出て双を腐らし、檜山の火は槍より出て槍
を焼く、仇も情も我身より出るとは、今こそ思ひ フシ
知られたれ、地鄭芝龍吳三桂が諫めを用ゐず、己らが
詔に誑かされ、國を亡ひ身を失ひ末代に名を流す、口
に甘き食物は腹中に入れて、害をなすと知らざりし我愚
さよ、汝等も知る如く夫人が胎内に、十月に當る我子

●齋にこそ外れたれ、非時を食ふ 齋は僧家正式の食事、非時は變則なり。故に天子の御最期を見届け得ざりしは残念なるも、皇后を救

あり誕生も程有まじ、月日の光を見せよかし、せめて
の情とばかりにて、フシ御涙にぞ暮れ給ふ、詞ア、成ら
ぬ、大事の眼を刮出したは何の爲、忠節でも義理
でもない、君に心をゆるさせ韃鞨と一味せん爲、晴一
つが知行に成る、君の首が國になると取つて引寄せ、
地御首を水もたまらず打落し、サア李海方此首は韃鞨
王へ贈るべし、汝は后を搦め來れと言捨て、フシ寄手の
陣へぞ駈入ける、地司馬將軍吳三桂敵數多討取り、難
なく一方切開き君を落し奉らんと、立歸れば南無三寶
地御首もなき尊骸朱になつて臥給ひ、李海方后を搦め
引立る、ヤア味い處へ出合ふたな、我君の弔ひ軍齋に
こそ外れたれ、非時を喰ふと飛蒐り、李海方が眞向、

ひ参らすはせめての心やりとの意。
●印綬 唐土は天子以下百官に至るまで、其の位官についての印あり、常に之を帯ぶる法とす。綬は印の環に附する紐なり。

二つにさつと切割て後の縛め切ほどき、涙ながらに尊骸を押直せば、代々に傳はる御國譲り御即位の印の印綬御肌懸けられたり、エ、有難し是さへ有れば、御誕生の若宮御位心安しと、鎧の肌に入れ一先つ后を御供せうか、先づ御骸を隠さうかと、難儀は二つ身は一つ打碎かんと敵の勢、一度にどつと亂れ入るさしつたりと切拂ひ、込入ればなぐり立て打伏せ薙伏せ捲り立て、走り歸つて今は是迄事急なり、地御死骸は兎も角も一大事は御世繼と、后の手を引立て出れば、此比生れし我水子、乳房を慕ひわつと泣く、エ、邪魔らし去ながら、已も我世繼ぞと引寄て戟の柄に、確と結び付けこりや、父が討死するならば、成人して若宮に、

●木まぶり

木守りの詭り。

●札よき鐵

堅牢なる鐵なり。

●玉の緒

命のこと。

●十善

*

忠臣の根繼となれ、我等が家の木まぶりと振擔げてぞ三重、落人を、フン切留めんと、敵の兵慕ひ寄れば踏留り、切捨て打捨て引汐の、海道の港に着きにける、地是よりたいす府へ渡らんと、見れども折節船一艘も、渚に沿ふて立たる所に、四方の山々森の蔭、打かくる鐵砲は、チフリ横ぎる雨の如くなり、地吳三桂は札よき鎧飛來る玉をうけとめ、后を覆ひかこへども運の極めや胸板にはつしと當り、玉の緒も切れて敢なく成り給ふ、地吳三桂もはつと計り前後に暮れて立たりしが、御母后は是非もなし十善の御子胤を、胎内にて闇々と泡となさんも云ひ甲斐なしと、地劔拔持て後の肌押寛げ、脇腹に押當て十文字に割き破れば、血潮の中の初

聲は、玉の様なる男子皇子嬉しも嬉し悲しも悲し、遣
 る方涙に母後の袖引ちぎり押包み、抱き上しが待て暫
 し、地取巻たる四方の敵死骸を見付、若宮を秘し取た
 りと行末まで探されては、宮を育てん様もなしと篤と
 思案し、我子引寄せ衣裳を剥ぎ、宮に打掛け參らせ劍
 取直し、水子の胸先刺通し、地後の腹に押入れ適
 れ己は果報者、好い時生れ合せて十善天子の御身代り
 出来しおつた出来いた娑婆の親に心残すな、親も心は
 残らぬぞといへども残る憂名残、鎧の袖に若宮を、包
 む涙に咽返り別れ、ナクリ一行くこそ哀れなれ、フシと
 は知らず、地柳歌君梅檀女を誘ひ、港口まで落延しが
 前後に敵満々たり、サア是迄を遁るゝだけと、繁る蘆

●我武者

血氣に逸るをいふ。

間を掻分て、フシ身を忍びてぞ隠れ居る、調李踏天が侍
 大將安大人、手勢引具しどつと駈寄せ、今の鐵砲確に
 后か吳三桂に當たと覺えしと、四邊を見廻しこりや見
 よ、后を仕當たは、ハア腹を切割き、懷妊の王子まで
 殺した、忠節立する吳三桂、主君を捨て名をすてゝも
 命惜いか、彼奴は人前廢つた、地此上は彼が妻の柳歌
 君、梅檀女を尋ぬるばかり、眼を配れ高名せよと、
フシ四方に別れ走り行く、地中にも剛韃といふ我武者
 もの、いで梅檀女を召取り一人の手柄にせんと、鎧の
 上に簀打かけ、海士の小舟に棹して、フシ入江くを漕
 廻り、地此蘆の蔭が氣遣ひなと押分る權の先、柳歌君
 確と採り力に任せ跳返せば、舟端を踏外し俯伏に瓦波

と沈み、地浮揚らんとする所を權も折よと疊みかけ、
 打ば沈み浮めば打ち、息もつかせず泥龜の、泥を泳ぐ
 が如くにて、フシ水底潜り落失せけり、地工、無用の拔
 がけ、殊に舟まで仰付られた、渡りに舟とは此事と、
 船中にかくし置たる劍取て横へ、梅檀女を乗せ參らせ
 我も乗らんとせし處に、地何處より這上りけん、剛韃
 鎧も濡霏、戟提げて甘騎計り餘すまじと追蒐る、ハア
 忙がしや御覽候へ、敵手ひどく追蒐れば暫し防ぐ其間
 船底に隠れましませと、拾ひし劍と腰の劍、フシ二刀を
 振て待かけたり、地剛韃程なく駈付憎い女め、權で打
 た返報と、長柄の戟押取延て突かくる、ヲ、其方から
 當がうた此劍此方からも返報と、切て廻れば二十餘人

女一人に切立られ、陸に迷へる蘆邊の鷗、一羽もたゞ
 ず討るも有り、痛手を受けて逃るもあり柳歌君も剛韃も、
 數箇所の深傷朱に成一村蘆を押分け、追入り追
 込み互の眼に血は入たり、前後も分ぬ盲目打岸の岩角
 切先に、電光石火の命を限り危かりける 三重 有様な
 り、地剛韃戟も切り折られ、膝行寄てむんずと組柳歌
 君が持たる劍、挽取らんくと捻合ふ足を踏ためず、
 のけ様にかつばと伏す直に乗て乗懸り、刺通しく首
 ふつと搔切て、莞爾と笑ひし心の内、フシ嬉しさ類な
 かりけり、詞なふく、姫宮様お身には怪我もなかつた
 か、舟は其儘其處にかと、躑ひ寄て此體では船中のお
 供はならぬ、又敵が寄せ来れば最う何うも叶はぬ、潮

●八大龍神 八大龍王に同じ。海上の事を祈るなれば龍神を頼むなり。

に任せ何處までも落ち給へ、沖へ舟の出るまでは此女が陸に扣へた、敵何萬騎寄たりとも命限り腕限り、去りならら主從二度の對面は御縁と命計りぞや、隨分御無事で、地南無諸天諸佛別して八大龍神、萬乘の君の姫宮の御船を守護し給へやと、舷取て押出せば、地折しも引潮の名残を何と梅檀女、涙しほるゝ汐風に龍神納受の沖津風、沖を遙に流れ行くあら心安や嬉しや、よし此上は生延ても我身一つ、死でも誰を友千鳥生死の海は渡れども、妻の行衛子の行衛、君が行衛は覺東波の浮世の海を越へかねし、渡りかねしと言は言へ、此一心の早て船、仁義の櫓權武勇の楫は、折ても折れぬ沖津波、寄せ來る鯨波の聲かとして、劍に絶つ

●縹蠶たる黃鳥丘隅にとゞまる云々 本文は「大學」の詩云、縹蠶黃鳥止于丘隅、子曰、於止知其所止、可止以人而不止、如鳥乎。縹蠶は鳥の鳴聲、黃鳥は鶯の類にして多く丘隅に集るといふ。さて是までが「詩經」の詞、孔子これを引いて、鳥も止るべき場所に止まる、況や人として鳥におよはずといはれまじとなり。

●藻に栖む蟲 *

てたちくく、よろく、よろぼひ寄方の、磯山嵐松の風亂れし髪を搔上て、あたりを睨んで立たりし、和漢女の手本紙筆にも、寫し傳へたり

第一 はまづたひ

地縹蠶たる黃鳥丘隅にとゞまる、人として止る所にとゞまらずんば、鳥に如かざるべしとかや、爰に大日本肥前の國松浦の郡、平戸の郷に釣垂れ網引世を渡る、和藤内三官と云ふ壯者あり、妻も同じ海士の業藻に栖む蟲の我からと、仲人なしの手枕に括枕と締合し、小むつといへる名に愛て、フシ世を睦じく暮しけり、此和藤内が父は元日本の者ならず、大明國の忠臣、大

●暗き帝 暗愚の君といふに同じ。

●長沙の罪 漢の文帝の時、賈誼といふ賢士、正朔を改め禮樂を興さん事を建言して、絳灌といふ佞人の讒により、長沙王の大傳に貶せられたる故事なり。今恰も鄭芝龍が明の天子に疎せられて、日本に放浪するは、さながら賈誼の境遇に異ならずと。

●小六月 小春といふに同じ。

●備中鉄 熊手の如く、齒は三本もしくは四本にして長きもの。水田用の鉄。

●砂頭に印なきさむし 〔關註〕平家物語卷三、有玉島下りの段に、海の邊につきて尋ねるに、砂頭に印を刻む鳥、沖の白洲にすたく、浦千鳥の外は、あと訪ふ者もなかりけり云々しとあるに據る。
●かいどり 貝を探るといふを、鵜籠のかいどりにかけ、小棲しよぼくといひなしたり。

師大爺鄭芝龍といつし者なりしが、暗き帝を諫めかね自ら長沙の罪を避け、此日の本に筑紫瀧老一官と名を改め、浦人に契をこめ此男子を設けしゆる、母が和國の和の字を用ひ、父は唐人唐の聲をかたどつて、和藤内三官と名乗り、二十餘年の春も立ち秋も過ぎ行く十月の、小六月とて温かや、備中鉄に魚籠提げ身の活計を夕風に、フシ夫婦連立ち出にけり、地見渡せば沙頭に印を刻む鳥、沖洲にすたく浦千鳥、沙の干瀉を鋤返し蛤踏んでいろくの、チクリかいどりに小棲しよぼく濡れて、拾ひし貝は何々ぞ、寄生蟲、小螺子、蛤子貝、汐吹き上げの簾貝、ちらと見染し姫貝に、一筆書て送りたいらぎ、口開てはやく笑ふ、フシ赤貝に、心よせ

●蛤能く氣を吐て樓臺をなす 同じくはまぐりと稱する介蟲に蚌蛤の字を用ふ。蚌と蛤とは常のはまぐりにて、蚌には二種あり、一種は大蛤也、一名を車整といふ、然れどもよく氣を吐く蟹にてこれにはまぐりと稱するも、蚌に似て龍の屬なり、「本草綱目」に其の形蚌に似て大なり、角ありて龍の如しく氣を吐きて樓臺城郭の形をなす、まさしく雨降んとして見ゆ、是を樓臺又海市といへり。然るに近松

貝ア、いたら貝、君は酢貝と、フシ吸付ど、我は鮑の片思ひ、憎やそもじの蠅螺に喰せたいぞや榮螺貝、梅の花貝櫻貝、フシ寝もせて一人赤螺の、誰をまてとや、人の見るくい忘貝、我二人寢の床臥は、身に蜆貝祝貝門出、好しの螺貝は、悦びの貝とぞ取りにける、地中に一つの大蛤、日蔭に口を打開き、取る人ありとも白泡の汐を吹て盛上しは、實にや蛤能く氣を吐て樓臺を爲すといひしも、斯やと見認め居る處に、磯の藻屑に飛渡り、あさる羽音おもしろく、下り居る鳴のきつと見付け、嘴怒らし、フシ只一喙と狙ひ寄る、詞ヤアいはれぬ鳴殿、看經もする身で是が眞の殺生かい、蛤も蛤口をくわつとはかいむざん、地飛付てかちくく、喙

は鰓蚌のはまぐりと思へるにや杜撰なりと難波土産の大意なり。

あさる 鳥の餌を求むる事。

●看經もする身 鳴の看經とは、鳴の田澤にぬる時の閑寂なる姿をいへり。即ち羽搔きの騒々しきに反對なり。「吾吟吾集」に「羽根のさきの散を所作にや深鳴の、看經をする曉の夢」などあり。

●鳴の羽搔百羽搔 鳴が己の臂にて羽をしごく音の高く聞ゆるをいふ。但しこゝは鳴が無暗みに羽拍きして背つ状を形容したるなり。

●雪折竹に本来の面目をさと、臂を切て祖師西來意の輪を開きし神光といふ僧、佛祖に教を請んとて來りしも、祖はたゞ端座して教の詞なし、其の内に大雪降りて庭の竹を折りけれども、神光は去らず、夜の明るまで立居たりしかば、初祖あはれみて詞を交し、諸佛無上の妙道は、汝が如き小智小徳の僧心を以て得べきにあらずと、の僧聞くや否や、刀を以て左の肘を切りしかば、師はじめて其の篤

く處を貝合せに慥と喰締め動かせず、鳴は俄に興覺顔引つしやくつゝ羽拍きし、頭を振て岩根に寄せ、打碎かんず鳥の智恵、蛤は砂地の得物汐の溜へ引込んと、尻下りに引入る羽ぶしを張てばつと立ち、一丈計り上れ共、吊られ落ては又立上り、ばつと立てはころりと落ち、鳴の羽搔き百羽搔、フシ毛を逆立てぞ争ひける、地和藤内つくぐ、見て備中鉄カラリと捨て、詞アツア面白し、雪折竹に本来の面目を悟り、肱を切て祖師の西來意の輪を開きしも尤かな、斷りかな、地我父が教によつて唐土の兵書を學び、本朝古來名將の、合戦勝負の道理を考へ、軍法に心を委ねしに、今鳴蛤の争ひによつて軍法の奥義一時に悟り開けたり、蛤は貝の

志を感じ、教を垂れ、悟りを開きたりといふ。其の如く、和藤内も鳴蛤の争ひを見て、軍陣の奥義を悟りしとなり。

●鳴蛤の争ひ 鰓蚌の争は漁夫の利といふ諺をこゝに應用したるなり。

●連衡 合従連衡として周末、秦と韓魏趙燕楚齊の七國間に行はれたる外交政略をいふ。即ち合従は蘇秦が遠魏以下の六國を説き、同盟して秦に當らしめ、連衡は張儀六國を説きて秦と連合せしむるをいふ。即ち合従は秦を壓せん爲に、連衡は秦に屈伏せしむる爲に、なれば、始皇六國を呑んだる連衡とはいへるなり。

●相摸入道 北條高時。

堅きを頼んで鳴の來るを知らず、鳴は嘴の鋭に誇つて蛤の口を閉るを知らず、貝は放さじ、鳴は離れんと、前に氣を張て後を顧るに隙なし、爰に望んで我手を濡らさず二ツを一度に引攔むに最と易く、蛤貝の堅きも詮なく、鳴の嘴の尖りも、地終に其徳、フシなかるべし、是ぞ兩雄を闘はしめて其虚を討といふ軍法の秘密、唐土には秦の始皇、六國を呑んだる連衡の謀、詞本朝の太平記を見るに後醍醐の帝、天下の王として蛤の大口開きし政取締なく、相摸入道といふ鳴鎌倉に羽拍し、奢の嘴鋭く、吉野千早に潮を吹せ申せしに、楠正成新田義貞二ツの貝に嘴を閉攻られ、むしり取たる其虚に乗てうつせ貝、蛤共に攔しは逸物の高氏將軍武略に長

●延平王國性爺 鄭成功、初の名は森、父芝龍肥前の平戸に寓し、田川氏を娶りて森を産む、明の崇禎十一年、明に叛りて大學に入る、隆武元年芝龍太祖の遺孫唐王を立てて恢復を謀る、唐王芝龍を平南侯に封じ、又成功を御衛中軍都督に拜し、忠孝伯に封じ、朱姓を賜ふ、故に國性爺と號す。永曆十二年延平王に封せらる。

ぜし處なり、地誠や父一官の生國は大明韃靼鳴蛤の國争ひ今合戦最中と傳へ聞く、あはれ唐土に渡り此理を以て彼理を推し、攻戦ふ程ならば大明韃靼兩國を一呑にせん物をと、眼も放さず工夫を凝し、思ひ初たる武士の一念の末ぞ逞しき、地理かな此男子唐土に押渡り、大明韃靼を平均し、異國本朝に名を揚し、延平王國性爺は、フシ此壯士の事なりけり、地小むつ遠目になふなふ最う潮がさいて來る、何をきよろりとしてぞいのと走り寄て是はさて、鳴と蛤と口吸ふか女夫といふ事今知た、如何やら犬の様で見度もない、どりや放して取らせふと、笄拔て口押割れば、鳴も悦び蘆邊を指して、滿來る潮に蛤の、則ち隠れ沈みけり

もろこしふね

●鯨船 鯨船は形も普通の船と異なり、丹練等にて彩色したれば、唐船の麗はしきを見て之に似たりとなり。

●楊貴妃 玄宗の后。

地ハア時雨そふないざ歸らふと、見遣る洲崎に楫を絶へ、揺れ寄るは珍しい作りな船、詞鯨舟でもなし、唐の茶船か何ちや知らぬと船底見れば、唐土人と覺しく二八餘りの上臈の、芙蓉の顔柳の眉袖は涙の汐風に化粧も剥て面瘦て、哀れにも美しく雨に萎れし初花に、フシ目鼻を付し如くなり、詞小むつ小聲になりありや繪に書てある唐の后、徒らして流された物じやいの、ア、さうじゃく、好い推量、おれは悪ふ合點して、楊貴妃の幽靈かと思ふて怖かつた、何んでも好い女房じやないかいな、ムウ嫌らし唐の女房が目につくか、親

●なむきやらちよんのうとらや〜
 「難波土産」にある如く、此淨
 りの唐音は作者の出鱈目にし
 て、唯道理らしきうちに可笑味を
 交へ、ドツと笑はすやうに綴りた
 るのみ。こゝも阿彌陀如來の根本
 陀羅尼の詞をもちりたるなり。

●大明ちんしんにようろ、これも
 意味なし。

父様が始の様に唐にござつて、此方もあつちで生れた
 ら、彼の様な女房抱て寝さしやらふが、日本に生れた
 因果に妾が様な女房持て口惜からふの、ハテひよんな
 事ばかり、なんぼう美しうても唐の女房の 地衣裳付
 頭付、辨才天を見る様で勿體なふて氣が張て、フシ寝ら
 れはせぬとぞ笑ひける、 地其隙に上蔦濱邊に下りて夫
 婦を招き、 詞日本人く、なむきやらちよんのふとら
 やあ〜とありければ、 地小むつふつと笑ひ出し、あ
 りや何といふお經じやと腹を抱へて可笑がる、 詞ヤイ
 く笑ふな、あれは日本人爰へおじや、頼みたいとい
 ふ事と押除て立寄れば、 地上蔦涙に暮ながら、 詞大明
 ちんしんにようろ、君けんくるめいたかりんかんさう、

さいもうすがすんへいするともこんたかりんとんな、
 ありしてけんさんはいろ、とらやあ〜と、 地計りに
 て又さめくと泣給へば、 地小むつは濱邊に轉りと臥
 し、フシ腹筋捻て堪えかぬる、 地和藤内は常々父が詞の
 唐音覺へ、はつと手を突き頭を下げ、 詞うす〜うさ
 すはもう、さきがちんぶりかくさんきんないろきんに
 やう〜と手を打て、 地互にしみ〜手を取組、悲歎
 の涙睦じよ、小むつはくわつと急上げ胸ぐら取て是男
 詞唐人詞聞たふない、如何に徒らすればとて何時の便
 宜に唐三界、餘りな稼ぎじや、やい其處なとらやあや、
 此方の大事の男を能も〜きんにやう〜にしたなあ、
 日本にほんの男をとこの鹽梅あんばいは吸すふて見みる事こともなるまい、 地此鹽梅

喰ふて見よと備中鉄振上れば和藤内ひつたくり、
 イ目を開て悋氣せい、是こそ日比語りし父一官の古へ
 の主君、大明の帝の御妹梅檀皇女、國の亂にて吹流さ
 れ給ふとの御物語、見捨がたなくいたはし、直に我
 家へお供せば庄屋の斷り、代官所の詮議何の彼のと喧
 し、
 地 兎角親父と談合おぬしは内へ歸つて早々是へ
 同道せい、人の見ぬ中早うといひければ、小むつ
 もはつと、手を打つて、扱もくおいとしや同じ日本の
 内さへも、王位高貴の姫君は荒い風にもあてぬと聞く、
 況してやは見ぬ唐土の王胤の淺ましき御姿や、所も
 多きに爰へお船の寄事も、主従の御縁深きゆる、追付
 親父様呼んで來ませう、アアおいとしのとらやあや、

きんにやうくと涙にくれ、
 ナクリ家路にこそは歸り
 けれ、フンスとは知らず一官夫婦不思議の瑞夢蒙りしと、
 當國松浦の住吉に詣ふて歸るさの濱傳ひ、なふく
 地と聲をかけて招き寄せ、梅檀皇女亂國を遁れ御舟是
 へ流れよる、いたはしき有様と聞も敢ず一官夫婦、あ
 つと頭を地に付て、
 御聞及びも候はん某は昔への鄭
 芝龍と申す者、只今の妻や子は日本の者にて候へども、
 舊恩を報ぜずんば忠臣の道立つべからず、某こそ年寄
 たれ此忤兵事軍術を嗜み、御覽の如く骨太に生れ付大
 膽不敵の剛力者、今一度大明の御代に翻し、冥途に在
 す先帝の宸襟を安んじ奉らん、
 地 御心安く思召せと世
 に頼母しく申上れば、皇女御涙にくれ給ひ、扱は聞及

●悔の八千度 いく度も悔ひてやまざる事。

●軍法のおんくはう なるべし。

軍法の蘊奥

びたる鄭芝龍とは御身よの、詞李蹈天が惡逆韃靼國と心を合せ、弟帝を失ひ國を奪ひ、妾も既に害せられんとしたりしを、地吳三桂夫婦の臣が介抱にて、今日の今迄惜からぬ露の命のつれなさを、頼むと計り宣ひて、又さめくと泣給ひ、地互に通ずる詞の末、縁につるれば唐のものくひの八千度繰返す、昔語ぞ哀れなる、地母も袂を絞りかね實に誠斯様の事を承らん印にや、詞今朝曉夫婦變らぬ夢の告、軍は二千里を出て西に利ありといふ事を、まざくと見て候、ヤア和藤内、此夢を考へ君御出世の忠勤を勵む可し、如何にくくとありければ和藤内謹んで、只今某此濱にて鳴の鳥と蛤稀代の業を見受しより、軍法のおんくはうを悟開いて候

●本卦師の卦 〔雜註〕師の卦は六十四卦の一にて八卦の坤を上卦とし、坎を下卦としたる卦體なり、卦の義理は専らいくさの事を斷りたる卦也。

●凱歌 戦争に勝ち得意にして還る時に軍樂に合せる歌。
●天の時 地の利にしらず、地の利は人の和にしらず。

地千里を出て西に利ありとは、大明國は我國より西に方つて千里の波濤、軍法の字は三水に去と書く、三水は水なり、水を去とは此出汐の水に任せ、早く日本の地を去るべしとの神の告げ、我等が本卦師の卦に當て、詞師は軍の義なり、坤上坎下の卦體、一陽を以て衆陰をすぶるといつば、我一身を以て數萬騎の軍兵を従へ有つ大將、今三水のさす潮に早く日本の地を去つて、地南京北京に押渡り、浮世に存命あるならば、吳三桂と軍慮を合せ李蹈天が賊徒を滅し、軍勢催し韃靼へ逆寄に押寄せ、韃靼頭の芥子坊主、捻首貫き追伏せ切伏せ、御代長久の凱歌を上げん事、和藤内が心魂に徹する處、地天の時は地の利に如かず地の利は人の和に

●千里竹 虎は千里の敷にすむといふ諺に據つて作者が製造したる地名なるべし。

如ず、吉凶は人によつて日によらす、此儘直に御出船道すがら島々の夷を語り案の中なる軍せん御出陣と勇みしは、三韓退治の神功皇后艦舳に立しあらみさきをフシ今見る如き勢ひなり、地父は大きに感心し、ヲ、潔よし頼母し、誠や一粒の花の種は地中に朽ず、終に千輪の梢に上るといふ本文、フシ實に一官が子なるぞや、地我々夫婦も同船にて御供申べきが、大勢は目に立て所々の渡海の番所、國の咎め恐れあり、夫婦密に藤津の浦より出船すべし、おことは是より乗出し便よき小島に姫宮を預け置き、船路を變へて追付けよ、親子が忠心正直の頭に宿る神風は、船中何の氣遣なし、出合ふ所は唐土に隠れなき、千里が竹にて相待つべし、

急げくと姫宮にお暇申し、夫婦は遙に別れ行く、地和藤内姫宮の御手を引き、元の唐船に移し乗せ参らせ、押出さんとする處に、女房息を切て走り付き、船の纜しつかと取り、船ウム内には親父様母様も皆お留主、異な事と思ひしに道理こそ是じやもの、親子とつくと談合しめ、親御の國からお内儀呼び、此小むつを置去に親子夫婦四人連れ、唐へ身代引く氣じやの、餘り酷いつれない、何の見落仕落がある、唐高麗は愚かの事天竺雲の果迄も、共に連んと言交した二人の中、仲人もない挨拶ない、二人が胸と胸とに、起請も誓紙も納てある、地なんぼうあかれた中なりとも、今迄の情にせめて、同舟に乗せ、五里も十里も沖中の波に沈

めて、鯨や鮫の餌になりとも、夫の手から殺して下され藤内殿と、舳板を叩き泣きくどき放さん氣色はなかりけり、地エ、大事の門出不吉の吠面、其處立退け目に物見せんと權振上ぐれば、姫宮あはて縋りつき、留め給ふを押し除け權も折れよと、舷端たよき、威しに打つを身に受て、打れて死ねば本望と、濱邊にどうと臥轉び、聲も惜まず難きしが、調工、是でも死なれぬなア、よし／＼今は是迄結構者も事による、地此海底に身を沈め、嗔恚は嫉妬の大蛇となつて、もとの契は今日の仇今に思ひ知せんと、石を袂に拾ひ入れ巖の肩に攀上れば、駈上つて和藤内抱留て、調ヤイこりや粗相すな心底見付た、軍なかばの大明國、事太平に治るま

て、姫宮を汝に預け日本に留め置んと思へども、筋なき女の心を窺ひ、態とつれなく見せたるぞ、是四百餘州と釣替の姫宮を慥と預置からは、男の心かはらね證據、姫宮に仕へ奉るは、舅に孝行夫に仕ふる百倍ぞや、地命にかけて頼み入る、國治て迎ひの御船のお供せよと、宥むれば聞入て此方には氣遣せず、地随分無事で御座れやと、いへども弱る女心、責て一夜の覺悟もせず夢見た様な別れやと、夫の袖に縫付きわつと計りに泣叫ぶ、心の内ぞやるせなき、地和藤内も胸塞り、至極の思ひに目も暗み、フン共に心は亂るれど、地斯ては果じいざ去らば、さらば／＼の暇乞、梅檀女も涙ながら、調追付迎ひの輿を待つ、其時伴ひ歸るべし必ず早

●望夫山 武昌の北にある山の名。昔し貞婦あり、其の夫軍役に従ひ遠く國を去るに及び、婦は子を携へて此の山に饑送して夫を望み、悲み極まつて化して石と爲る。其の石を望夫石といひ、其の山を望夫山といふ。

●領巾磨山 肥前唐津の南東にあり。欽明帝の時、大伴佐手彦が妻佐用姫、夫の遣唐使となりて唐土へ渡るを悲み、化して石となるといふ。領巾は古へ、婦人の項に掛けて飾とする布帛なり、佐用姫は夫の船を戀ひて、山の上より之を脱して磨きつゝ、別を惜みたりといふ。

ふと宣へば、地畏つて和藤内泣く、船を押出す、又
 纜に取付て言残せし事あり、暫くのふと引留むる、エ
 、聞分なしと引切て船を深海へ漕出せば、詮方波に身
 を浸し、只手を揚て舟よなふ、舟よと呼へど出船の、
 かひなき巖に駈上り、足を爪立て延上り、見送る影も
 遠ざかる、唐土の望夫山我朝の領巾磨山、今の我身の
 我思ひ、石ともなれ山ともなれ、動かじ去らじと搔口
 説き、涙限り聲限り、互に寄れば招かれて姿を隠す沙
 曇り、聲を隔つる沖津波、沖の鷗磯千鳥泣き焦れてぞ
 三重

千里か竹

●天啓五年

熹宗の即位五年也。

昔別れ行く、舟路の末も不知火の、筑紫は雲に埋
 めども跡に、應護の神風や、千波萬波を押切て、時も
 違へず親子の舟、唐土の地にぞ着きにける、地鄭芝
 龍一官は、故郷へ歸る唐錦、装束引替へ妻子に向ひ、
 我本國と云ひながら時移り代變り、天下悉く李蹈天
 が引入にて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて誰
 を尋ん様もなく、司馬將軍吳三桂が生死の所在も知れ
 ざれば、調何を以て義兵の旗を揚げ、何處を一城に楯
 籠るべき所もなし、然に某去る天啓五年此國を立退き
 日本へ渡る時二歳になりし娘の子を、乳母が袖に捨置
 しが、其子が母は産落して當座に死す、地かくいふ父
 は八重の沙路の中絶えて、何時父母も知らぬ身が、育

●草木の雨露のめぐみに長ずる如く
〔關註〕 謡曲熊野に「草木は雨
露のめぐみ、養ひ得ては花の父母
たり」云々とあり。

●潯陽の江 謡曲にもある通り、
潯陽は大河あり、猶々の栖むを以
て有名なり。

●赤壁とて昔東坡が配所 〔雜註〕
赤壁は三國の軍に魏の曹操が呉の
周瑜に舟を燒かれて敗北せし所也
宋の蘇軾を東坡と號す、朝廷より
罪せられて流され、此赤壁の下に
遊ぶ、東坡が赤壁の遊び前後に二
度にて、前赤壁の賦後赤壁の賦な

てば育つ草木の雨露の恵みに長ずる如く、天地の父
母の助けにや 成人して今五常軍甘輝といふ大名、一
城の主の妻と成る由、商人の便に聞及ぶ、頼む方は是
計り、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聾の甘輝も
やすくと頼まるべし、是より路の程百八十里、打連
れては人も異しめん、地我一人道を變へ和藤内は母を
俱し、日本の獵船の吹流されしと、頓智を以て人家に
憩ひ追付べし、詞是より先は音に聞ゆる千里が竹とて
虎の栖む大藪あり、地それを過れば潯陽の江、これ猩
々の佳所、風景聳へし、高山は赤壁とて、昔東坡が
フシ配所ぞや、それよりは甘輝が在城、獅子が城へは
程もなし、其赤壁に待揃へ、萬事を牒合すべしと、方

●つくりて其の遊びの樂を詠ぜり。
●獅々の城 假設なるべし。潯陽
の江、赤壁、誰も知る支那の地名
に、千里が竹、獅々の城などある
らしき地名の配合の手際頗る妙な
り。

●ほうとくわを抜かし 途方に暮
れたる様子。但し字義詳ならず。

●小豆の飯の相伴 童話に、狐に
魅されて赤の飯を馳走になる事あ
れば、小豆の飯の相伴といへり。

●ちやるめら 「三才圖會」に太平
篇、喇叭の如くして七吼あり、首

角とても白雲の、日影を心覺えにて東西へこそ 三重
別れけれ 地教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、
甲斐なくしく母を負ひ、たつきも知らぬ岩巖石、古木
の根ざし瀧津波、飛越え跳越え飛鳥の如く急げども、
末果しなき大明國、人里絶えて廣々たる、フシ千里が竹
に迷入る、地和藤内ぼうどくわを抜かし、詞なふ母者
人、此脚骨に覺えたり、最う四五十里も來せうが、
人にも猿にも逢ふ事か、行けば行くほど藪の中、ムウ
合點たり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな、
魅さば魅せ宿なし旅の行付次第、小豆の飯の相伴と、
根笹大竹押分け踏分け、猶奥深く行先に、怪しや數萬
の人聲攻鼓攻太鼓、喇叭ちやるめら高音を反し、ナクリ



太平翁

尾銅を以てつくる、軍人の樂なるべしと。

●虎嘯けば風起る (關註)古樂府の中にも、虎嘯谷風起、龍興景雲浮と見えたり。

●二十四孝の揚香 揚香十四歳の時、父に従ひ農業に出しに、虎出て父を銜へ去る、時に揚香手に寸鐵なきも、唯父あるを知りて危険あるを知らず、踴躍して虎に組み付き、其の頸を益しければ、虎驚いて父を放ち逃げ去りしといふ。二十四孝中におり。

●四天の獅子王 四天は天然をさす。經文中に獅子王の事あれば西

ひやうくとこそ聞こけれ、地スハ我々を見咎めて敵の取巻く攻太鼓か、又は狐の爲す業かと、茫然たる其の折節、空凄じく風起り、砂を穿ちどろどろ、竹葉颯と巻き立てく吹き折る、竹は劍の如く、フン凄然なんともおろかなり、地和藤内些とも臆せず、讀めたりく、聞さては異國の虎狩な、彼の鉦太鼓は勢子の者、爰は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る猛獸の所爲と覺えたり、二十四孝の揚香は、孝行の徳によつて、自然と脱れし悪虎の難、地其孝行には劣るとも忠義に勇む我勇力、唐へ渡つて力始め、神力をすく日本力双でむかふは大人氣なし、虎は愚か象でも鬼でも一挫ぎと、尻引からげ身繕ひ、母を圍ふて立たるは、西天

天の獅子王とはいへるなり。

●大童 髪を振り亂したる形。

●神より受けし身體髮膚 「孝經」に「身體髮膚受之父母、不三敢毀傷、孝之始也」との本文に據れり。日本は神國といひて、神の末なれ

の獅子王も、フン恐れつべうぞ見えてけり、案に違はず吹風と共に荒たる猛虎の形、藤根に頬を摩り付けく、岩角に爪研ぎたて、二人を目がけ嗥みかゝるを事ともせず、弓手に撲り馬手に受け、振つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上に成り下に成り、命競へ根競へ、聲を力にゑいぐぐ、虎の怒毛怒聲、山も頽るゝ三重、如くなり、地和藤内も大童虎も半分毛を挽られ、兩方ともに息疲れ石上に突立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息吐いだる其響き、フン吹鞆吹が如くなり、母藪隠より走出て、詞ヤアく和藤内、神國に生れて神より受けし身體髮膚、畜類に出力立して怪我するな、地日本の地は離るゝとも、神は我身に五十

●は神より受けしとはいへるなり。
五十鈴川 みもすそ川ともいふ。
内宮の傍らにあり。

●天班駒 「神代記」に素盞鳴尊、
天の班駒を逆刺にして天照大神の
齊服殿へ投込み給ふ事あり。

●風來人

鈴川、大神宮の御被納受などかなからんやと、肌はだの守まもを渡わたさるれば實じつに尤もつともと押おし戴いたき、虎こに差さ向むけ差さ上あれば、神國しんこく神秘じんひの其その不思議ふしぎ猛たけりに猛い勢はひも、忽たちち尾おを伏ふせ耳みみを垂たれ、じり、く、と四足ししきを縮ぢめ、怖おそれ戦いくさき岩洞がんどうに隠かくれ入いる、尾筒おびつを搦つかんで跳返はな返し、打伏うちふせ、怯おそむ處ところを乗懸のりかり、足下あしもとに確しつかと踏ふへしは、天班駒あまのま素盞鳴すそのみ蓋尊ののみことの神しん力りき天照あまてらす、神かみの威德ゐとくぞ有あり難がたき、地ちかゝる處ところに勢子せこの者もの群むらり來きたる其中そのなかに、大將たいしやうと覺おぼしき者もの大音だいおん上げ、詞ことばヤアヤアうぬは何國いづくにの風來人ふうらいじん、我わがが高名かうみやうを妨さまたぐる、其虎そのこは忝かたじけなくも主君しゅくん右將軍うしやうじん李り踏天とうてんより、韃靼王だたんわうへ獻上けんじやうの爲ため狩出かりだしたる虎こ成なるぞ、早々はや渡わたせ異議いぎに及およば、打殺うちころさん、しやぐはんくくと喚わめきけり、地ち李り踏天とうてんと聞きよりも願ねがふ處ところと

●笑つば
●餓鬼も人數 俚語に、餓鬼も人
數膝とも談合などいふ。

笑わらつばに入り、詞ことばヤア餓鬼がきも人ひと數かずしほらしい事ことほざいたり、身みが生國しやうこくは大日本だいじっぽん風來ふうらいとは舌長したながし、左程さほど欲ほがる虎こならば、主君しゅくんと頼たのむ李り踏天とうてんとやらところてんとやら、爰こゝへ突出つくだし詫事わひごとさせい、直ただに逢あふて用もちも有ある、左ひだりもな内うちはいかな事ことならぬくと睨にら付つる、地ちヤア物ものな言いはせそ討取うちとれと一度いちどに劍けんをはらりと抜ひく、心得こころえたりと守まもるを虎この首くびにかけ、母ははの傍そばに引据ひきすれば、フシ繋つなぎし如ごとくに働はたらかず、チ、心易こころやすしと太刀指たちさし鬚ひげし、群むらる中なかへ割わて入り、八方無盡はつぱうむじんに、フシ割立わりたて、撫捲なでまくる、地ち勢子せこの大將安大たいしやうあんたい人ひと、官人引具くわんじんひきぐし立歸たちかへり、詞ことばおのれ老髭餘おひはれあまさじと一文いちもん字じに切きかゝる、地ち猶なほも神明應護しんめいおうごの驗しるし、神力しんりき虎こに加くわはつてむつくと越こて身慄みぞろし、敵てきに向むかひ齒はを鳴ならし猛たけりうなりて

飛菟る、這は叶はじと安大人、勢子の者が差たる劍、
 かり鉾数鎗手に當るを幸ひに投付く、三重打かくる、
 虎は神力自在を得、劍を宙に引喰へく、岩に投當て
 微塵になす、双の光り玉散る霰、氷を碎くに異ならず、
 打物つくれば官人ども色めき立て迷惑ふ、後より和藤
 内どつこい遣らぬと顯はれ出、安大人が素首を擱んで
 指上げ、くるくると振廻し、ゑいやつと打付ければ、
 地岩に熟柿を打つ如く、地五體ひしげて失せにける、
 此勢に官人原跡へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤
 内、二王立に突立たり、調ア、申し御堪忍、地御免
 くんと手を合せ、調土に喰付き泣居たる、調和藤内虎
 の脊を撫で、うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへ怖

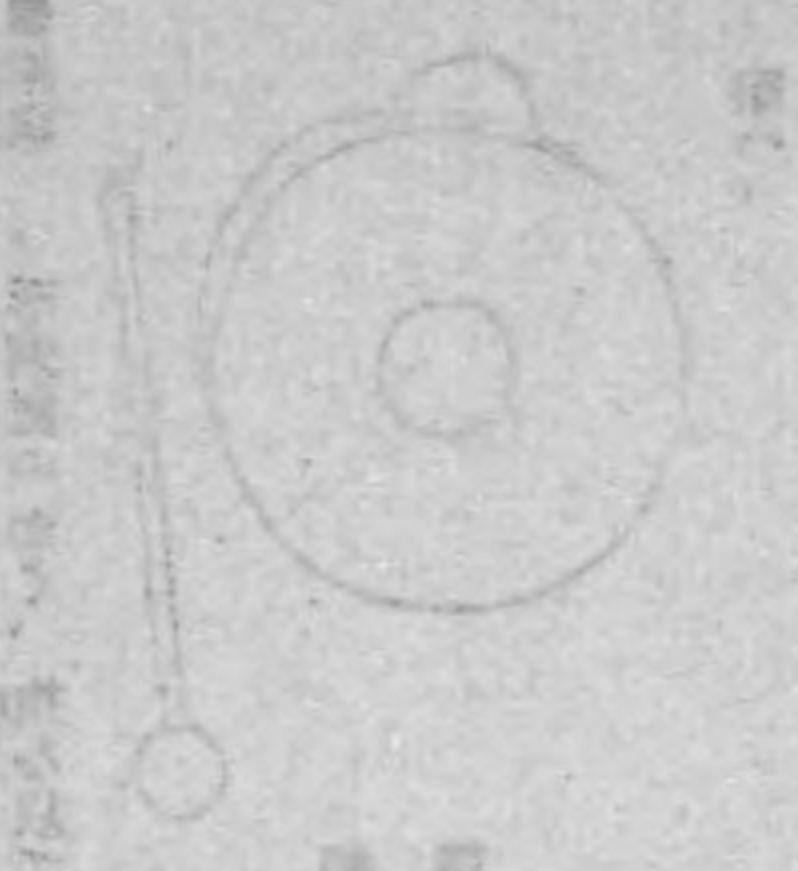
●三世の恩 佛説に、親子は一世
 夫婦は二世、君臣は三世の縁ある
 ことを説けり。

がる日本の手並を覺えたか、我こそ音に聞えたる鄭芝
 龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤内とは我事な
 り、先帝の妹宮梅檀皇女にめぐりあひ、三世の恩を報
 ぜん爲、父が故郷へ立歸り國の亂を治るなり、サア命
 惜くば味方につけ、いやといへば虎の餌食、否か應か
 と詰めかくる、ナフ何の舌で御坐りましよ、鞆鞆王に
 従ふも李踏天に従ふも命が惜さ、向後お前の御家來共、
 お情頼み奉ると地に鼻付て畏る、地チ、出来したく
 去ながら、我家來に成るからは日本流に月代剃て元服
 させ、名も改めて召使はんと、指添の小刀はづさし、
 是も當坐の早剃刀、母も手々に受取て、竝ぶ頭の鉢の
 水揉や揉ずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら、絲

●ちやぐちう左衛門 以下異國の名を人の名に附けて呼ぶ。

鬢厚鬢剃刀次第、瞬間に刺仕舞二櫛半のばらけ髪、頭は日本髭は韃韃身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引て、噫く村さめくと、フン涙を流すぞ道理なる、地親子どつと打笑ひ、揃ふも揃ふた供廻り名も日本に改めて、詞何左衛門何兵衛、地太郎次郎十郎迄、面々が國所、頭字に名乗二行に立てばつたてろ、承り候とお先手の手振の衆、ちやぐちう左衛門、東蒲塞右衛門、呂宋兵衛東京兵衛、暹羅太郎白城次郎ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎すん吉九郎、もうる左衛門、じゃが太郎兵衛、さんとめ八郎英吉利兵衛、今參のお供先、跡に引馬虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る口取る國を取る、譽は異國本朝に、踏

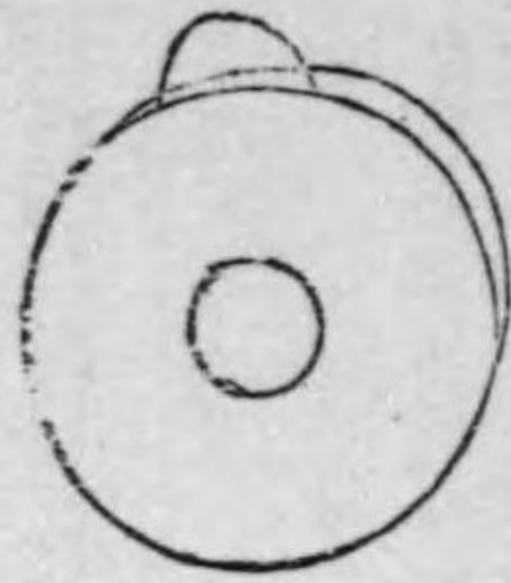
●仁ある君も用なき臣は養ふ能はず云々 此の語につきては、關根氏の註に詳しき考證あり。其の本文は曹植求が自試表「慈父不能愛無益之子仁君不能養無用之臣」なりと。



第三

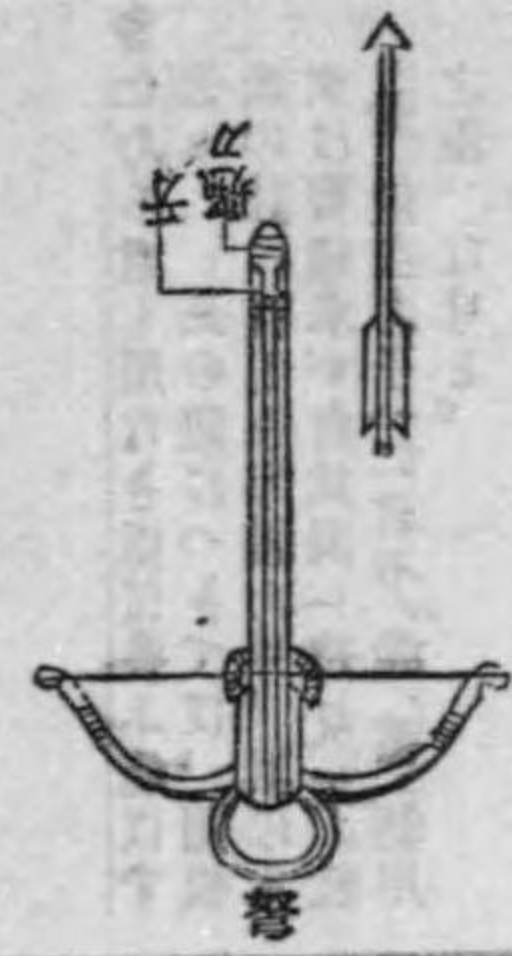
跨げたる鞍鏡、虎の背中に打乗て、姿勢を千里に顯はせり、
地仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず、慈ある父も益なき子は愛する事能はず、大和唐土さまくに道の巷は別るれど、迷はて急ぐ誠の道赤壁山の麓にて、親子三人めぐりあひ我智と計り聞及ぶ、五常軍甘輝が館城、フン獅子が城にぞ着にける、地聞しに優る要害はまだ牙返る春の夜の、霜に閃く軒の瓦鯨鋒天に緒振て、石壘高く築上たり、地堀の水藍に似て繩を引が如く、末は黄河に流れ入り樓門堅く鎖せり、城内には夜廻りの

●銅羅 形銅盤の如く、抱を以て



銅羅

●弩 おほゆみは其の製作種々あり、大なるものは數十人を以て張る、又器械にて張るものあり。



弩

銅羅の聲喧しく、矢間に弩隙間なく、所々に石火矢を仕掛置き、すはと言はゞ、打放さん其勢、和國に目馴ぬ要害なり、地一官案に相違し、亂世といひ、斯る城門事々しく、夜中にたゞき聞も馴ぬ勇が、日本より來りしなるといふとも誠と思ひ取次者も有まじ、假令娘が聞たりとも二歳で別れ、日本へ渡りし父と如何なる證據を語るとも、容易く城中へ入れん事難かるべし、如何はせんとぞ嘯きける、地和藤内聞もあへず、今更驚く事ならず一身の外味方なしとは、日本を出る時より覺悟の前、遂に見ぬ勇よ智よと親みだてして、不覺を取らんより頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否といはゞ即座の敵、二歳で別れし娘なれば我等とも行

合姉、彼奴孝行の心あらば、日本の風も懐しく、文の便もあるべきに頼まれぬ心底、我竹林の虎狩に従へし島夷を、軍兵の元手にして切靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付くは隙入らず、何の人頼み此門蹴破り不幸の姉が首捻切り、聲の甘輝と一勝負と、躍出れば母絶付押し止め、詞其娘御の心入は知らねども、夫に連れ世の中の儘にならぬは女のならひ、父とは親子御身とは胤一つ、他人は自ら一人にて海山千里を隔て、も、繼母といふ名は脱れず、娘の心に親兄弟戀慕ふまゝいものでもなし、其處へ切込んで日本の繼母が妬みなりといはれんは、我耻ばかりか日本の國の耻、御身不肖の身を以て、韃靼の大敵を攻破り、大明の御代に

回さんと大義を思ひ立つからは、私の耻を捨て我身の無念を堪忍し、人を懐け従へ一人の雑兵も、味方に招ぎ入るこそ、軍法のフシもと聞かぬ、地況して婿の甘輝は一城の主、一方の大將是を味方に頼むこと、大方にて成べきか、心をさめ、案内せよと制すれば、和藤内門外に大音上、五常軍甘輝公直談申度事あり、開門くとたゞきは城中響く計りなり、當番の兵士聲々に、主君甘輝公は大王の召に依て、昨日より出仕あり何時御歸りも計られず、御留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極、言ふ事あらば夫から申せ、御歸りの節披露して取らすべしとぞ呼はりける、一官小聲になり、いや人傳に申す事ならず、甘輝公の

●鏡鉢 今も佛家の樂器中にあり、鑿銅にて作る、圓くして皿の如し二枚を擊合せて音を發す。

留守ならば、御内室の女性へ直に逢ふて申すべし、日本より渡りし者と申せば合點のある筈と、地いひも果ぬに城中騒ぎ、我々さへも面を拜まぬ御臺所、對面せんとは不敵者殊に日本人とや、油斷するなと高提灯、銅羅鏡鉢を打立く、塀の上には數多の兵、鐵砲の筒先揃へ、石火矢放して打みしやげ、フシ火繩よ玉よと轟きける、地奥へ斯とや聞えけん妻の女房樓門に駈上り、調ア、騒ぐなく、聞届けて自らがそれよと聲をかくる迄、鐵砲放すな粗忽すな、なふく門外の人々、五常軍甘輝が妻錦祥女とは我事、天下悉く韃靼の大王に靡き、地世に従ふ我夫も大王の幕下に屬し、此城を預り守り嚴き折、夫の留守の女房に逢はんとは心得ず去

ながら日本とあれば懐し、身の上を語られよ、聞まほしやと云ふ中にも若や我親か、何故尋ね給ふぞと心遣ひぞ道理なる、地一官も始て見る娘の顔も朧月、涙に曇る聲を上げ、詞粗忽の申し事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しく成り、父は逆鱗被り日本へ身退く其時は二歳にて、地親子名残の憂別れ辨へなくとも乳母が噂、物語にも聞つらん我こそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を経て、今の名は老一官、詞日本で設けし弟は此男、是れ成るは今の母、地私に語り頼みたき事ありて、成果し此姿耻を包まず來りしぞ、門を開かせたべかしと、しみく口説く詞の末、地思ひ當りて錦祥女、扱は父かと飛下て、継付

●胡亂 胡說亂道といふ唐土の俗語を切て之を唐音のうらんといひ習はしたるものにて、みだりがはしき事なり。

たや顔見たや心は千々に亂るれど、有繫一城の主甘輝が妻、下々の見る處涙を押へて、一々覺えある事ながら、證據なくては胡亂なり、自が父といふ證據あらば聞まほしと、詞いふより兵口々に證據く、證據を出せく、ハテ親子といふより別にかはつた證據もなし、地そりや曲者よと鐵砲の筒先、一度にばらりとつゝかくる、和藤内掛隔て、詞無用の鐵砲ぼんともいはせば撫斬にしてくれん、地イヤしやつめ共に遁すなど、火蓋を切て取圍み、證據くと責かけて、既に危く見えけるが、詞一官兩手を上てア、是々證據は其方にある筈、一歳唐土を立退く時、成人の後形見にせよと、我形を繪に寫し、乳母に預置つるが、地老の姿は變る

とも併残る繪に合せ、疑ひを晴れ給へなふ其詞かはや
 證據と、肌はだに放はなさぬ姿繪すがたゑを高欄かうらんに押開おしひらき、柄付へらつきの鏡取かがみとり
 出し、月つきに映うつふ父ちちの顔かほ、鏡かがみの面おもてに近々ちかぢかと寫うつし取とり引比ひきくら
 べ引合ひきあせて、能々さまざま見れば繪ゑにとゞめしは古いにしへの顔かほも艶つやあ
 る翠みどりの鬢びん、鏡かがみは今いまの老窠おひやつれ、頭あたまの雪ゆきとかはれどもかは
 ちで残のこる面影おもかげの、目元めもと口元くちもと其儘そのままに我影わがかげにも左ひだりも似にたり、
 父方ちちかた譲ゆづりの額ひたいの黒子くろこ、親子おやこの印しるし疑うたがひなし、扱まは誠まことの父ちち
 上うへか、なふ懐なつかしや戀こひしや、母ははは冥途みよとの苔こけの下した、日本にっぽんと
 やらんに父上ちちうへありとばかりにて、便たよりを聞きん知邊しるべもなく、
 東ひがしの果はと聞きくからに、明あれば朝日あさひを父ちちぞと拜おがみ、暮くれれ
 ば世界せかいの圖ずを披ひらき、是こゝは唐土たうと是こゝは日本にっぽん、父ちちは爰こゝに在あす
 よと、繪圖ゑづでは近ちかいやうなれど、三千餘里さんぜんじゆりの彼方あなとや、

此世このよの對面たいめん思おもひ絶たえ、若わや冥途みよとで逢あふ事こともと、死しなぬ
 先まづから來世らいせを待まちち、歎なげきくらし泣なあかし、二十年にじゅうねんの夜よ
 晝ひるは、我身わがみさへ辛つらかりし、能よふ生なて居ゐて下くださつて、父ちち
 を拜おがむ有難ありがたやと、聲こゑも惜おしまぬ嬉うれし泣なき、一官いっくわんは咽返ひげかへり
 樓門ろうもんに縋すが付き、見上みあれば見下みくだして、心餘こころあまりて詞ことばなく、
 フン 盡つぎぬ涙なみだぞあはれなる、地ち武勇ぶゆうに逸はる和藤内わとうない、母諸ははもろ
 共に伏沈ふしちんめば、心こゝろなき兵つはものもこぼす涙なみだに鐵砲てつぱうの、フン 火繩ひなは
 も濕しめるばかりなり、地ち稍有すくつて一官いっくわん我々われわれ是こゝへ來くる事こと、
 詞聲しせいの甘輝かんきを密ひそかに頼たのみ度たぎ一大事いちだいじ、先々まづまづ御身ごみに語かたるべし、
 門開かどひらかせて城内じやうないへ入いれてたべ、なふ仰おほせなくとも是こゝへ
 と申まうす筈はずなれども、此國このくに未いまだ軍半いくさなかば、韃靼王たたんわうの掟おきてにて
 親類縁者おんるゑんじやたりとも、他國者たこくものは城内じやうないへ豎かたく禁制きんせいとの掟おきてな

きこらい云々 (難註) 此淨
 るりの唐音は、前にもいふとほり
 譯もなき事なり、きこらいは歸去
 來の字を用ひたれども、是も唐音
 にては歸去來なれば合す、ひんく
 はんたきつふをんくも唐音を以
 て文字に合せれば相應なることも
 有べけれ共す、近松の唐音はみ
 な頼作にて、其のかはりなし云
 々。

り、されども是は格別こりや兵共、地如何せんと有け
 れば、了簡もなき唐人共、いや／＼思ひも寄らぬ事成
 らぬ／＼、詞きこらい／＼、びんくはんたきつ、ぶお
 ん／＼と、地又鐵砲を差向へば、人々案に相違して
フシ呆れ果て見えけるが、地母進み出尤も／＼、詞大
 王より掟とあれば力なし去ながら、年寄た此母に何の
 用心入るべきぞ、彼の姫に只一言物語する計り、妾一
 人通して給へ誠浮世の情ぞと、地手を合せても聽入れ
 ず、いや／＼女とて宥免せよとの仰せはなし、詞然ら
 ば我々了簡して、城内にある中は、繩をかけて縛置き
 繩付にして通せば、韃靼王へ聞えても主君の言譯、我
 等が身晴れ、地急いで繩かゝれよ夫が否なら、詞きこ

●どんな事

問の抜けた事。

●足かせ手かせ
 足かせは足に打
 つ械。手かせは手錠なり。

らい／＼びんくはんたきつ、ぶおん／＼と睨つくる、
詞和藤内眼をくわつと怒らし、ヤイ毛唐人、うぬらが
 耳は何處に付て何と聞く、忝くも鄭芝龍一官が女房身
 が母、姫の爲にも母同前、犬猫を飼ふ様に繩付けて通
 さんとは、日本人はどんな事聞て居ぬ、小むづかしい
 城内入らいても大事な、サア御坐れと引立る母振放
 し、それ／＼今言しを忘れしか、大事を人に頼む身は
 幾度か様々の、憂目もあり耻もある、繩はおろか足架
 手架にかゝつても、願さへ叶はゞ瓦に金を換るが如し、
地小國なれども日本は男も女も義は捨ず、繩かけ給へ
一官殿と耻しめられて力なく、用心の腰繩取出し、高
 手小手に縛上げ、親子が顔を見合せて、笑顔をつくる

日本の、フシ人の育ちが健氣なる、地錦祥女も堪えかねる歎きの色を押包み、何事も時世にて國の掟は是非もなし、母御は自が預る上は氣遣なし、何事か存せねども、御願の一通り、お物語承り、夫甘輝に言ひ聞せ、何卒叶へ參らせん、詞扱此城の廻にほつたる堀の水の上は、自が化粧殿の庭より落る遣水の、末は黃河の川水と流れ入る水筋なり、地夫の甘輝が聞入て御願ひ成就せば、白粉解て流すべし、川水白く流るゝは、目出度印と思召勇んで城に入給へ、又御願ひ叶はずは、紅をといて流すべし、川水赤く流るゝは叶はぬ右左と思召母御前を受取に門外まで出給へ、善惡二つは白妙と唐紅の川水に、心を付けて御覽ぜよ、さらばくと夕月に

●菩提門、無明門 前に生死の境とあるを受け、事の成就するを菩提門に、破るゝを無明門に譬へたり。

●十惡五逆 *

門の戸さつと押開き、伴ふ母は生死の境、菩提門を引かへて是は浮世の無明門、貫の木丁と下す音、錦祥女は目も暮て弱きは唐土女の風、和藤内も一官も、泣ぬが日本武士の風、大手の門の閉開に石火矢打つは韃靼風、一つに響く石火矢の音に聞さへ 三重遙か成り、フシ夢も通はぬ、唐土に 小チクリ通へば通ふ親子の縁、恩愛の綱結び合、結ぶ餘りの縛繩、かゝる例は異國にも、稀に咲出す雪の梅、色音は同じ鶯の、フシ聲にぞ通辭入らざりし、地錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の褥三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て、重んじ饗す有様は、地上の榮花とも、又高手小手の縛は十惡五逆の科人共、見る目いぶせくいたはしく、

様々に給仕へ誠の母といたはりし、心の内こそ殊勝な
 れ、地腰元の侍共女寄集り、何と日本の女子見てか、
 目も鼻も變らぬが可笑い髪かみの結むす様、變つた衣裳いしやうの縫ぬい様、
 若い女子も彼であらふ、裾すそも襷たすもほらくほらくと、
 はつと風が吹たら太股またももまで見えそうな、ア、耻はづかしい事
 じやあるまいか、いや／＼迎むかも女子をんなに生うまれるなら、此
 方こゝや日本の女子をんなになりたい、何故なぜといや、日本にっぽんは大き
 に和やわく大和やまとの國くにといふげな、何と女子をんなの爲ためには、大き
 に和やわかな好このもしい國くにじやないかいの、ホウ有あり難がたい國くにじ
 やのと、フシ眼めを細ほそめてぞ領うらきける、地錦祥女立にしんじやうにたち出いで是こゝ々
 面白おもしろさうに何なにいふぞ、彼方あなは自みづからはなさぬ中なかの母はは上うへな
 れば、孝行かうかうといひ義理ぎりといひ、誠まことの母ははより重おもけれども、



●龍眼肉
 名 熱帯地方に産する果の

國くにの控おきて詮せん方かたなく縛しばり搦なめるおいとしさ、地韃靼王ぢたんてんわうへ漏
 聞きえ、連合つれあひに咎とがめあらふかと、宥免ゆうめんもなりがたく難義なんぎ
 といふは我身わがみ一つ、何れも頼たのむ食物じよくも違ちがふとや、お口
 に合あふ物もの伺かふて、進すすめてくれよと宣のたまへば、詞ことばイヤ申如まうし如
 才さいもなふお料理らいりも念入ねんいれ、龍眼肉りゆうがんにくのお飯めし、お汁じゆは家鴨けいあひの
 油揚豚あぶらあげぶたの濃汁羊のうじゆじやうの濱焼はまやき、牛うしの蒲鋒種かまぼこ々さまざまにして上あても、
 なふ忌々いまくしいそんな物ものいや／＼、縛しばられて手ても叶かなはぬ、
 つい握飯ひぢりめしをしてくれと御意ごいなさるゝ、其握飯そのひぢりめしといふ喰く
 物ものは、何なんの事ことやらどうも合點がてん參まらず、皆打寄みなうちよりて詮議せんぎい
 たせば、日本にっぽんでは相撲取すもうとりをむすびと申まげな、地それゆ
 る方々尋ねても、折しも悪わるふお齒はに合あひそな相撲取すもうとりが、
 フシ切物きりものなりとぞ申まげる、地表ちへいに轟とどろく馬車御歸館うまぐるまごきんと呼よぶ